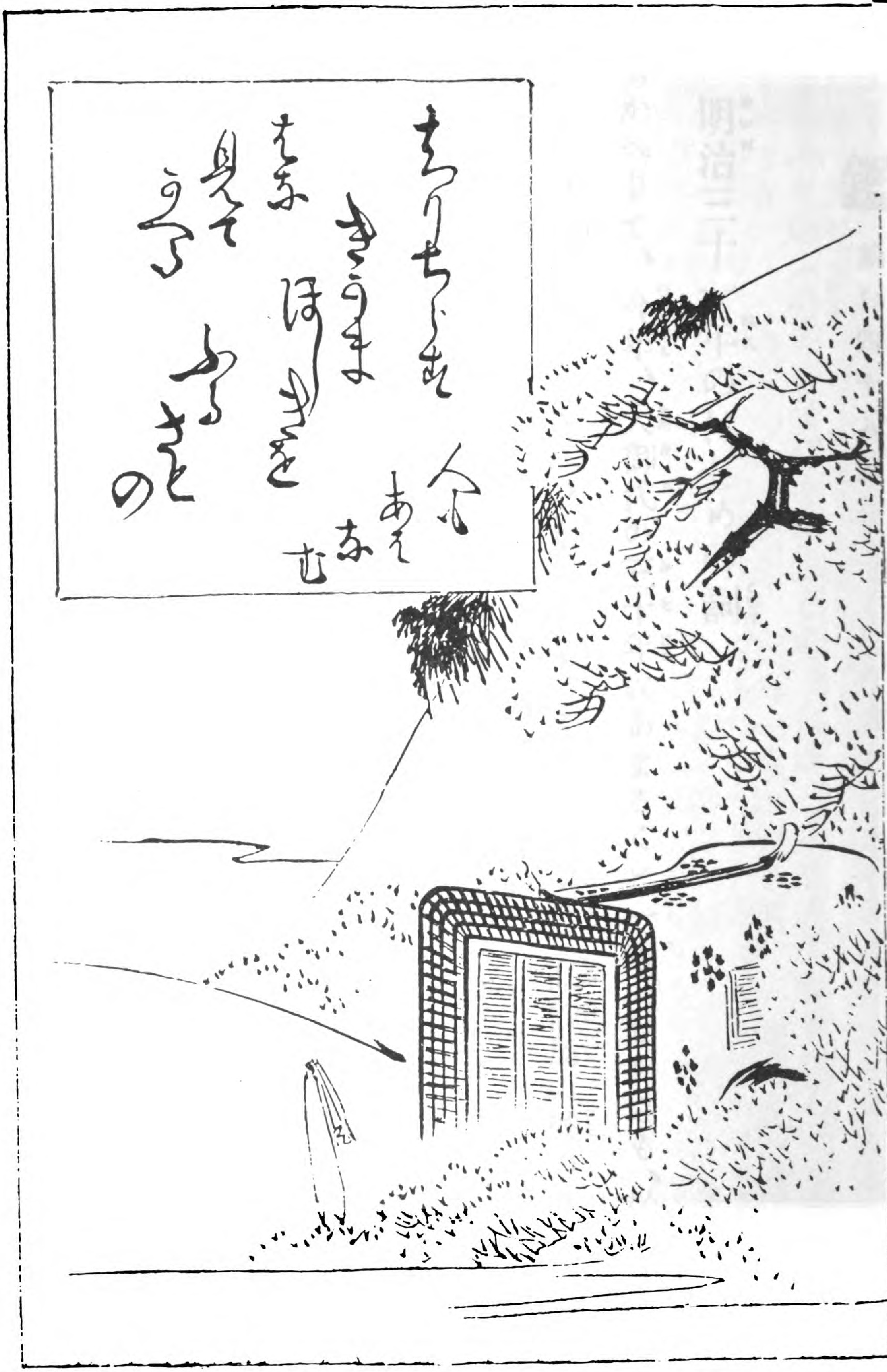

文藝

女鑑第百四拾八號

目録

伊勢御息所



明治三十一年のはじめの詞

年たちかへりて、今年、大御代の三十年にあまること一年。たかきも、ひきゝも、おしなべて、齢一歳をかさね、北は千島がさきより、南は高砂島の磯のさきまで、八州の國内は更なり、海表にあるもみな、誰かは大君の八千代をことほぎ奉らざらん。今こゝに年はあらたまれり。いざや今年も、もろともに、はげみいそしみて、内にしては、家をおこし、外にしては、いやが上に國の光をかゞやかしめてん。この心、日本の國に産れたらんもの、誰かはひとしからざらん。天地わかれしより以來、天つ日嗣いやさかえにさかえまして、ちりだも他しにごりにまじこりけがれしあともなし。千よろづのわが國人。ゆめなたゆ

みり。いでや、つるぎたち利心ふりおこせ。婦女とて、おほろかにやはあるべき。

愛

愛は、人倫の大道なり。人は、愛といふ心情あるが故に、よく一身をなし、一家をなし一國をなしゆくなり。親子の愛、同胞の愛、夫婦の愛、朋友の愛、國人の愛、君臣の愛、皆、愛といふ心情あるが故に、親子の間美はしく、同胞の間やさしく、夫婦の間むつまじく、朋友の間親しく、國人の間かたく、君臣の間めでたく、よくむつまじく、美はしき一家一國をなすを得るなり。此の愛といふ心情の無かりせば、親子の間も、同胞の間も、夫婦の間も、朋友の間も、國人の間も、君臣の間も、一も能く睦まじく美はしかるべきを得ず、睦まじく美はしき一家一國たるを得ざるべし。愛といふ心情は、實に一家の成る所、一國の立つ所にして、誠に人倫の大道なり。

此の愛情なるものゝ性質、及び由來を問ふ時は、先天的のものもあれば、また習慣

より來れるものもあらむ。弱き者をあはれむといふ心より起るもあれば、強き者の
を尊び慕ふと、いふ心よりはじまれるなど、なほ、さまぐ\なるべし。されど、吾人は、さる細かなる愛情の性質由來は、これを他日に讓りて、愛情が中の最高尚なるもの、やがて、最美はしきものを、こゝに論ぜんとするなり。

人の愛情の中にて、最高尚なる、やがて、最美はしきものは、即、他を愛するといふ情なり。而して、他を愛するとは、他の幸福の爲に、他の利益の爲に、他を愛することにて、自巳の幸福の爲に、自巳の利益の爲に、他を愛するにあらず。自巳の爲に、他を愛したるにては、誠に他を愛するに非ず、誠に美はしき愛にはあらざるなり。必、他の幸福の爲に他の利益の爲に他を愛せざるべからず。それは、即、其の人の心の樂しからむやうに、其の人の身の安らかならむやうにとのみ、まめやかに心がけめづることなり。かくせば、誠に其の人を愛するにて、誠に美はしき愛といふものなるべし。

彼の親子の愛、同胞の愛、夫婦の愛、朋友の愛、國人の愛、君臣の愛、皆、また、

斯の如き愛ならざるべからず。則、親は、我が子の心の樂しかれ、我が子の身の安らかなれとこそ、常にまめやかに心がけ、子は、また、我が親の心の樂しかれ、我が親の身の安らかなれとこそ、常にまめやかに心がくべし、かく互に、常に他をまめやかに愛であはゞ、親も、子も、共に樂しく安らかなるべく、是、實に親子の愛たるものなり。なほ、夫婦の愛につきて云はむに、夫たる者は、始終、我が妻の心の樂しかれ妻の身の安らかなれとのみ心がけ、妻たる者は、また、始終、我が夫の心の樂しかれ我が夫の身の安らかなれとのみ心がけ、互に、常にまめやかに愛であひてこそ、誠の夫婦の間の愛といふものなれ。而して、夫婦共によく樂しく安らかなるを得べきなれ。同胞、朋友、國人、君臣の愛、皆、斯の如くあるべし。かくてこそ、よく完全なる高尚なる美はしき親子、同胞、夫婦、朋友、國人、君臣の愛にして、實にむつまじく美はしく一家一國を爲すべき愛といふべきものなれ。

こゝにあらずば、眞の愛といふものにあらず、この愛を知る者にして、はじめて、

人といふべけれ。人倫の大道を知れるものなればなり。近時、新聞紙上の報する所によれば、ある男ありて、己が妻の肺病にかゝれるを知りて、其の病氣を忌み、殊に、其の醫藥の費用を厭ひて、これに劇藥を與へて、自盡を促しければ、病妻は、餘の無情にたへかねて、身を歸らぬ東海の波の藻屑と投げ捨てたりといふ、あり。これ、實に妻を愛する人倫の道を知らぬ者にして、人非人なり、野獸なり。否、野獸にも劣れる怪物なり。かゝる怪物の妻女と成りたる女子こそ、いとあはれの限なれ。吾人は、我が國の女子の爲に、否、我が人倫の爲に、かくの如き怪物の、必、早く退治せられむことを望むものなり。なほ、次號にいふ所あるべし。

中務卿宗尊親王

ありて　思ひ
身の　なさ
かひやな　すは
からむ
民の　國の
ため　ため
にと

清水濱臣

はくゝむ
も
したふも
同し
心
には
思ひ
へた
てむ
何事
なか
は

柿本人麿

石見のや　いも
高津の　みつ
山の　らむ
木の　か
我か　間
ふる　より
袖を

前關白基忠

目の前に
つらなる　なさ
枝し　殘る
かれ　らむ
かゝる　行く
朽木
の　を

讀人不知

思ふさち　ものにそ
まさひ　あり
せる夜は　ける
から
たゝ　にしき
まく
なしき



論説

うれしきもの

下田義天類

年立ちかへるあしたの心。女も男も、老いたるも若きも、皆一やうに、うれしきもののかぎり成る可し。此のうれしき折に逢ひて、ふりたるふゞくろの續稿を、相も替らず書き續けむは、少しつきなき心地せり。

年のはじめは、猶うれしき物こそ多かる可けれ。かるたにかちたる。墨ぬられむとしたる袋かつぎを、辛うじて人にゆづりたる。それぬ可き羽根うけとめたるなどは、いかにうれしかるらむ。ポースベールの勝とりたるうれしさなどは、をみな子の知る所には有らざるめりかし。髪のうつくしくあげられたる。櫛かみざしの心にかなへる。着るものゝいろあひ、しざまの親しき友垣にもおとらぬ。友垣の許へ年始のよろこびせむとて行きたるに、親しきたれかれうちつどひ居たる。●ものがたりなどして、こぞの

試験の成績、人よりはことに良かりしよし、今朝教の親のものがたりありきなど、ほの〱つぐるを聞きたるなどは、取分きて嬉しききはみなるべし。遠く隔たりたる方より、いちはやく年始状の着きたる。その内にも耳新らしき事など書き加へたるは、またことやうなるべし。我が歌文章の、一月新刊の女鑑に見ゑたる。まして、天地人の内に入りたるなどは、其の人の面もちさへ見ゆらむ心地す。清原のもとが『まだ見ぬ物語の多き』を、うれしき物のいちさきに書き出したるは、今やうとは少ことなりたる所有るにや。『いかならむと夢を見ておそろしと胸つぶるゝを殊にて非らず合はせなせしたるいみじう嬉し』と言はれたるに引更へて、今やうは、夢など心ともせず成りにたる文化の進歩もまたうれし。『恥かしき人の歌の本末問ひたるにふと覚ゑたるわれながらうれし』と言はれたるなどは、あらずもがなとぞ思ひやらるゝよ。友の來つどへるに、母君の心能くとり持ち給へる。父君のさしのぞかせ給ひて、何し給ふぞなど、なつかしく宣はせたるなどは、友垣の手前ことにうれしかるべし。近きわたりに誘はれ、日ひとひあそびくらしたる。殊に芝居にいざなはれたるなどは、言はむ方なき嬉さなる可し。あすはと云ふ宵の程より、髪などあげさせ、湯などつかひて、着る可き物これかれとりあはせなどして打ち臥したる。夢路の行方さへうれしげなり。朝

まだき車の上の寒さなんどは思ひ付く可くも有らじかし。これらは若き人々のうれしさなり。家とうじの君の屠蘇のまうけなどするをり、常はくねくねしきえうどめの、言いみしてなさけなさけしく物言ひたる。あるじの君の威儀など正して、はやけにいで行くとて、何くれとりまかなはせつゝ心地よげに見おこせたる。わがかたちの清げに取り繕ひたるさへうれしかるべし。むす子の卒業して任官したる。むすめの捧美しうとゝのひたる。嫁入りしが年始にきたる。孫のうちゑみていだかれたる。我が身の上をも打忘れて、うれしげにたちはしるもことわりなり。讀み續けたる小説新聞の、折よく終方になりて、口頭憂き瀬にしづめりしが災厄を逃れ得たるに、憎きものゝ惡ざまになりて憂きめを見たるさへ嬉しく心地よしなど思ふらむ。

年のはじめの嬉しさどもを、其の分際きはに思ひ續けなむ、かぎりしもあらざるべし。

この序に、聊、をのこのうれしと思ふ事を記さむ。

朝夕の出入に妻なるものゝかひがひしくなつかしげにふるまひたる。心に面白からぬ事有る折、傍より程よく慰めたる。言葉をかへさぬ。言付けたる事時をうつさでしたる。物うち言ひたるに愛嬌うしなはぬ。留守せし程の事よくとりまかなひたる。

人に對ひてさし過ぎたる事なき。はた足らはぬ事もなき。着るもの丶をりめたゞしき。物おく所のつゞまやかなる。物の引出しのうち亂りがはしからぬ。都べての掃除よくとゞきたる。飲食物を口に協ふやうに調せさせたる。取賄ふ物のいりかすくなき。子女の扱ひ甘からず辛からぬ。召使ふものへもの言ひの荒らかならぬ。したじたの者の思やり深き。舅姑にまめまめしく仕ふるは言ふも更なり。まらうどを能く取扱ひたる。友垣などの來合ひたる折、ものいださむとするに、かごとがましき事など露ばかりも言はざるなどは、皆うれしと思はる丶所なりかし。夜具の襟の冷かならぬ。枕紙のあたらしき。常のことなれどまたうれし。

琴三味線などの技藝も、夫の物に屈したる折などを慰めてこそうれしかる可けれ。唱歌よくうたひ、オルガンいみじうしらべたりとて、わが心のゆくに任せ、或は晴やかなる所にもていで丶、われはがほに、あだし人に聞かせむと心がくるなどは、唯うれしからぬのみに非らず。けしからぬ心さへおこりぬべし。

都べて、わが國人の生活は、男女向々にわかれて、我々の事營む可きならはしには非ず。男は外にいで丶家の業をいとなみ。女は内に有りて男をうしろみはげまし、能く其の事に當りて堪へしむるをこそ、我が國の女子たるもの丶本分とは言ふ可けれ。此の

本分にかなへる者、即、男の嬉しと悦ぶ所なるべし。理財、割烹、裁縫、教育、あるは世のまじらひ召使の駕御など、女子の本分とす可き物、いといと多かめれど、それ皆男の後見と云ふことを本領としてこそ、其の當を得らる可けれ。男の業をたすくる事は、男の心を慰むるをもてその第一とや云ふ可からむ。天つ神は、女子の性質身體を、この任務に協ふ可く造りたかせ給へり。歌舞音曲のしつけは、うはきの種にせよとて教ふるものにはあらずかし。

凡人類は、得意の時代より不得意の時代に多くつまづく事有るものなれど、そのをり折、見分きて、能くうしろみなぐさめくるゝ者有らむぞかり嬉しきものはあらざる可し。一家の生計は更なり。朋友のまじらひ、社會の事業、國政の參與など、われと思ふ所のことなる折々、不首尾不愉快を感ずる事の、日々に幾度となく行き代るは、世務にたづさはれる男の常態なり。其のをり〳〵をよく見分きて、あるはかたらひかたきとなり、あるはなぐさむる人となりて、其のくづをれむとするを勵まし、また其の過ぎむとするをなだめなどせむ、いかなる男か、これを嬉しと思はざらむ。女子は男子の翫弄物ならずと云ふ彼我見言葉は、往々、この男子のよろこびを殺がむとするなかだちとなるものあり。今爰に、年のはじめに當りて、いさゝかうれしき物のかた端

を取りいでたるは、貴孃諸子のかへりみを望まむとてのしわざなりけり。淸少納言、もし此の世に在らば、餘にものしきいひざまやと、顏をろむけて笑ひぬらむかし。

明治三十一年後の母

坂本三七郎

明治太平の御代玆に三十有一年、天長く地久くして、堯天の雲遠く卒土の濱を蔽ひ、舜日偏く四海の中を照す、謳歌の聲は街衢に滿ち、松綠に竹靑く、東海の旭日更に新なるを覺ゆ。吾人草莽の臣、讀者諸孃と倶に、屠蘇醉裡に杯を擧げて萬歳を三呼し、更に君か代を誦して、聖壽疆りなきを禱り、明治三十一年一月女鑑初刷の壽となさんとするなり。

一年の計は春に在りと、此の語決して陳言套語として捨つべからず。故に、吾人は、今明治三十一年の新春に臨みて、讀者諸孃に告げ、女子責任の重且大なるを說かんとす。而して、最も三十一年後の母たるものに向つて、望みを屬するや切なり。蓋、明治敎育の道、今日に於いて發達し、且、隆盛を極むと雖、其の敎育發達の源因を探ぬれば、

明治元年に起りしにあらずして、實に明治六七年の際にありき。則、六七年に、全國を通じて、始めて小學校なる名稱の下に兒童を敎育せしなり。其の以前に在りては、封建の餘習として、所謂寺子屋、若くは手習師匠の敎訓を受けしものにして、女大學女今川等の書は、此の間に敎へられたり。諸孃が大半の母君は、實に、此の敎訓を受けて生長せしものなりき。故に、純然たる明治小學校の敎育を受けし者は、三十一歳の年輩にあらずして、今歳二十四五年の輩にありとす。故に、明治純粹の敎育を受けて、更に明治發育の子女を膝下に敎訓するは、又明治の成年なる母なりとす。故に、吾人は、三十一年今日以後、子女の母たる孃等に向ひ、年新なると共に、家庭敎育の重きを責め、且、其の任を盡さんことを切望す。新敎育を受けたる明治の女子、豈、寺子屋の女今川的の家庭あるべけんや。

明治の天地一清朗豁、武威は萬邦に揚りて、旭旗の影高く、文敎は四海に行はれて、萬民皆書を挾む、此の大化の德澤に伴ひて、武を汚さず文を落さずして、萬世に維持するは、明治の靑年なり。之を家庭の中に敎化して導く者は、明治の母なり。家庭は一大天地なり。英雄豪傑、賢女才媛、皆此の搖籃の中より生じ來る。古人曾て歌ふて曰く、狀元本是人間子。宰相是非天上兒、と。王、公、將、相、固より種なし。僻邑常に

麟兒を產し、貧家多く鳳雛を出す、諸孃掌中の珠玉は、異日如何の大業を成せるを知るべからず。呱々乳を求めて母を慕ふ。吾人は、雅兒か前途の多望なるを愛す。吾人は、願くば、孃等の愛兒を掌中に弄して、彼か無邪氣の一笑を分たれよ。

然るに、世人常に曰く、女子の境涯は、寂寞なり。また狹隘なり。人生の大半は男子に屬し、女子は徒らに無聊に苦むのみ。と、是、徒らに女子の天職を棄て、其の高尙の心を失ふものなり。若夫れ、昔日の如く、深窓の裡に閉居して世事を知らず、人の使令に供するか如きあらば、或は無聊寂寞の歎あらん。今や然らず、交際の道あり、以て交情を訂ずべく、世事また關り聽を得べし。但、男子外事に鞅掌して、女子は內政を調理するは、是男女の分業天職なり。女子の天職、更に大なる子女教育なる者あるをや。天下の英才を得て之を教育するは一の樂なりと、古人は云ひき。已れの愛する子女を膝下に教育する婦女子の樂、天下また之に勝るあらんや。況んや、三十一年新春の天、一家團欒心淸く、屠蘇を酌み相和樂するの境、吾人は、家庭の天地を呼て極園と云はんとす。

天下に子女を教育するの學校多し。吾人は、家庭教育の最難きを知り、之が主宰たる婦女子の任の重きを知り。而して、更に、明治三十一年後の家庭教育者、即明治の母た

る婦女に對して多望を屬し、初刊に於いて、一篇を寄せて祝規となす。

女子家庭教育に就いて

三輪田眞佐子

うつせみの世の進歩に伴ひて、女子教育を言ふもの少なからず。從ひて、女學校も多くなりぬることぞ幸なれ。されど、果して、今日の女子が、昔日の女子より、幾そばく進歩せしかと問はゞ、如何なる答をなして可ならむ。

思ふに、普通の女子教育は、學術を教へ、技藝を授くるばかりが、其の目的にはあらざるべし。唯、良妻、賢母たる實質を有する人物をこそ望まほしけれ。然るに、今日の女學校には、多數の學科あるより、おのづから、種々の智識を學び、才能を養ひ得んは、疑ふべくもあらざれども、眞に其の傳へられし才智を女事に應用して、好結果を得るか否やは知るべからず。蓋、智識才能は、容易に發達するを得んも、人物の人物たる品格を薰陶するは、至難にこそ。

おのれ思ふに、良妻賢母の品格を作るは、學校のみの能くする所にあらず、必、家庭と學校と相待ちてこそ、成効するものと信じぬれ。さりながら、現今の學校教育は、その形式、大に整ふに至りしかど、家庭教育をも共に進歩せしとは言ふべからず。寧、そ

は退歩せしやも知るべからず。如何となれば、未だ學校なき時代には、專ら家庭教育に依頼せしかど、父母ば、その孃の起居動作は更なり、異日嫁ぐ曉にも、斯ぞあるべきなど訓戒なしけむも、今日は、學校に依頼するより、家庭の注意は忘るなきか。殊に、昔日は、今日の如く、書冊なども多からざりけれど、女大學女今川など、單純なる女訓を、確言的に教へしを以て、反りて、深く心に銘すれば、終始忘れざる傾ありけり。兎も角も、完全なる女子教育をなさんとならば、家庭と學校と表裏することそ肝要なれ。れのれ、昨十二月廿四日、東京府高等女學校に於て、家庭と學校の關係につきて、生徒、及び父兄のため、聊ものしゝが、左にその大要を掲げん。

第一　理想と實行　この二つのものは、幷行し難きは、人事の恒なれども、をさをさ、理想は、善美にして、實行は、これに及ばざるが多し。さて、學校は、必ずかゝる女子もがな、斯くこそ婦人はあれなど、理想を表さんとつとむるも、學校に於て、全く實行せしむるは難し。如何となれば、學校は、洒掃應對の實地を行はんとするも、機會、及び材量に乏し、獨り家庭は、老者に事へ、婢僕を御し、自、女事を營むべき位域なれば、學校の理想を實行するに、最適すると言ふべし。

第二　規律と恩愛　火と水とは、その性質相異るは、誰も知ることながら、春の花、

秋の紅葉は更なり。天地間の萬物は、皆この二者の協力調和の理に由て榮えざるはなし。由て、女子を、教育するにも、規律と恩愛と、交々加はりてぞ、完全なるものとならん。誠に、學校は、生徒に恩愛を布かんとつとむるも、到底、父母には及ばず、亦、父母は、女兒に規律を責めんと望まんも、學校に若かざるべし。從ひて、學校は規律を教ふるに長じ、家庭は恩愛を施すに長ずるなり。但、一得一失の相伴ふ理にもれず、家庭は、愛に溺れて女兒を誤り、學校は、懇切を破りて女子を傷ふらし。共に戒むべきことにてこそ。

第三　一般と特別　學校は、多少富貴の度を異にし、職業も亦同じからざるのみかは、天性にも相違さへある女子を、同一に、同等なる教育を施すを以て、一般に適當するを得ざるは明なり。唯、家庭教育によりてこそ、その家風、分限、及び異日の志望に適合する特別教育を加ふるを得るなれ。然るに、こを思はざる人は、特別に、家庭教育を加へず、全く學校教育にのみ依頼して、卒業の後、始めて其の人物と、その位置との懸隔するため、種々の不幸を招くにおどろき、遂に、學校を怨望するに至るもあり。これに反して、家庭教育のみを尊びて、學校教育を顧みざるため、頑迷なる氣性を作り、智徳の圓滿を缺ぎ、果ては、後悔する例もありとかや。

第四　主義の一致　家庭と、學校と、其の取るべき主義相一致せざるときは、敎育の効能なきものぞかし。すなはち、學校に於て求るところと、家庭に於て行ふところと、相齟齬するに於ては、反て生徒をして、適從するところに迷はしめん。ゆゑに、學校と家庭と、脈絡を通じて、互にもどらざるやうつとむべし。

以上は、當日講話せし一斑なれども、亦、實踐を重ずべき女子敎育につきては、學校敎育にも劣らず、家庭敎育に注意すべきを悟るに足らんか。されど、家庭敎育の任に當る人なきか、たとひありとも、事情ありて敎育する能はざるもの、若くは、父母の許を去り、遠く他鄕にあるものは、如何にして可ならむか。その時は、止むを得ず、善良なる家風の知人に、家庭敎育を托する外ぞなき。殊に、善良なる家塾こそ最望ましけれ。そは、家庭、及び學校の二敎育を兼ぬるがためなり。そも／＼、善良なる家塾とは、如何なるものを言ふか、そは、冬こもり、春深くかけてものせん。

後龜山天皇

あつめては國の光となりやせん
我が窓てらす夜半の螢は



史談

倭姫命

五十園徳文

倭姫命は、垂仁天皇の第二の皇女なり。母は丹波道主王の御女日葉須比賣命にます。姫の命御容貌いと麗はしくて、智りふかく、操持貞潔して神明に通じ給へりけれど、(二十五年三月)皇孫の御杖代として、天照大御神を頂き奉りき。さきに崇神天皇の朝に、神威を畏みて鑄つくりかへ奉れる神器をぞ、大宮内にとゞめ給ひて、皇女豊鍬入姫の命をして、天つ神の授け給ひし鋭劔を捧げもたしめて、大和の國、笠縫邑に移し奉りて、神籬を立てゝ、齋ひ奉らしめき。入姫の命、老いたまひしかど、倭姫の命、之に代り奉れるなり。

こゝに倭姫の命　大御神のしづまり坐さん地を求ぎもとめて、菟田の篠幡(今の大和宇陀郡)にいたり、更に還りて、近江の國に入り、東の方美濃を廻りて、伊勢の國に到りましき。ときに、天照御大神倭姫命に誨へて祈りたまはく、この神風の伊勢の國は、常世の

波、重浪のよする國なり。かたす國の可怜くになり。この國に居さんと欲ふとのたまひしかど、御誨のまに〳〵、大宮を伊勢の國度會の郡、宇治の里に定め給ひき。こゝに倭姫の命、朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音の聞ゑぬ國、風の音の聞ゑぬ國、弓矢鞆の音聞ゑぬ國、打ちまきしめる國、敷浪七保の吉き國、神風の伊勢の、百船の度會の縣、佐古久志呂五十鈴の宮に鎭り定り給ふと、國ほぎ給ひき。今の内宮之なり。又齋宮を五十鈴の川上に興て、姫の命こゝにおはす。これを磯宮と申す。かくてのちもひたふるに赤心をもて、つかへ奉れりき。景行天皇の朝にいたりて、年いたく老にければ、五百野皇女かはりて、(二十年二月)御杖代としてつかへまつりき。倭姫の命なほ大御神の宮につかへまつることおこたらず。(その四十年冬十月)日本武尊、東の國の夷をうち給はんとて、まづ伊勢の大御神宮に參りまして、大御神の御前を拜み奉り、御姨倭姫命に辭してのたまはく、いま父の帝の詔命もちて、東の國の夷をうちて、まつろはぬものどもを、平けんとす。されどかく辭まをすにこそと申し給ひしかど、姫命、草薙劍と一つの嚢とを、授け賜ひて、もし急の事あらば、この嚢の口を解きたまへ、愼みて勿怠りそとなも宣りたまひき。さて武尊こゝよりたゝして、相摸の國にいたりませる時に、その國の造、尊を欺きて、野の中に誘ひ入れまつりて、四

方より火をつけて、燒きたてしかど、倭欺かれつと知りて、倭姫の命のたまへりし嚢の口を解きて見たまへど、その中に火打ぞありける。こゝに倭まづ草薙の御劍をぬきて、草を薙ぎ撥ひ、其の火打もて、火をきり出てゝ、向火をつけて、悉く賊をきり滅ろばし給ひき。かくて久しくありて後、雄略天皇の御代に、(二十一年十月)大御神姫命に誨へたまはく、われ天の少宮にましますが如く、天の下にしても、一所にのみればしまさねど、朝夕の御饌もやすくきこしめさず。丹波の國、小見比沼の眞井の原に、ましますわが御食津神の豐受大神を、こゝにうつしまつれ、とさとし給ひき。ここにこのよし天皇に奏し給ひしかど、大御神の御言のまに〳〵ふり奉りと宣ひて、新宮をつくらしめ給ひ、(二十二年七月七日)皇使を丹波につかはして、迎へ奉りて、同じき伊勢の國度會の郡、山田の原の新宮に鎭め奉りき。今の外宮これなり。倭姫命は、大御神の宮につかへ奉りたまふこと、百三十餘年になりぬ。二十三年春二月、み身づから尾上山(伊勢國度會郡にあり。稻山とも稻岡ともいふ。)の峯に退りて、宮人及び、物部の八十氏等をめし集へて、のたまはく、天照大御神は、月日と共にして、天の下に照りのぞみ給へり。　豐受大神は、天地と共にして、國家を守り幸ひ給へり。されど、二柱の大神、神風の地を訪ひ、重浪の國に尋ぎて、天降り鎭りまし給へり。凡伊勢二所の皇大神宮は、

則宗廟社稷の神、惟群神の宗、惟百王の祖なり。尊きことまた二つなし。この外の諸神は乃子、乃臣、孰か能く敢て抗らんやと詔ふ。われ聞く、大日本國は、神國なり。神明のみめぐみをかゝふるに依りて、國家の安全ならんことを得、國家の尊び崇むるに依りて、神明の靈威を増す。肆に神を祭る禮は、神主祝部を以て齋主となし、殿の内に侍ひて、善く防ぎ護り、國家を祈り奉れらむ、寶祚の隆盛まさんこと、天壤と窮りなかるべし。天が下四方の人民等に至るまで、齋ひ敬ひ奉れ。又大御神のみをしへに、心神は天地の基本、身體は、五行の化生なり。肆に元を元とし、元の初に入り、本を本とし、本心に任せよ。神の垂は、祈禱を以て、先と爲し、冥加は正直を以て本と爲せり。それ天を尊び、地に事へ、神を崇め、祖を敬へむ宗廟は絶たず。天業を經綸め、又佛泥の息を屏け、神祇を拜み奉れ。日月四州を廻り、六合を照らせしも、正直の頂を照すべし。と詔命あきらけし。汝等如在禮を専として、朝廷を祈り奉らむ、天の下泰平にして、四民安からんとのり告げをへて、石がくれましき。時に御壽五百餘歳。

垂仁天皇の御代より　雄略天皇の御代まで、十一朝の間、おはしまし〱き。

倭姫命、　天皇の大詔をうけたまはりて、始終かはらず赤心をもて奉仕りしみわざ、誠に尊といふべし。

伊勢の　大御神は　皇祖の神にましませど、尊きこと二ぶ神もおはしまさず。今も重く、いつかせ給ふ。いつの代かかはりまさん。されど　後宇多天皇の御製和歌にも

天つ神くにつ社をいはひてぞわが葦原の國はをさまる

ともよませ給へり。

伊勢御息所

鹽井ふく子

伊勢の御とて、歌仙の中にかずまへらるゝは、もと伊勢の守藤原繼蔭と云ふ人の女にて、宇多天皇の皇后七條后に仕へまつり、形ありさまより初め心どせうるはしう、殊に敷島の道に堪能なるは、時の名人躬恒、貫之にもをさ〳〵おとらず、詞の花あやに、かき流し給ふ御筆にもえならぬ香をこめて、大和島根にまたとたぐひなく、やんごとなき上臈なりけれど、帝いたくめで給ひて、御息所となし給ひけるが、行明親王を生み給ひて、いみじう世に時めき給ひけり。

さるほどに、帝、御位を遜り給ひ、御佛の道に入り給へるより、御息所も退きて、五條の私亭に歸り住み、世の中をわぢきなくればし過ぐさせ給ひけり。折りふし、延喜の帝、御子の御袴着の料に、御屛風をせさせ給ひて、詩ども數多かゝせ、みな色紙

形れきて、歌よみどもに、各歌よませて奉れとの仰せに、みなよみて奉りたりけるを、小野道風とて、名高き手かきして、それ〳〵かゝせ行きけるが、春の帖に、櫻の花の咲きたるに、女車の山路行きたる繪をかきたるにあてゝ、色紙形あり、それをふとればしめしれとして、歌よみども奉らざりけるがありしに、天皇御らんじて、こは如何せんずる。今日になりては俄かに誰かよむべき、さらむとて、をかしき所の歌れとしたらんはいみじう口惜し、人やあらずやとしむし思ばしめぐらし給ひけるが、やがて、藤原の伊衡と申すやさしき殿上人の少將にてありけるを召して、伊勢の許にゆきて、此歌つかうまつるやうゐて參ゐれと仰せらるゝに、伊衡かしこまりて、御息所が五條の家に急ぎ參ゐりぬれど、庭の木立ち小ぐらきまでしげりて、前栽いみじうをかしく植ゑたり、庭は苔など青み亘り、やよひむかりの事なれど、前の櫻いとやんごとなく、こばれ咲きたり。御息所は禁中のむかしなど思ばしめぐらして、つく〴〵とながめ給ふ門の方に、先き追ふ聲して、なほし姿の人の入り來れるに、わくらはに誰が問ふならんと見れど、伊衡の少將なり、いと思ひがけずいぶかしくて、人して問へど、帝の仰せ事ありといふ。さては内へ入らせ給へと若侍して案内させ、母屋の簾ひき下して、仰せ事尋ねらるゝに、伊衡は簾二重をへだてゝ、はるかに事の由を告げて、そ

の歌を乞ひけるに、御息所いたくおどろき、こは仰せらるべき事にかはあらむ、兼ねて仰せあらんだに、躬恒、貫之がよみたらんやうにはいかでかあらんを、まして俄かに、いとわりなき事なり、思ひかくすべも知らずとの給ふ御聲もいみじう氣高う、愛敬づきて返すがへすやんごとなきに、伊衡は天女の住家にも行きたらんばかりの心地して、夢かとばかりたどる折りから、かざみきたる童ら銚子を取つて簾の中よりいざり出で、また一人、をかしく繪がきたる扇に盃をすゑてさし出してすゝむるに、少將辭むすべなく、四つ五つしひらるゝまゝ重ぬるに、顏の色も櫻色にうすやぎてめでたう見ゆる折から紫のうすやふに歌をかきて、同じ色の薄やふにつゝみ、赤色のから衣、地ずりの裳、こき袴、桃の色きはめて淸らにめでたき女の裝束をそへて、たし出しけるに、伊衡思ひがけぬ事哉と云ひて、かつぎて歸るさまもいとめでたし。さて急ぎ歸り、帝に奉るに、とく開かせ御らんずるに、道風がかけるにもつゆ劣らぬ手して、

ちりちらず聞かまほしきをふる里の花みてかへる人もあはなん

としるされたり。天皇御感限りなく、くりかへし歌はせ給ひ、御前の人々にも幾度かよませて、さて、道風してかゝせ給ひけりとぞ。いみじき御才ども之にてれしはかりぬべし。さやうなるやんごとなき歌よみにてありけれど、千世の後までも人あがめ

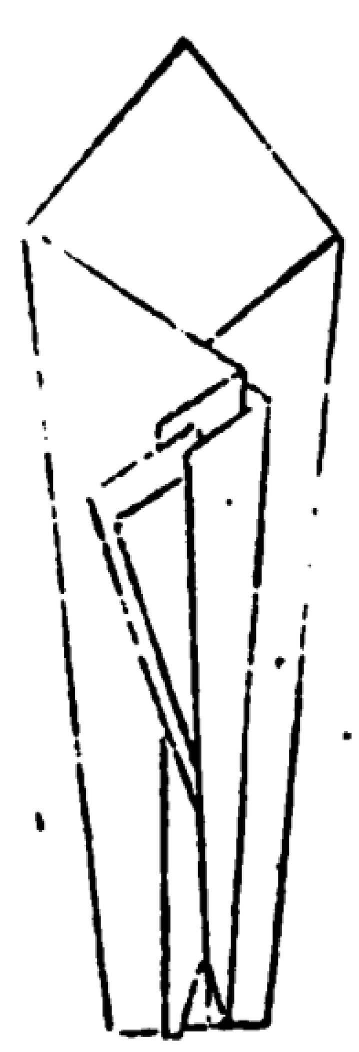
尊びける。かつて、能因法師、兼房が車の後にのりて行きけるに、二條の洞院にて俄かに車より下りて、歩行きけるに、兼房おどろき、こは何ぞと問ふに、伊勢の御が家のあとなり。彼の後の前栽の結松、今に存せり。いみじからずや。手でかゝる所をのりながらに過ぐさるべきとて、その松の梢見えずなるまで車にのらざりけりとかや。この一事にても伊勢の徳の高きを知りぬべし。そのよみ給へるめでたき歌ども、げに伊勢の海の眞砂のかずかず多くて、拾ひつくすべうも覺えねど、なまなかにのせずかし。

家政 折形



有住齊

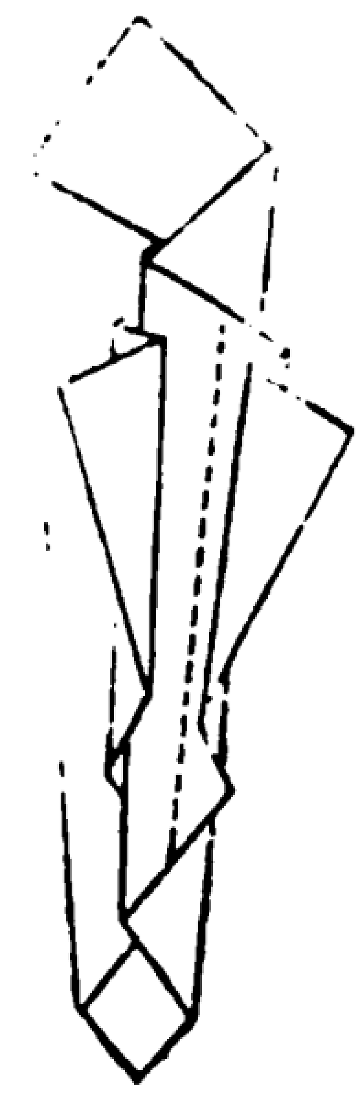
白髪七種包



のし、蛤、昆布、稲穂、南天、松、竹、藪柑子、此の七種なり。包みて中にて結留め、上へ男結女結を金赤の水引にて結ぶなり。

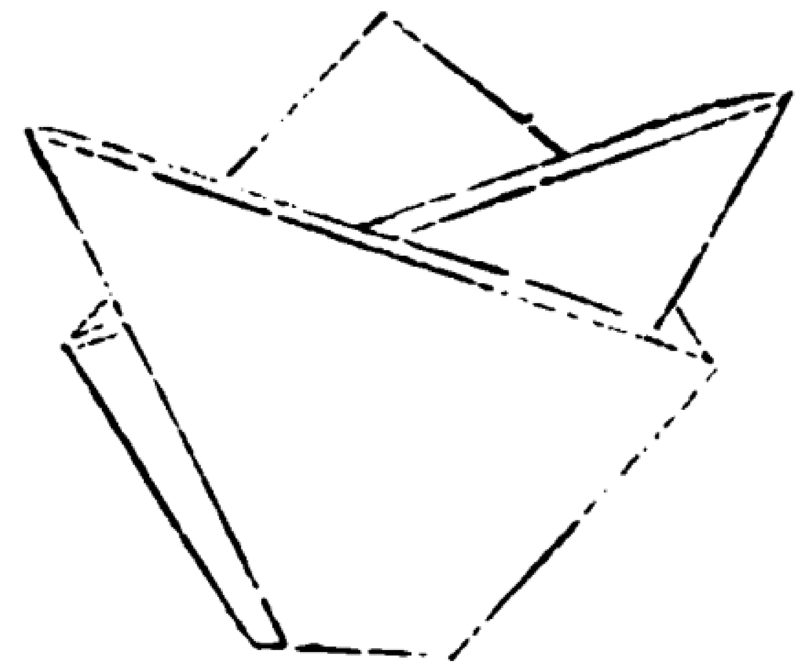
女子のは繪元結を付くべし。

全じく右と下とを開きたる處

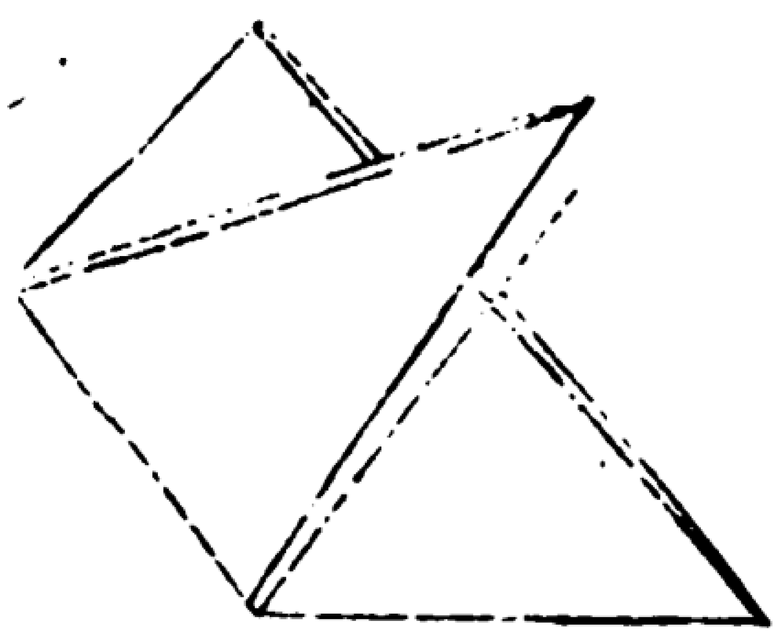


洗米包

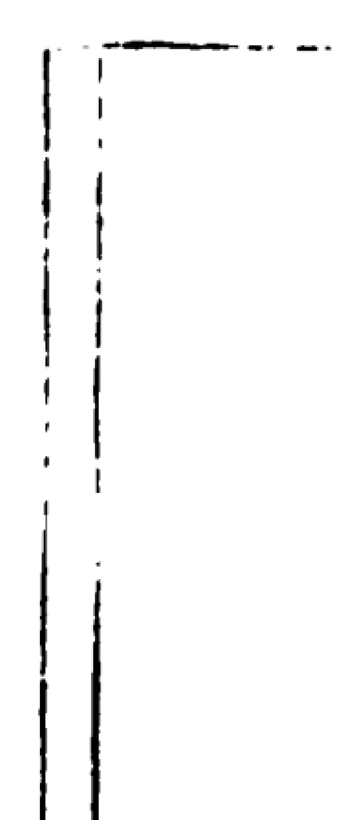
神前に手向るなり。



全じく下と右とを開きたる處

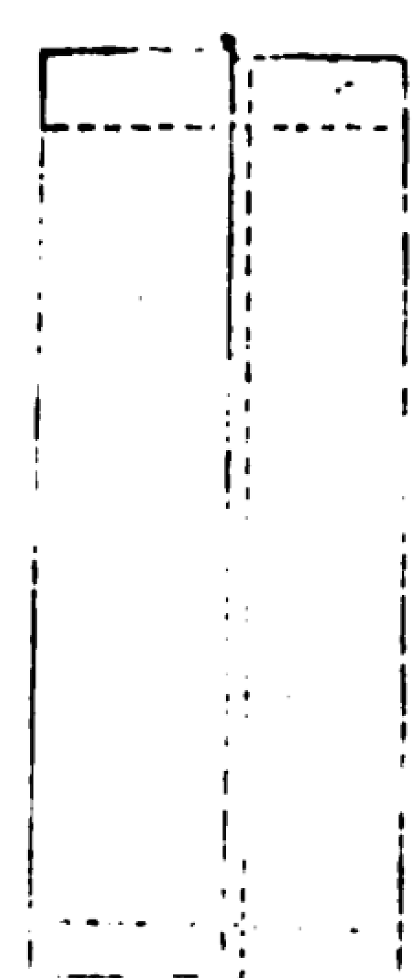


懷紙願書包



和歌の懷紙、神願書、何れも書付に姓名を書くなり。

全じく上下と右とを開きたる處



茶の湯

孤峯庵不羨

關　葦雄

前號の續なるものすべきなれど、一月はじめのものなればこたびは、王服の故事をかゝく。

王服茶の事

千家茶事に出、何人の撰と云ことを不知

抑、毎歳一月十五日以前に催す茶を大福の茶と云(是則王服也)其の故は、　天皇服御し玉ふ故、かくは云ならん往昔人皇六十二代村上天皇の御宇、天暦五年悪疫流行し、萬民大に苦しむ、　天皇民を憐み、國家を統御し給ふ叡慮厚く、大に歎かせ給ふの餘り、典薬の頭に命じて、薬劑の善法を尋ね給ふ、頭等本草綱目に據て、恭く其の法を撰出して、愼んで以て奏上す。乃ち山椒、黒大豆、各三粒を炭火に煎り、茶に和して是を服用する時、病を治する神の如く、又延齢の妙術なりと言傳ふ。爾來、上流下流共に是を用る事とはなれり。舊幕徳川氏時代に至りては、正月五日以内に、大福式、或は點初式と稱して、抹茶式を擧行す。各藩皆茶道方の司る所なり、又諸侯伯、大年(則十二月晦日)元日節分の夜必此の山椒、黒大豆入の茶を喫するを福茶と云。

元旦雜煮引渡しの嚴粛なる規式の饗膳を進むる時、菓子に續て濃茶薄茶を進むるの例なりしが、是を名付て大福茶と云、是乃ち前陳の服御に傚ひたるものならん。大に目出度事なれど、都鄙僻陬の別なく、寧ろ抹茶の規式によらざる共、此の大福茶を喫し給はゞ、年中の禍害を祓ひ、幸福を求め、延齢の良薬なんと言。

女の禮

禮節教授　有住常子

戸障子出入の禮

こゝに揭げ侍るは、座禮の禮なり。

まづ、戸障子の三尺ほどまへまで進みよりて、右の方へ開くべきには、引手をまなかにうけて、立とい

まりて、左足を、右足より半足ほどの方へ引て、左膝より跪き、右も跪きて、兩手を疊につけて、すゝみよりて、戸障子のなりに居よりて、右の手にて、二三寸、右に引手をとりて開きかけ、さて左の手にて、その腰の所をおして、みな／＼ひらきをはりて、兩手をずらしすゝめて、右左に腕をすゝませ、かく三度して內にいり、

我が左の方にむきなほりて、敷居のなりに居て、右の手にて、腰の所をもちて引たて、やゝ二三寸ほどにいたれるとき、左の手にて、引手をとりて、はたとたて、

すべて、引手をとりて、たてはべる時には、かたてを、膝わきにおきたるべし。

次に、兩手を膝におきて、上座の膝頭をすこしうかして、右にひねりて、むきなほりて、上座をむきたるまゝたちて、すゝみゆきはべるなり。

たちぬひ

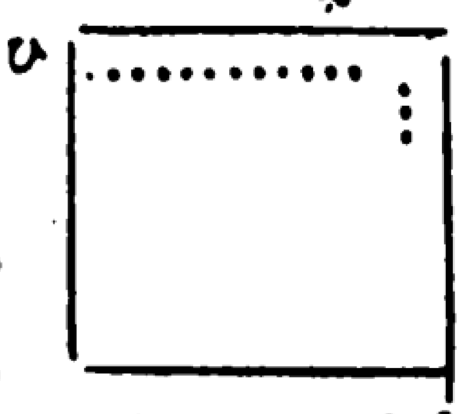
西山たい子

（八十三）財布

財布は金錢を入れるものなれど、むかしよりをかしき事を云ひて、秋縫ふときはあき袋とて、毎時空虛となりをり、また、くれにおしつまりてぬふは、押し積袋とて、金錢いつもあふるゝばかりにつまりあり、また春ぬふを、春袋とて、絶えず脹るゝと、古人の言ひ傳へぬるもをかし。誠にさるためしありやなしや知らざれど、此度は財袋より、なほさま／＼の袋をつくらんと思ふなり。

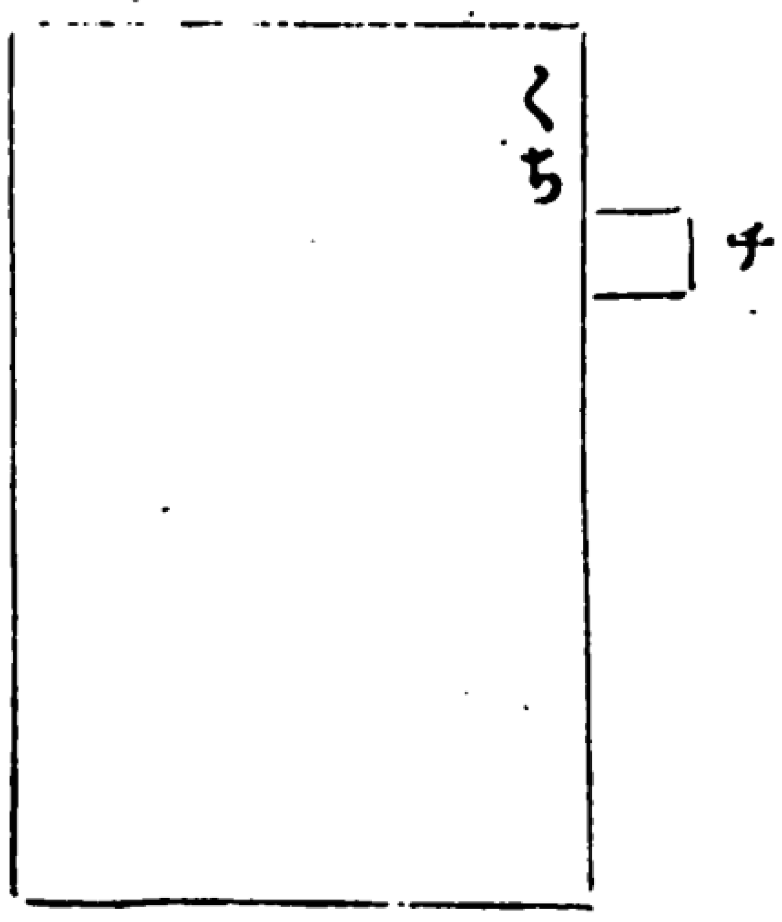
まづ尋常の財布は、糠袋の形にて、少しく大きなる

切れ表裏二片と、ちの切れ、巾五分、長さ一寸ばかりの小さき切れあらば出來るなり。まづ、ちの切れを二つに折りて、巾二分ばかりに絎けおき、それより、口の方を表裏あはせて、財布の大小により、一寸または一寸五分ばかり横をあけ、



圖の如く一方を上まではしぬひ、一方をあけおきて、折りめをつけ、引きかへし、明けある方を上に、ぬひたる方をはさみ入れ、表の口のぬひめの處に、ちの切を二つに折りてはさみ、底より、横を、廻ぬひにぬひ合せ、折りめをつけ、明けおきし口より引きかへし、その明けおきし處を折りて、細かにくけるべし。

その圖

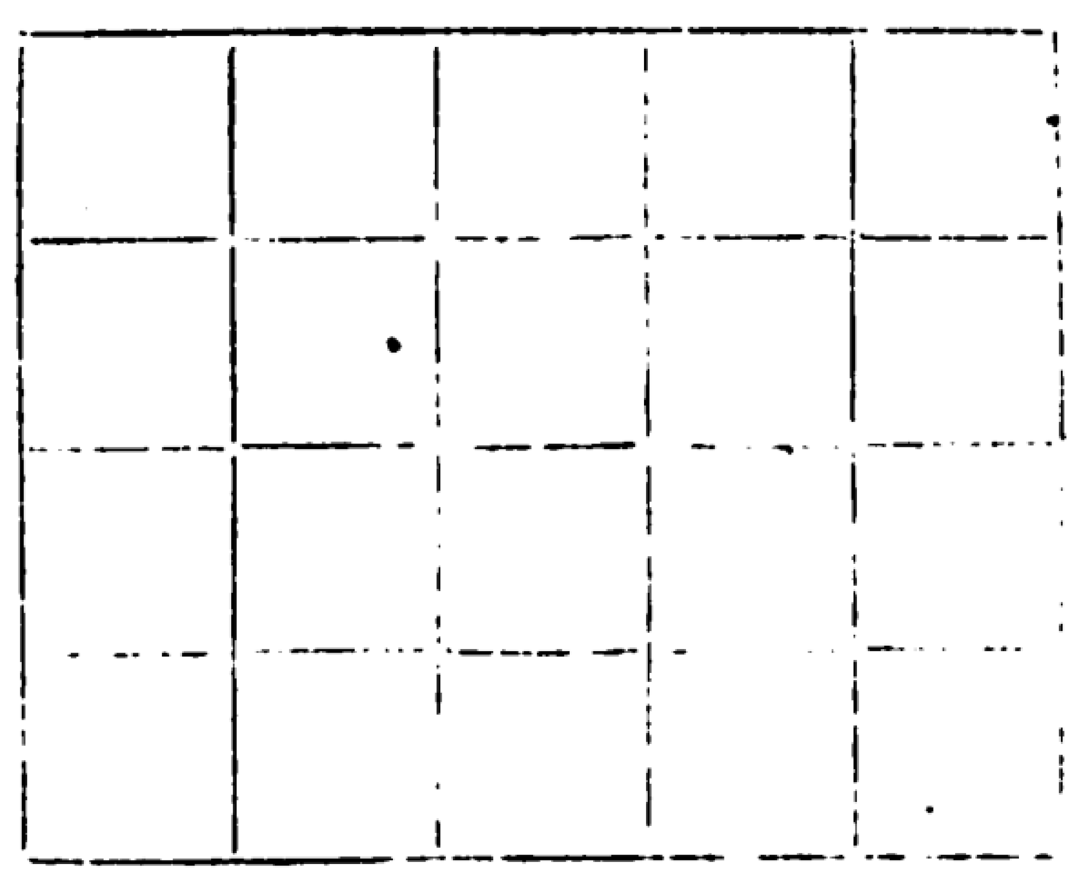


大小は心にまかすべし。

（八十四）桔梗袋のたち方

まづ半紙を横を五つに、縦を四つに折り、其折りめを切りはなち、其内十五分を用ゐて、五は用なきなり。

その圖



但、大小により此の限りにあらず。

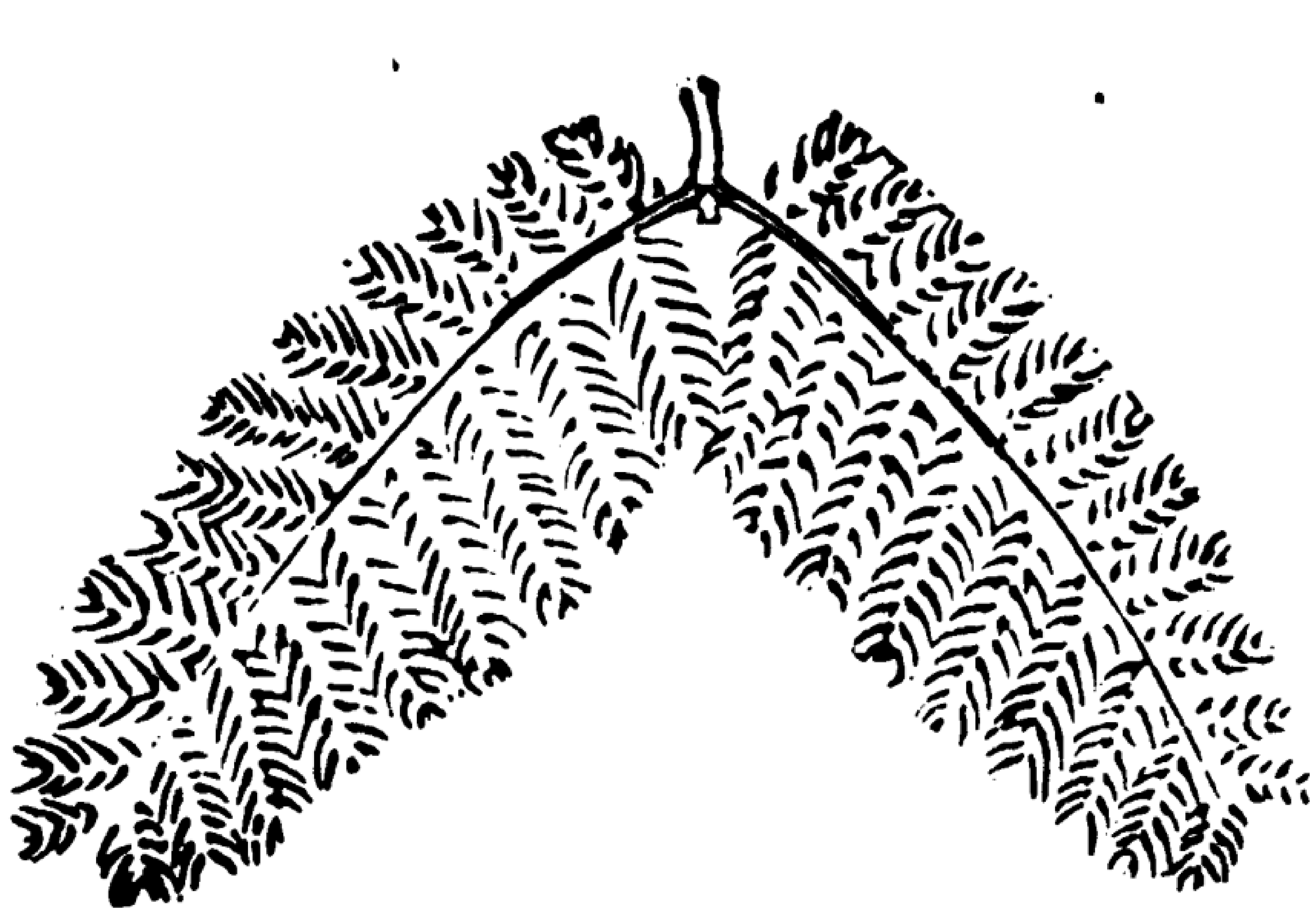
造花

伏見藤三郎

齒朶 又、諸向ともいふ。其の葉兩々相對するを以てなり。しだといふは垂る意かといふ。大小

二種あり、單に齒朶といふは大齒朶なり。一名穗長(京都)又裏白(東國)又山草ともよぶ地方あり。新年の飾りに用ゐる葉なり。

齒朶は羽二重にて造る、先づ、「グリン」二分「オウラミ」七分「マセンダ」一分の割にして、通例寒冷紗を染むる時よりも、水を多く入れて溶き、之にて羽二重を染め、乾して后、裏に姫糊をつけて白羽二重を貼り着けて乾し置き、別に、畫學紙に實物を貼りつけて、其の形を取り、之に合して、前に裏打したる羽二重を形に斷ち、又別に、實物に在る筋の通りに、太きものは鐵の針金、細きものは眞鍮の針金を用ゐて、何れも、御美濃紙を茶粉にて染めたるものを卷きつけ、前に斷ちし形に合して、筋を配り纏め、(纏むる時、成丈け纏め紙の嵩まらぬ樣にすべし。若、嵩みたるときは、平たき板の上に置きて、上より仝じく板にて壓し、平たくなすべし。)之に糊をつけて、前に斷ちたる布の裏に貼りつけ、能く乾して、表より、此の筋をピンセット(鋏叉)にて鋏みて、元より先に筋をつけ、后、筋鏝にて、其葉の切込を一葉毎に、裏よりおさへて引き、最後に、茶色の毛糸を細かく切りて、之を莖の元、二叉に別れたる處に、糊にて着くべし。第百十五圖參照。



第百十五圖

造花法の記述につきて解し難き處。又實地に施行して、花の恰好色合など意に叶はざる點につき説明を望まるゝ諸嬢は、往復はがき、若くは返信用郵券を添へて、國光社女鑑編輯部宛に質問あるべし。直ちに應答す。

だいどころ

ライスケーキ

米の粉、米利堅粉、砂糖、何れも四匁づゝ、鷄卵七個の白味を加へ、牛酪四匁と、橙の皮をおろしたるものを入れ、能く混和し、鍋に牛酪をひき、四十分間程、焼て用ふべし。

ライスボール

大きなる煎茶茶碗へ飯を詰め、打抜て、其上へ「ジヤム」をのせ、又牛乳一合と、鷄卵二個、砂糖を能程に投れ、「レモン」を一二滴投れて、煮たちたる時、米利堅粉を少し入れ、どろ〳〵になりたるを、其上にかけて食すべし。

ロールプリン

米利堅粉半斤と、牛脂肪半斤を投れ、能くすりつぶし、薄く細長く延し、其中へ「ジャム」を入れ、まるく巻き布巾にて包み、紐にて結び、三十分間程湯にて煮たる後、海苔巻すしの如く、小口よりきりてもよし、又其儘にて用ふるも宜し。

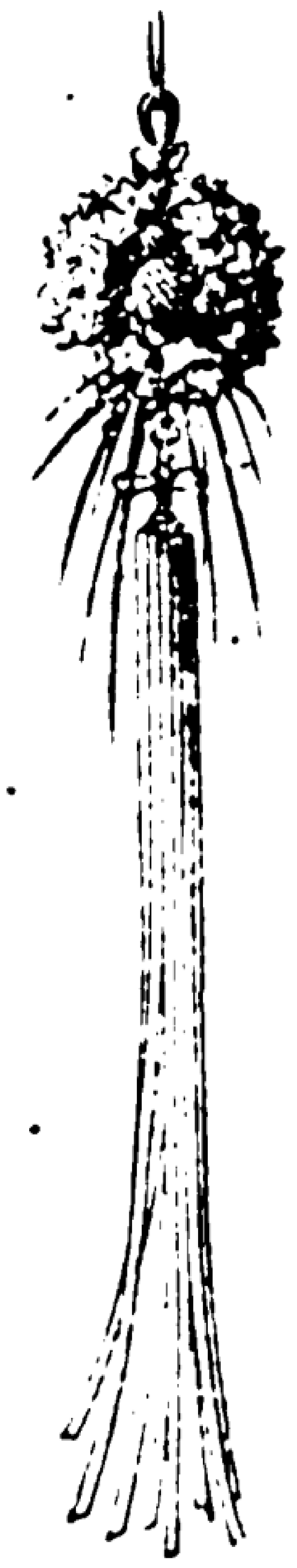
ライスプリン

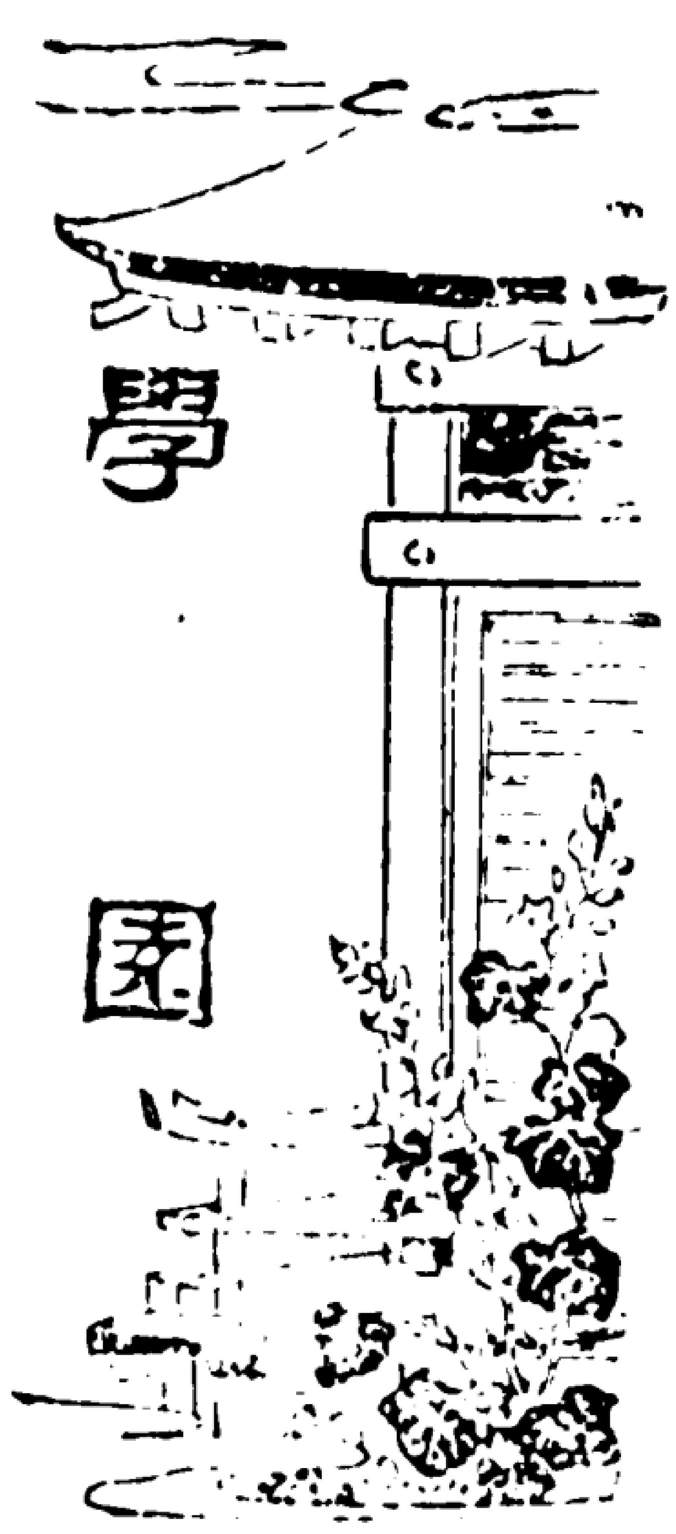
焚立の飯を、茶碗三盃に、鷄卵一個、牛乳五夕を投れ能く混和し、鉢に入れ、ストーブにて焼べし。

寒晒白玉粉製法

上等餅白米八合、硬白米二合（多少に限らず右の割

合にすべし）を能く磨ぎたる後、水二升五合程投れ、三四日間浸しをき、水のまゝ石臼にて挽き、細かき篩にて濾し、糟を去り、一晝夜を經れば、粉は下に澱むなり、然る後、其水をこぼし、又水を入れ、如斯すること、數回にして、よどみたる粉の固くなりたる時、板の上に簀を布き、其上に厚き紙をしき、其上へ前のかたまりたる生粉をたひらにのせ、美濃紙をかけ置、寒中四五日間干すべし、能く干あげたるを貯へ置ば、數月を經るも虫のつく事なし。





秀歌集（十三）

鹽井正男

○

我が君は千世に八千世にさゞれ石の
いはほと成りて苔のむすまで

○此の歌は、古今集の賀歌の部にあり、讀める人は知れず。○千世に八千世に。千年も八千年も、いつまでも限りなく榮えましませといふ意なり。○さゞれ石。小さき石のことなり。これを略して、單にさゞれともいふことあり。夫木集に、「雪こほりみながみ山に解けにけり小川のさ波さゞれ越ゆ

ゆく」などあり。○いはほ。大なる岩のことなり。

○苔のむすまで。むすとは生へることなり。彼の萬葉集十八の巻の有名なる「海行かばみづく屍山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめ」の草むす屍も、屍の上に草の生へることなり。

○一首の意は、我が君さまは、千年も八千年も限りなく、小さき石が大きなる岩と成りて、しかも、其の岩のへに、苔の生へるまでも限りなく久しく榮えたまへやと、いはひたてまつりし歌なり。この頃國民の歌ひはやす「君が代は千代に八千代にさゞれ石の岩ほと成りて苔のむすまで」といふ御歌は、やがて、この歌の第一句をかへたるものなり

○

ふして思ひおきて歎ふる萬代は

神ぞしるらむ我が君のため

○これも、全集全部にありて、素性法師のよめるなり。○神ぞしるらむ。神さまがよくれ取り計らひに成るであらうといふことなり。○ふして思ひ、おきて歎ふる。君が御年を萬代までも久しかれと、臥てもいのり、起きてもいのり、常にいのることなり。いのることを、歎ふるといひたる詞、巧みなるを見るべし。

○一首の意は、我が君の御よはひは、萬年も幾萬年も久しかれと、わが寐てもいのり、起きてもいのり、常にいのり居るが、よしや、わが力にはかなはずとも、我が君の爲に、必ず、神さまが、よくれ取りはからひ遊ばすであらうといふことなり。

○

峯高き春日の山に出づる日は
　曇る時なく照らすべらなり

○これも、全集全部にありて、醍醐天皇の第二の皇子、保明親王の生れさせたまへる御時に、典侍なりける藤原よるか朝臣のよめるものなり。この皇子の御母は、中宮穏子と申して、藤原の基經公の御女なり。○峯たかき春日の山。表は高き春日山といふことなれど、裏には貴き藤原氏の御腹といふ意をいはせたるなり。春日の神は藤原氏の氏神にして、當時、基經は藤原氏の中の第一の人なれゞなり。○出づる日　表は、高き春日山に上れる日のことなれど、裏には、生れさせたまへる保明皇子の御上を申したるなり。天皇の御上を、日にたとへたゝへ奉るより、皇子の御上をも、全じやうにて天つ日にたとへたゝへまつれるなり。

○照らすべらなり。照らすべきやうなりといふ如き意にて、推量したるなり。表は日の光りの照らさむことをいひて、裏には皇子の行末の御光のめでからむことをこめたるなり。

○一首の意は、高き春日山の頂より出でたる日かげは、曇る所なく明に高く照らすべきやうなりといふことにて、かゝる貴き藤原氏の御腹に生れたまへる皇子は誠にれん行末も曇る時なくめでたく世を照したまはむとればねまゐらすにこそといふ意を申したるなり。

○

君が代は限りもあらじ長はまの
　まさごの數はよみつくすとも

○この歌は、古今集の二十の卷にありて、仁孝天皇の大嘗會の御時に、伊勢の國よりよみて奉れ

る歌なり。新嘗祭とて、毎年、新穀を供へて、神神を祭りたまふ式あり、天皇新たに御即位せられて、はじめて行ひたまふ新嘗を大嘗會とは申すなり。○長はま。近江の國なる地名なり。○まさご。まいさご或はますなごといふ詞の約まれるにて、砂の事なり。○よみつくすとも。よむとは數へることなり。「我が戀ひはよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも」などいふよむに全じ。

○一首の意は、たとへ、長濱のまさごの數は、數へ盡くさむとも、幾萬代も幾萬代も久しかるべき君が代は、決して數へつくすべからず、君が御代は誠につくる時なしと、御代をいはひたてまつれるなり。

○

美濃の國せきの藤川たえずして
君につかへむ萬代までに

○これも全集全卷にあり、陽成天皇の大嘗會の御時に、美濃の國よりよみてたてまつれる歌なり。

○一首の意は、美濃の國の關の藤川の流れの絶えざる如く、絶ゆる時なく、萬代までも幾久しく、かく君に御奉公仕らむと、君が御代の久しからむをもいのり、我がまこゝろの變はらざらむことをちかひたる歌なり。

拾玉抄（二）

安藤正次

あかつきかた（和泉式部日記）

人の皆うちとけてねたるに、その事とおもひわくべ

くもあらねど、つくづくと目をのみ覺して、何心なうらめしうのみおもひふしたる程に、雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもおもはずやあらむ、いみじうたへがたき心地して。

まどろまであはれ幾夜になりぬらむたゞかりがねをきゝわざにして」かくてのみ明むさよりはとて、妻戸おし明けたれど、大空に、西に傾きたる月の影遠くすみわたりて見ゆるに、霧わたりたる空の景色、鐘の音、鳥の聲、ひとつにひゞきあひて、更にすきにし方、今行末のことゞも、かゝる折はあらじと、袖の色さへあはれにめづらかなり。

これらも、實に、當時の文章の上品とやいひつべからむ。優に、あはれに、人の心をひくべき事柄をうつすは、わが國文こそ、げに、上乘の文體なれ。そは、徒に論ふことはさておき、これらの文例に照しても明なるぞかし。

此の始の一段は、主客相對せしめて、一層の文彩をそへたり。即、胸に、萬端の情緒せまりきて溢れむとする人と、然らざる人とを、兩々比較して、その輕重を點綴し、以ちて、讀者胸奥の琴線にふれて、戛たる響を發せしむ。

即「人の皆うちとけてねたるに」といへるは、おのが方の人のことをいへるにて、心に思なき人は、皆、熟睡したるに、おのが身はおもひにせまられて、いねむとしてもねむられず。「つくづくと目をのみさまして」おもひなき人をうらやみつゝ、をりからの雁の聲に、宮は、いかにきゝ給ふらむ。あはれ、わがおもふ程には、よも深くはなど、女心に、そゞろかなしきまでに、なりたるなるべし。たへがたきもことわりなり。優に、あはれなる情を、やさしき筆に

て、よくも細緻にうつしけるよ。歌を「たゞかりがねをきゝわざにして」といへる、いみじうあはれなり。

次に、曉方の景を描きいでたる縹渺たる風情、人をして、無限の情を想起せしむ。末段「袖の色さへあはれにめづらかなり」と、筆をとゞめたる、最力あり。

式部は、好みて、比重の詞を採りて、文采をそへ、推想の句を交へて、文情をますが如し即、既にわけたるが如く、有明の月の條に「この月ばみるらむかしとれはせた云々」といへる、また、同じ心にまた寢さりける人かな云々」といへる、この條にても、「人はかくしもれもはずやあらむ」などいへる、いづれも、推想の句をまじへて、一層の妙を示したるものなり。その比重の詞を採りて、文采をそへたるは、有明の月の條に「門をたゝかせ給ふに目をさましイ云々」とある「はかなきものにかきつくる程にぞ宮より例の御文ある」とある、また、此の條にては、「人の皆うちとけてねたるにその事と云々」「うらめしうのみれもひふしたる程に雁の云々」「月の影遠くすみわたりて見ゆるに霧わたりたる空の景色云々」などある類なり。こは式部の殊に好みて多く用ゐたるものとみゐたり、されど、かく、煩はしきまで重ね用ゐては、折角、文情をますべきものも、少しく、厭はしくれもはるゝ傾あり。心すべき事なり。





漫録

御言の花陰

清水眞三郎

謹で

教育勅語の聖旨を按じ奉るに、あつく大御心を臣民の教育に注がせ給ふは、實に畏く忝くきかぎりになん。こゝに、古へより今に至るまでの歌ともの聖旨に協へるものを撰りあつめて、童蒙の一助にもとてかくなむ。

勅語

朕惟ふに我皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹ること深厚なり

肇國

天の原よさしまつれる日の御神てらさむかぎり國はうごかず(うけらが花)橘千蔭

百千々の代にも動かじ天地の神のかためし大倭島根は(琴後集)村田春海

久方の天よりおろす玉鉾の道ある國ぞいまのわが國(續古今集)後嵯峨天皇

かしこくもてる日の本と名づけゝるくもらぬ君を主にはして(千首)宗良親王

飛びかける天の磐船たづねてぞあきつしまには宮はじめせる　三統理平

樹德

治めつる我が世いかにと浪風の八十島かけてゆく心かな(御歌集)後柏原天皇

世治り民やすかれと祈ることぞ我が身につきぬ思

ひなりけれ（續後拾遺集）　後醍醐天皇
夜をさむみ寢屋のふすまのさゆるにも藁やの風
を思ひてぞやれ（續後撰集）　後鳥羽天皇
いそぐなる秋の砧の音にこそ夜寒の民のこゝろ
をもしれ（續千載集）　後醍醐天皇
雨にれもひ風にこゝろを碎くかな民のてわざの
たゞやすかれと（御歌集）仁孝天皇
我か臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥
の美を濟せるは
盡忠
山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心吾
あらめやも（新勅撰集）源實朝
今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯とい
でたつ吾は（萬葉集）今奉部與曾布
君か爲世の爲何か惜からむ捨てゝかひある命な
りせば（新葉集）宗良親王
大君の御言畏みいそにふりうの原わたる父母を
おきて（萬葉集）丈部造人麿
君はよし君とあらずも我やつて臣の道をゆかで
あらめや（伊吹迺舍集）平田篤胤
此れ我國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す
爾臣民
父母に孝に
秋の月は山の端ちかし暮れぬまに母に見えなむ
あゆめわが駒（句題和歌）大江千里
わすらむと野ゆき山ゆきわれくれど我が父母は
忘れせぬかも（萬葉集）商長麿
父母も花にもがもや草枕旅はゆくともさゝげて
行かむ（萬葉集）丈部黑當
親はよしれやとあらずも我や子の子たらむ道を

つくさであらめや(伊吹廼舍集)平田篤胤

もろこしの梢もさびし日の本のはゝその紅葉ちりやしぬらむ

兄弟に友に

めぐりあはむたのみぞしらぬ命だにあらむとおもふ程のはかなさ(新葉集)　後村上天皇

めぐりあはむたのみあるべき君が代に獨老ぬる身をいかにせむ(新葉集)宗良親王

おくれてもかついつまでと身をぞおもふつらに別るゝ秋の雁がね(風雅集)　伏見天皇

二人ゆけどゆきすぎがたき秋山をいかでか君かひとりこゆらむ(萬葉集)大來皇女

我が兄子と二人しをれど山高み里には月のてらずともよし(萬葉集)

夫婦相和し

いきていかむ妹はまかなし持ちて行く梓の弓のゆつるにもかも(萬葉集)防人　名欠

おくれ居て戀ひむ苦しも朝獵の君が弓にもならましものを(萬葉集)防人妻

わがせこはものなおもひそ事しあらば火にも水にも吾なけなくに(萬葉集)安部女郎

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて訪ひし君はも(古事記)弟橘姫

石見のや高角山の木の間よりわがふる袖を妹みつらむか(萬葉集)柿本人麿

ありつゝも君をば待たむ打なびく我黒髪に霜のおくまでに(萬葉集)磐姫皇后

朋友相信じ

吳竹の木傳ふ島の枝うつりうれしきふしも友にこそよれ(拾遺愚艸)藤原隆房

百千鳥木つとふ竹のよの　と共にふみみし節ぞうれしき（拾遺愚艸）藤原定家

たつ波も心へだてぬ友千鳥まなくしばなく聲かはすなり（常山詠草）徳川光國

われもおもふ人も忘るなありそ海の浦ふく風のやむときもなく（後撰集）均子内親王

君か爲醸みしまち酒やすの野にひとりやのまむ友なしにして（萬葉集）大伴旅人

恭儉巳を持し

程々にふしなかりせば呉竹の直きもたのむかひやなからむ（閑田耕筆）伴蒿蹊

おのが身のおのが心にかなはぬを思はゝものをおもひじりなむ（家集）和泉式部

身の程をしらぬ歎きのたもとには秋ならぬ露のおき所なき（歌集）林子平

博愛衆に及ぼし

萩の戸の花に宿れる月影はしづが垣根もへだてざるらむ　今上天皇陛下御製

仕ふべき人やのこると山深み松のとざしもなほそたづねむ（新葉集）後村上天皇

すまし得ぬ水に我か身はしづむとも濁しはせじな四方の民艸（御歌集）孝明天皇

學を修め業を習ひ以て智能を啓發し德器を成就し

修學

敎へおくこと違はずは行末の道とほくとも跡はまどはじ（後撰集）村上天皇

誰も皆こゝろをみがけ人をしる君か鏡のくもりなき世に（風雅集）藤原資明

知るや人たもつ心の玉だにも磨くにつけて光ありとは（春葉集）荷田東滿

遠國しらぬ境の言の葉も書見る道に行きかよひけり（家集）本居大平

金剛石も磨かずば　玉の光もそはざらむ
人も學て後にこそ　誠の徳はあらはるれ
（皇后宮御製）

習業

潮風にあら磯浪のいくかへりくだけても又岩にあたらむ（道栞歌合）

なせばなりなさねばならぬ成る業をならぬと捨つる人のはかなさ（伊吹廼舎集）平田篤胤

濱千鳥ふみおく跡のつもりなばかひある浦にあはざらめやは（新古今集）後白河天皇

時計の針のたえまなく　回るが如く時のまの
日かげをしみて勵みなば　如何なるわざかならざらむ
（皇后宮御製）

進て公益を廣め世務を開き

野邊に生ふるいさゝ村竹いさゝかも人の爲よき事ばかりせよ（東歌）橘枝直

常に國憲を重んじ國法に遵ひ

今の世は今の御宣をかしこみてけしきおこなひ行ふなゆめ（玉鉾百首）本居宣長

大君の御言にされば父母をいはひべとおきてまゐて來にしを（萬葉集）雀部廣島

大船に眞かぢしゞぬき大君の御言かしこみあさりするかも（萬葉集）石上乙麿

時々の御宣も神のとき〴〵の御言にしあればいかでたがはむ（玉鉾百首）本居宣長

一旦緩急あれば義勇公に奉じ

かへらじとかねておもへば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる（太平記）楠正行

海行かば水漬く屍山行かば草むす屍おほぎみの
へにこそ死なめかへりみはせじ（萬葉集（長歌一節））
大伴家持

かばねをば岩ほの苔にうづみてぞ雲居の空に名
をとゞむべき（常山紀談）高橋紹運

千萬の仇にむかへて走り猪のかへりみもせぬ心
ともかな（うけらか花）橘千蔭

千萬の軍なりとも言擧けせずとりて來ぬべき男
とぞおもふ（萬葉集）高橋虫麻呂

以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし

片岡の岩根の苔路ふみ鳴らし動きなき世をなほ
祈るかな（風雅集）賀茂惟久

君か代は巖と共に動かねば碎けてかへれ沖つし
ら波（隨筆）伴林六郎

君か代は千代に八千代にさゞれ石の巖となり
て苔のむすまで（古今集）讀人不知

是の如きは獨朕か忠良の臣民たるのみならず又以て
爾祖先の遺風を顯彰するに足らむ

敷島の倭の國にあきらけく名に大伴の男こゝろ
つとめよ（萬葉集）大伴家持

劍太刀いよゝ磨くべし古へゆ清けく負て來にし
その名ぞ（萬葉集）大伴家持

劍太刀名をとゝめずば草木にぞひとしかるべき
大丈夫の友（家集）富士谷成章

武士のとり傳へたる梓弓ひきては人のかへすも
のかは（平家物語）平景高

たらちねの名をばくださじ梓弓稻葉の山の露と
きゆとも（天正記）織田信孝

斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の
倶に遵守すべき所

帝の道たゞひとつこそきてわたし小徑によらめや人（伊吹廼集）平田篤胤

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらじな（雲錦集）加茂季鷹

家のなりな怠りそね宮人の歌はよむとも文はよむとも（家集）本居宣長

皇神の道な忘れそ現身の世の業はひのよし繁くとも（伊吹舍集）平田篤胤

之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らずうつしきて神代の言もくもりなき書こそ道の鏡とはしれ　名欠

異國のいつくにもなき山櫻うつしてぞ見む唐の春（家集）森梅溪

さへづるやからの古を祖國ゆ取めて道の本を見せむや（伊吹廼舍集）平田篤胤

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよこの正道を（伊吹廼舍集）平田篤胤

朕再臣民と倶に拳々服膺して咸其德を一にせむことを庶幾ふ

御名　御璽

明治廿三年十月三十日

主從心得草（前編續）

諏訪忠元寄贈

繪本太閤記に、貴くして賤きを忘るゝ者は久しからず亡び。舊き恨みを思ふて新功を捨る者は凶しとかや。此語、信長、光秀の行狀に能相中れり。君を見る事寇讐の如しの聖言を忘れず、光秀が難をふせぐの行ひありたし。

詩に曰、樂只の君子は民の父母なり。民の好する所

これを好し、民の惡む所これを惡む、これを民の父母と謂ふとあり。此心は、人の上に立よき君子は、民の好む處これを與へ、民の惡む所是を止むこれを民の父母といふ。君民を子の如くにすれど、民も君を父母の如くにする、かやうなれど國家は泰平じや。

北條九代記兵書にいわく、寛仁大度は廣く衆を愛す、天下諸人の望みに背かずして、天下と相倶に保つよふならでは安泰にあらず。一旦權勢に恐れて隨ふといへ共、何ぞの亂れ口には、常々のうらみ一時にれこり、悉く相背く事、是人間の常なり。平生倶に仁愛の人は、必ずあしき時もよき時も相同じ、相かわらず相親む。是全く人情斗にあらず、此方の仕方によりて　他人も又かくの如し。只、人の嗜むべきは、正道順路の人愛こそ大事なれ。常に、仁義禮の正道をふまざれど、禍ひ起りたる時なげく共甲斐あるまじ。此時佞人不忠は用に立ずして敵となる、忠信義士は、たとひ何樣の事あるとも、心變ぜずして味方なり、愛すべき者は忠義の臣なり、國家を保つの根本也。

扨又、主人たる者は、我子の入用をはぶき、家來を取たつる工面あるべし、渠も人の子なりといふ事を忘るべからず。

烏丸大納言殿、歸東下向の節、吉田の宿にて、旅籠やの亭主、下男を打擲するを見て、歌に、

　あわれしれ使ふも人のれもひ子を
　　我れもひ子に思ひくらべよ

享保の頃、安藤某殿、重き御役を勤られし時、出仕の折節雪いたく降積りたるに、酒屋の丁稚素足にてしりをからげ、何ぞ御用はござりませぬかと、聲ふ

るはして徳利を持屋敷の前をあるくを、御駕の内より見給ひ、不便に思召、

雪の日やあれども人の子樽ひろひ

此發句の御心より見れど、萬民を惠み給ふ事疑ひなし。又、延享の頃、淺草御藏前に西鳥といへる人あり、雪のふりし夜俳諧に行とて、召使ひの丁稚をつれ出るを見て、女房發句をしたり「我子なら供にはつれじ夜の雪といひければど、西鳥供をつれず出行し由、面白き句にして感情深し、人の上にたつ者、此心ありたし。

下々を兎角いたわれむごくすな
　かれもれなじく人の子だから

召使ふ人れむつらくゑりきらひ
　依怙ひゐきなどせぬものぞかし

唐土の陶淵明は、手前の悴に、小童一人追はす節、申送りしは、汝は我子なり、渠は人の子也、不便をくわへて使ふべし。といひ送りしは遖の君子なり。此心をわするべからず。又、人の身上は、多くは婚禮祝義の時、過分の物入をして、それより不如意となる事あり。(商賣の運不運は、我力におよばず、其外〇〇かひ勝負ごとは論の外なり)是身分相應といふ事をしらず、其時の花美を思ふより起る事なり、別して女子嫁入の支度には、思ひのほか物入大相なるものなり、己が分を知りたる人もあやまる事あり、こ況や分限をしらず、花美を好む人に於てをや、是外聞と娘の不自由とを思ふより起る事なり、此所に於て分限の場に止まるべし、大事の所なり、しかと知るべし、是をしらざれど、其後は身上に心をくるしめ、家來をかへり見る事あたわず、これより上下和合せず、大いなる災を引出すことあり、心を付べし、

兎角家來を取立る心あらで、上下和睦して家繁昌いたゞべし、家來の昇沈をかまはぬ人は、行末覺束なし、思案あるべし。

諸國後風土記大全十二巻目に、一の宮といふ所に、本多百助を籠置けるに、敵せむる事急なり、此時酒井榊原の面々申けるは、此所は難所なり、百助をすくふ事なりがたし、只捨置玉ふべしといふ、御明君の玉はく、主の大事に家來がかはり、家來の難義は主人が救ふ、古今の武法なりとて、終に百助をすくひ玉ふ。是、天下をしろし召程の御人の心を見るべし。氣のつけ所なり、目を覺して能見玉へ。

聖人も、婚禮にも法事式にも、身分相應稱禮にかなひいさぎよきはなしと仰られたり、兎角分限相應の所を心がくべし。又君となりては惠あり、臣としては忠あり、此二ッ大切なり。若君に惠なく、臣に忠なきは大失なりと、孝經の註にも見へたり。誠にしかり。能心得て下々を取立べし。是上に立人の心を用ゆべきの第一なり。歌に、

召使ふ人にはなさけふかくして
家のたきすはきひしかるべし

此歌の心大入用急度是を用ゆべし。いかにいたわるがよろしとて、あまりゆるすべからず。

和布苅神事

宮地巖夫

和布苅の神事は、我が國三不思儀の一つなり。三不思儀とは、曰く出雲の龍蛇なり。曰く赤目早鞆の和布苅なり。曰く筑紫の不知火なり。然れども、他の二不思儀は、他日又之を述ぶべし、今云はんとする所は、和布苅の神事に在り。抑ゝ和布苅の神事たる、

實に靈異を極むるものとす。其は先づ、其の神社のことより之を擧んに、長門國赤目關に座す住吉神社と、豐前國門司關に座す早鞆神社との兩社に於て之を行はる。住吉神社は、壇浦を去ること凡五十町の此方に在り。表筒男神。中筒男神。底筒男神の三神を祭る。又、早鞆神社は海岸に在り。玉依姬命を第一として、彦火火出見尊。豐玉姬命。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。阿曇磯良の五神を祭る。斯の如くにして、和布苅の神事は、兩社ともに、毎歲十二月晦日の夜を以て和布を苅り、翌元旦を以て之を神前に供へ奉る。其の儀、先づ住吉神社にては、當夜神官神事の服を正し、社頭の儀式畢りて、壇浦に出向ふ。此の時松明を點して行く、其の松明は、三本乃至五本を用ふ。秋の頃より清淨なる竹を蓄へ、太さ徑り壹尺斗りに作り、齋火を移し之を點して行く此の松明を持者凡七人乃至十人を以てし、此の役に當る者は、預め志願して之を聽され、潔齋して之を勤むと云ふ。其の夜十時頃より社頭を發し、壇浦に向ふ。故に此の地の者は、此の松明の火に逢ふことを怖れて、當夜は更に外出するもの無く、若し止可からざる事故など有りて、是非なく外に出たる者、途中にて此の松明に出逢ふことなど有る時は、成る限りは避け逃るれども、是非無く行逢ふ時は、道の傍に避け、地に伏して此の火を見ず、松明の行き過るを待て立つと云ふ。蓋、之を見る時は、大に祟有りと古來傳ふるが故なり。斯くて和布苅の神官壇浦に達する時は、海濱に向ひて岩あり。此を火立岩と云ふ。此の岩上に其の松明の火を焚き、海に向ひて神饌幷びに玉串を供へ、祝詞を奏し、拜禮畢て、神饌を撤す、其の神饌の中には、當日搗たる餠あり、之

を人々に頒ち、各々其の火にて之を燒き、食して和布苅に取かゝると云ふ。今世俗に、當日搗たる餅を燒くこと、及び新年の餅を舊年内に燒くことを忌む習慣有るは、全く此の和布苅の夜、當日搗の餅を燒くことも有るを。憚るより起れるものなりと云ふ。斯くて、和布を苅らんとするに、此の海岸には、深く海に入りて石階あり、常には其の二十段ばかり、水中に之を見ることを得れども、其の下は知ること能はず、又此の地を壇の浦と稱するも、全く此の自然の石段海中に在るより起れりと云ふ。然るに、此の海、毎年極月除夜の夜半には、必ず汐引て干潟となるを以て、和布苅の社人松明を點して、其の石段を降るに、當夜に限り、海底に達することを得て、和布を苅り、直ちに歸り登るとなり。然るに、其の和布は、凡三百尋の海底に在るを以て、其の底に至らざれば得ること能はず、其の海に入るの間は、髣髴として宛ら夢の如く、裝束の儘にて入れども、更に濕ること無く、唯足もとにのみ知覺有るばかりなりと云ふ。其の途中に魚あり。又カジメと稱する、一種の和布の如きもの等有れども、是等には目をもかけず、手を觸ることなどは、決めて有ること無く、愼みて段を降り、海底に達したる時。和布を三鎌苅りて之を取り、四鎌苅ることをせず。若し四鎌に及ぶ時は、潮に溺るゝの難ありと云ひ傳へて、深く之を愼む。既に和布を苅れば、直ちに段を歸り登るに、一足上れば、潮一段を浸し來る心地せらるゝと云へり。斯の如くにして、元の海岸に上り、其より又本社に歸り、元旦に至りて、其の和布を神前に供へ奉ること已に云へるが如し。又往古に在りては、此の和布を　朝廷にも献納せしに、其の事絶たる後と雖、明

治維新の前までは、此の地に勅使家と稱する家ありて、其の主人元日の夜衣冠を正して社頭に參り、幣帛を奉りて、和布を受取り、自邸に歸り、其の神事の爲め設くる所の一屋、齋の屋と稱する所に於て齋戒して、遙に天朝に奉るの儀を行ひ、寶祚の無窮を祝し奉りしと云ふ。又中古に在りても、武將等より、直會の和布頂戴云云の書翰等其の古文書中に見ゆるを以ても、此の神事の古來極めて嚴肅なりしを知るべし。舊藩政の時代に在りては、祠官の内和布苅の家柄數家有りて、特に祿を給せられ、且、此の神事の費用の如きも、總て藩費を以て之に充られしかど、最も嚴重に行はれしを、維新改革の後は、一社に於て古式に據り、之を行ふことゝなりしより、往世の如くすること能はざるも、和布苅の事に於ては、總て古代に異なること無しと云ふ。

又、早鞆神社に於ても、同夜同時を以て、和布苅の神事を行ふこと、大同小異無きに非ざれども、凡住吉神社の儀の如くなりと云ふ。其の内。早鞆神社は、海岸に在りて、其の海に入る石段も、直ちに神社の下に在るより、是等に就て、聊、其の儀に差異有るのみなり。斯くて、此の和布苅の夜、其の時刻に至れど、赤目、門司、共に、社頭は云ふを待ず、民家より海上の船に至るまで、悉く燈火を消すと云へり。此は全く靜謐なるを主とするが故なり。其は、壇浦に、八軒家と云ふあり。其の中に、今にも、當夜簾を掛る家有り。其の由緣を尋ぬるに、昔、此の家より、和布苅の神事の火を見て、船火事なりとし、大に騷ぎ、隣家の者等も之を聞傳へて騷ぎしが、神事の障となり、其の祟にて、青竹を以て家を圍はれたるを、後に至りて、其の竹の圍の代りに、今の簾を

掛ることゝはなりしとの事なり。此にても、其の靜肅を主とすることを知るべし。又赤目、門司にては、和布の事を名イハズとも稱す。其は、此の神事の前には、愼みて、其の名を云はず、又網などにかゝりても、之を取らず、神事畢るの後を待て之を取ると云ふ。其の嚴肅を守ること斯の如し。

又此の和布苅の神事の起原は、昔 神功皇后、三韓を征伐せんとし給ふ前に當りて、猶穴門豐浦宮に坐ましゝ時、海童神の後裔にして、阿曇磯良と云ふ神人あり、潮涸瓊潮溢瓊の法を得、常に海底に住て海の事を業とすと聞食し、之を召させ給ひしに、詔に隨ひ參りて、其の法を授け奉りしかば、皇后之を得て大に悅せ給ふ、後三韓を征伐して大勝を得給ひ、御凱旋の後、神の御誨に依て、穴門の山田邑に三柱の筒男神を祭らせ給ふ。是れ即ち今の赤目に座す住吉神社なり。此より毎歳十二月晦日の夜を以て和布を苅り、翌元旦を以て其の和布を神にも供へ、朝廷へも獻る事となりしと云ふ。又早鞆神社にて之を行はるゝも、其の祭神の豐玉姫命。玉依姫命の二神は共に、大海神の御女にして、彦火火出見尊は、神代に、大海神より、潮溢瓊潮涸瓊を授り給ひし御緣由あり。又、鸕鷀草葺不合尊は、豐玉姫命を以て御母とし奉れば、孰れも、大海神に御因緣深き神等に座ますのみならず、其の大海神の裔にして、然も、溢涸瓊の法を、神功皇后に授け奉れる、阿曇磯良をも合せ祀られたるに依れば、此の社も、住吉神社と同時に祭られ、又、此の神事も、同時に始りしものなるべし。然れば、此の神事は、神功皇后の御時に始まりたるものなり。大海神の靈異を示し給へる所なり。豈仰ぎ尊ばざる可けんや。此を此の

神事の起原とす。

引用書

日本紀、古事記、住吉神書、故事因緣、長州筆記、諸國里人談、神社考、神名帳叢説、速門明神古記、長門住吉神社舊記、古老口碑、本朝怪談故事、

井蛙小錄

井上頼文

日用晴雨管窺に

山の形春なつちかく秋冬は
　遠く見ゆるを雨氣とぞ知る

夢見るは雨と日和のふたつなり
　變らぬ時に見るはまれなり

小便のしげきは日和のむ水の
　腹にたもつを雨と知るべし

鳥の聲すみてかるきは日和なり
　おもく濁るを雨氣とぞ知る

しる人はかんがへて知れ書く筆の
　おもはくよりもまはらぬが雨

のみや蚊のきはめてしげく喰ふならむ
　雨のあがりと雨氣づくころ

香の火の何よりはやくたちぬるは
　雨のあがりと雨氣づくころ

ねごゝろのあしき夜ならむ雨と知れ
　さてはぬす人ゆだんむしすな

螢火のすくなき年は秋の田の
　刈穗も實のりよしと知るべし

旅行用心集にも

筑波晴れ淺間曇りて鵙なかむ
　雨はふるとも旅もよひせよ

五月西春は南に秋は北
いつも東風にて雨ふるとしれ

といふ歌を掲げたり。こは皆從來の經驗によりて定めたるものなるべけれど、多少の心得ぐさともなりぬべからん。

千代の家土産

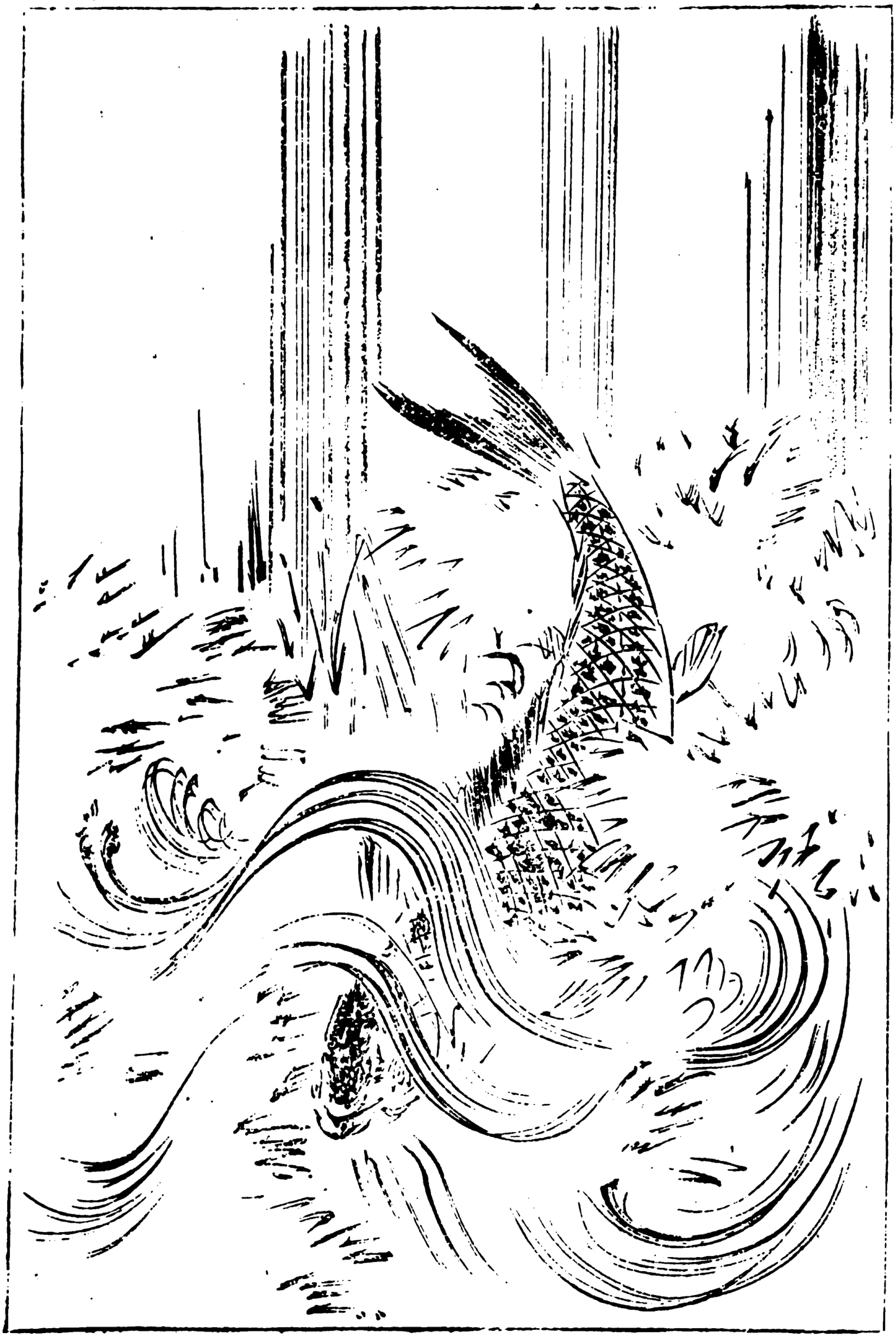
金津常十郎

こはおのれをさなかりしころに、得てうつしおきつるにて、作者は詳ならず。今、をみなどのをしへのかたはしにもとてなん。

老翁あり。鯉の畫の掛もの持來ていひけるは、此の鯉の、畫は、世に目出度出生鯉といふもの丶圖なり。求め賜へかしといふ。

おのれその掛物をひらきみるに、此の鯉の圖、かのありふれたる、勢ひ能く瀧をあふむきて登る圖にはあらで、かへりて、瀧壺にさかさまに飛び入りて、頭より半身は水中にかくれて見えず、尾より半身は、さかさまに上に出でたる畫なり。予いぶかしくて老翁に問ふ。世に出世鯉といへど、あは向きて瀧にのぼらんとする圖なり。さるを、此の畫の鯉は、頭を十分にさげ、逆さまに水中に入らんとする圖なり。其の身を下へくだす體にて、あふむきて上へのぼる圖にあらねど、何ぞこれを出世といふべき、是は其の身を下へくだす鯉なりといへど、

翁答へて曰く、おろかなるかな。世の人。汝にかぎらず、皆あふむきて只天にのぼらんが如き立身のみを願ひて、其の身をへりくだるが立身なる事をしらず。むかし、蠖尺虫といふもの、己が身をのばし長せん事を願ひて天帝に請ひけれど、天帝の御仰せに



は、汝身を伸ばし長ぜん事を願はんよりは、先々身をかゞめちゞむることを知れよ、とのたまふに、蠖尺虫頓悟發明して、忽ち身をかゞめちゞめしかば、おのづから力を入れずして、其の身をのばし長ぜしとかや。尺とり虫の身をちゞめかゞむるは、身を伸ばし長ずる元なり。大舜の父母よからぬをよからずとせず、只我孝行のたらざるなりと、身をちゞめ、身をかゞめ、十分に頭をさげて、謙下りたまひしが、四海をたもちし出世のもとなり。文王頭をさげ、へりくだりて殷にしたがひしが、終に子孫四海をたもちし出世のもとなり。又韓信が身をかゝめ、かしらをさげ、市人の股をくゞりし勇氣かんにんは、やがて大元帥にも至るべき出世のもとなり。張良が石公に身をかゞめ、頭をさげ沓を取しが、漢家をひらく出世のもとなり。秀吉公の身をかゞめ、頭をさげ、松下がざうりを取りしが、天下に頭をあぐる出世のもとなり。其の外、大倭も唐土も、天下に出世發達せし人は、みな身をかゞめ、頭をさげ、へりくだりて、身を愼しむかんにんとりもなほさぬ大勇なり。終にこよなく立身する出世のもとなり。空也上人のうたに、

山川の末にながるゝとちからも
身をすてゝこそうかむ瀬もあれ

聖賢や、君子や、祖師や、誠の豪傑英勇は、只己が身を捨て、頭をさげ、身をかゞめ、へりくだり、かんにん辛抱のちからを以て、自然と天上出世に至たるなり。只あふむき我慢をはり、よくをはりて、立身をせん、出世せんといふは、皆ろかにして、身を亡ぼすなり。人は只うつむきてこそ、身をも家をもたつるものなれ。或人大黒天の畫賛によみし狂歌

に、

上をみず只うつむけよ足本に
　福壽目出度俵まんまん

此の如く、只うつむきて下を見ねど、福も徳もなきものなり。むかし、大勢の蛙あつまり居しに、折ふしあつき夏の日にて、皆咽をかわかし、こまりし所に、夕立のつよくふり來りしかど、蛙みなよろこびて、此雨を呑みて、咽をうるほさんと、我一と背をのそし、眼を空にして、口を開き、十分にあふむき、そりかへり、互にわしあひあらそひしに、思ふやうに雨の口へは入らざりしかど、猶々互に背のびして、我上にならんと、大にあらそひしに、一足のかしこき蛙ありて、ふとうつむきて、下をみれど、其の邊の池水の、夕立にましたるをみて、始て悟道發明して、あふむきては、人々爭ふのみにして、萬の道を得る事あたはず。只うつむきてこそ、萬の道を得ること安しと、頓に池に飛下りて、靜に我のみ十分に水を得しとかや。世の人、皆此の大勢の蛙にして、欲の眼を空にいたし、我慢の口をはり、背をのそし、只あふむきてあらそふのみにて、一足のかしこき蛙の如く、只うつむきて、己が身をへりくだるが幸なるを知らざることそかなしけれ。故に、此の畫の鯉も、知惠も、學問も、美目も、氣量も、發明も、權威も、位も、富も、貧も、打すてゝ、誠といふ水の中、かんにん、辛抱、謙遜、辭讓の瀧壺へ、我が身を打込む勇氣、やがて、天上出世のもとと知り給ふべし。むかし、齊の桓公、管仲にむかひて、君の貴ふ所はいかにと尋ね賜ひしかど、桓公忽ちあふむきて、天を拜し賜ひしに、管仲申しけるは、君の尊び賜ふ天は、蒼々たる天にはあらず。仰かすして、俯して下

を見たまへ、君の尊び賜ふ天といふは、民百姓の事なり。と申せしとかや。君としては、常に下をみて、民百姓を愛し給ふがよく天に事へ國をたもち給ふ出世のもとなり。只あふむくばかりにて、上に眼がつきては、誠の道にはいたられぬなり。

世の人は上に目がつき横に行く
　葦間の蟹のあはれはかなき

世の人みな我分限より、上に目つけば、道をうしなひ、横にゆかねばならぬものなり。横に行けば、忽ち巳が身を滅すなり。故に、此翁が、此の畫の鯉の贊の心にてよみし狂歌に、

我意をすて身をへりくだる堪忍の
　誠は代々に身を立る鯉

と、かく我意をすて、頭をさぐるが、安樂なるに、世の人、我慢をはり、頭をさぐる事をきらひ、そりかへりてはあふむけに、うしろへたふれ、身をうしなふが多し。昔無可有の郷に、龍藏といふ者あり。又虎藏といふ者あり。此の二人ともに、此所にては、家富榮、同役をつとめ、ともに勢ありけるまゝに、互に威を爭ひ、我意を立て、龍藏は虎藏の上に立たん。虎藏は龍藏の上にならんと、龍虎大に内心にいどみしまゝに、おのづから出會度に、たがひに頭を下げじと、むかしは互に一尺づゝも下げし頭を、龍藏は九寸下ぐれば、虎藏いかりて八寸さぐる。是をみて龍藏大きにいかりて、重ねての出會には、五寸より頭を下げぬを見て、虎藏大にいかりて、頭を三寸より下げざれば、今は龍藏ますますいかりて、又の出會には、一寸ばかり頭を下ぐれば、虎藏又いかりて、一向に頭を下げざれば、龍藏大きにいかりて、かさねての出會には、巳が頭をうしろのかたへ二三寸反

りかへれど、虎藏すぐに、頭をうしろへに一尺ばかりそりかへれど、龍藏ますますいかりて、已れかさねての出會には、趣向せんと、互に已が非は知らで、我意我慢のみを立てけるが、同役の事なれど、又此の後に出會の時になり、龍藏はかねての手段にて、虎藏より半時も先へ行て、頭をあふむきに反りかへり、疊へつけて手枕をなし、是は々々虎藏殿御出かと、挨拶すれど、虎藏おどろき、南無三けふは先をこされたり。此の上は疊を引まくり、巣の子の上にあふむけに、そりかへゝんとおもひしが、ふと心付きてみれど、うしろへ反りかへる頭も、必竟前へうつむく頭も、同じ事にて、反りかへるは逆にしてくるしく、うつむくは順にして安しと、心づけ共、何分くちをしゝ、いかゞはせんと思ひしが、まゝよ、其の口をしきも、共にまけてしまへと、大金剛力を出し、汗水かきておもひきり、扨もさても、龍藏先生、御苦勞に御入來、かたじけなしと、頓と頭をうつむき、疊の上につけて、あをむきてみれど、かの龍藏も、叮嚀に頭をうつむき、疊の上につけて居るに、虎藏おどろき、これは〳〵龍藏殿、おそれ入ると、又頭を疊にさげつくれど、龍藏も、扨々虎藏殿、御叮嚀と、又頭を疊につくる故に、是は々々と、又虎藏頭を疊につくれど、又龍藏も頭をさげ、疊につくる。爰において、又虎藏も頭をつくれど又龍藏も頭をつくる。よりて、又虎藏も頭をつくれど、又龍藏も頭をさげ、互にいまは、とん〳〵〳〵〳〵と。手まりつくやうに頭をさげて、兩人一同に横手を打ち、扨も々々御影にて、今日といふ今日は、大安樂になりましたと、大きに笑ひよろこびしとかや。是より、互にむづまじく、ともどもに榮えしとぞ。しかるに、世

の人、此のうつむく頭の安樂なるを知らで、只あふむき、肱をはりて、我意をなし、其の生涯をくるしみをはるなり。

よしあしは人にはあらでわれにあり
　かたち直きにかげはまがらず

反射鏡　　西海坊

貞婦上田しも子

凡人をほめ、そしりおとしめなどするは、いとかたきわざなり。さるは、昨日まで、貞婦、孝子、忠士など、かくれなくほめそやされしものすら、今日は毒婦、不孝もの不忠ものとののしりそしらるるものの多ければなり。おのれ、孔子の聖なく、遷固の史的眼光もなければ、あまりにむらぎもの心を動かしつることのあれど、にぶれたる筆にて、聊かかきつくるになむ。

しも子の夫は、信幸と呼びて、しも子とおなじく、愛媛縣松山市の生れなり。廿六七年といふに、名古屋第四區土木監督署在勤を命ぜられて、去年五月頃、伊勢國宇治山田町に出張したりしが、下痢病に催し、一週間だに過さぬ内に、はや生命さへ覺束なくなりけむ。この時のしも子の心のいかゝなりけむ。しも子は、遂に醫師の止むるをも用ゐずして、三重縣私立病院に入院せしめつ。眼くぼみ、鬚ながく生ひ、頰の骨たかくいで、肉おちて四肢皆骨のみとおもはれて、今井院長も、いとかたげに診みられぬ。まして去年は、旱魃しきりに續きて、熱さいはんかたなく、すこやかなる壯夫にても凌ぎがたかりき、ましてかゝるやせさらぼひたる人をや。されど、しも

も子は、只神のたすけと萬一をたよりに、つゆまどろむことなく、ものいふさへいとかたげなる夫の枕邊にさふらひて、扇ぎてあつさをしのがせつゝ、たよりなき月日をあはれに送りぬ。田舍の醫師とは異りて、萬事整頓し、ことに今井名醫の、ひときはことなる技倆と、しも子のひとすぢなる心を、神もあはれみたまひけむ、日にけにあしくなりゆきたる病も、次第におこたりがちとなりぬ。しも子の喜びやいかなりし。天にものぼる心地やしたりけむ。かくして、九月の半ら頃、漸く退院することゝはなりぬ。

おのれはしも子のやせ衰へて、朝な夕な介抱したりし有様の、ことにあはれには覺ゆるものから、つたなき筆にては、なかなかにかきいだし得ず、茲にはそのあらましのみをかゝげぬ。

世にはわづかに六ヶ月の行をもて人をさだむるは、いとあはてたるものなりといふ人もあれど、六ヶ月豈短かからむや。世には、わづかに一ヶ月をだにおすごさぬ人の多かるを、惱まずたゆまず、十年一日の如くつとむる人、はたして幾人かある。されど、これをしも、貞婦といひたりとて、何のあやまちかこれあらむ。

不貞婦某

かゝる女のみちみちたらむには、おのれはまさに惱殺すべし、夫の重いたつきにて入院したりしに、朝な夕な憂ひ悲む色なきのみか、たはけごとなどして、まことに人目もはゞからず、めぐりあるく折などには、袖は肩にひきあげ、衣のすそは太股までかゝげて、衣至骭袖至腕といふ如き有様なりき。されど、誰いふとなく、みにくき婦なりと噂するに

至りぬ。かくておのが二世ともたのみし夫の、かの世の人となりても、から〳〵とうちわらひて、對岸の災みるよりもなほ冷やかなり。

あはれ、世にはかゝる女もありけるか。あはれ、世には、しも子の如きもありけるか。水と火、日と月、善と惡とうらうへなるは常理なりとは、あきらめながら、なほあきらめにくゝて、かゝる反射鏡をぞものしつ。

才くらべ（十四）

蓬生屋女史

飛驒の工と百濟の川成

むかし桓武天皇の御代に、百濟の川成と云ふいみじき繪師と、飛驒の工と云ふいみじき工とありたり。互に世にならぶものなき堪能のものにて、桓武天皇のうつされし都武樂院は、此の工の起てたれぞ、世になくめでたしと云ふ。川成もまたある殿の御堂の壁にかきたる繪、さながら生ける如くめでたかりしとぞ。かつて此の繪師、從者の童を逃がしたるとき、ある高家の下部をやとひて、其の童をさがさしめしに、下部童の顔を知らざれぞ、川成みづから童の顔の限りかきて與へけるに、その畫もてたやすくさがし得たりと云ふ。此の二人、互に中よく交はりながら、おの〳〵その業をいどみあひける。あるとき工、川成に云ふやう、此の頃、我れ一間四面の小さき堂を家の傍に立てたり。おはして見そなはせ、かつ、また、壁に繪などかきて得させ給へなど云ふに、日來よき中、いなとも云はで、程なく其の家に行きけるに、げにをかしげなる小さき堂ありて、四面に戸みな開きたり。川成をかしうながむるほどに、工、か

の堂にうち入りて、いざ内へ入り、見給へと云ふ。川成椽にのぼり、南の戸より入らんとするに、その戸ははたと閉ぢたり、おどろきながら、ふやそら椽をめぐりて、西の戸より入らんとすれば、その戸はたと閉ぢて、南の戸あきたり、またためぐりて北より入らんとすれば、その戸はとぢて、西の戸開きぬ、また東より入らんとするに、かくめぐりして入らんとするに閉ぢつ開きつ、入る事能はず、あきわびて椽より下りぬ。その時飛騨の工笑ふ事限りな



し。川成はいと憎くゝ覺えたれど、わりなくて歸りぬ日來へて、川成、飛騨の工の許へ人して、見せまほしきものあれど、おはせと云へど工はおのれ前さつ日たばかりし事、ねたうかまへて、たばかり歸さんとにやあらんと思ひて、行かぬを、たび〳〵ねんごろに請ずれど、辭み難くて至りぬ。こちへと人の案内するまゝに從ひ入り、廊のある遣戸をひき上げて内に入らんとするに、内に大きなる人の黒み脹れはたくさりたるが、臥しまろびて目もあてられぬに、くさき匂ひ鼻を貫くやう覺え、おどろきて我しらずさけびて、外にとび出づれど、川成聲を聞きて笑ふ事限りなし。工おそろしと思ひて外に立つに、川成遣戸より顔をさし出して、何をおのゝき給ふ。おのれ此處に侍れど、さなおそれ給はで、とく此方へ入らせ給へと云ふに、工はなほおそれながら、おづ〳〵より見れど、こはそも死人の形をかきたる障子にてありたり。飛騨の工、かくはかられんと用意しつゝ、遂にはかられたる技藝の程、いみじともいみじく、是等才と云ふべきにはあらねど、いみじきげいくらべなれど、此處にかくのせつ。

笑話（奇談一笑）

か、　み、

猿皮、猫皮

人ありて、いひけらく、細腰鼓は、猿の皮をもて張り、三弦匡は猫の皮もて張るなり。これもと、猿はよく人の肩に緣り、猫は好みて、人の膝に據れど、各その性によりて、用ゐきとなん。ことばみじかけれど心をかし。

蚯蚓晒し

蚯蚓つねに土中にすみて、その土を食ふ、さておもへらく、もしこの大地くつがへりなむ、食らはんに土なかるべし。食はでもはた生くやとて、みづから地上にいでゝ、飢渴を試む。夏のころ地上に蚯蚓多かるは、これが爲なり。とはまことか。蚯蚓虫ながら、ねうなきものおもひをもするものかな。

蠅猫の轉生

世に醫師を蠅の轉生といひ、妓を猫の轉生なりといふことあり。これ蠅はつねに脚をもて、その翅をかいつくろひ、醫師亦手をもて、その外套を刷ふ。猫はこのみて、人の膝により、妓も亦よく膝によれどなりといふ。いやしげにして、をかしくもなし。



まつの庵（一）

白魚女史

朝まだきより雲の往來なべてならず、折りふしは雨さへまじりて、庭もみぢ叩く音いとさわがしけれど、よべより催せし小鷹狩、とやせまし、かくやせましと、思ひ立ちしあづさ弓、ま弓、空のもやうなど引きくらべて、起ちつ、居つ、心もすわらぬ折りから、遠くさへづる百舌鳥の聲に、今は堪へず。重武行かん、馬引き出せ、何のものかは風のあしの早きは秋の習ひ、小雨、村雨、何にたゆたふ事やはある、いさ早う鷹すゑよ、かゝる日にこそ中〳〵に山幸は多からめ。とく人々をも用意させよと、引きかへされぬ血氣の心に、はやくもさつ矢たださみ、はやり立ち給ふは閑院の右大臣の御孫、高藤と聞ゆる

御子なり。日來より鷹つかふ事をいたく好ませ給ひて、紅葉狩、櫻狩、たゞ鷹狩りしたまふをこよなき興となし給ひけり。武重も同じ血氣の御相手、左右なく仰せかしこみて、人々に云ひ傳へ、とく用意させしさつ男等三十人ばかり、駒をならべ、土けぶりさつと立てゝ、出でたちしに、空もおどろきてや、さつと一吹き狩衣をまくりて、とく山路へと急ぐ雲のあし一きは急なり。あとは中〳〵にはれて、空もいたく青み亘り、今までの氣色も見えぬに、人々よろこべど、御子は殊更、まろが出で立つ日、何かはさまたげん。かゝるにても今日の山さちはまづはかられぬ。かへるさを待ち見られよ、よもたゞにては山科の里に、とくなどはこりがにいさみ給へど、駒もおこがひをふり立てゝ、一聲高くいさましさをそへていなゝきけり。折しも秋の末、山姫がそめなせる錦はいとこく、からくれなゐに日もこもりて、大方ならずかゞやく木の本には、如何なる星か、月かおちたる、黄菊白菊の色あはれにこぼれ匂ふに、流石さつ男らも、光りまばゆき木の本をくゞりて、神代もきかずとはやすもあれど、うち拂ふにも千代はへぬべし山路の菊かざしなど、幾萬代ならめなどとて、黄菊つまむもあり、しばしはながめ亘せる折りしも、はるか向ふなる、なぎさの山群れ立つむれ鳥、すはとて、人々鷹をはなち、矢をつがへ、思ひ〳〵に彼方此方にと散り亂るゝをも知らず、御子はなほ何やらん見亘して、すゑ給ひし鷹の、我より放るゝを知らぬに、重武いといぶかしみて、君には何にさは見とれ給ふと二度三度呼ばれて、ふと心付き、我知らず御顔を紅にそめ給ふもあやし。御子は今年やう〳〵十六歲、まだうらわかきみどり

の御眉根少しくよせ給ひて、あまりなる立田姫の下り給へるに、思はずも心うばはれたり、おろかさよとて、紅の御顔紅葉にまぎらはしたまふ御ありさま、また優なり。さて矢つがへて、また他心なくかりくらし給ふ申の時ばかりに、雲霧さつと下ろし來りて、いかづちなりとゞろき、あられまじりの雨は、つぶてをうつばかり、風はおどろ／＼しうなりさけびて、松折れ、槇たふれ、何處ともなく萬籟のほゆる音、さながら虎狼のあつまりてほゆるが如くすさまじさ云はん方なきに、人々おどろきまどひ、人心地もなくはせ散り、散り分れて、行方も知らず、御子もおどろかせ給ひながら、たゞひとり御傍に供する重武と共に、西の山邊はるかに、人の家のあるをとく見とめ給ひて、それへと駒を向け給へば、駿馬今日こそ綱をゆるされて、千里を走るの勢ひ、一またぎに山を驅け超えて、めざしたる家の、檜垣をも飛び超えしに、御子は轡を抑へて、板ぶきの寢殿のつまに三間ばかりの小さき廊のあるに、馬をうち入れて下り、其の廊のつまなる所に馬を引き入れ、御身は重武と共に板敷に腰うちかけて、賴み給はんすべも知らで、たゞおはすに、內なる人は雷電にたゞおそれて馬の驅け入りし音も聞えでや、たゞ桑原桑原、萬歲樂とねんずる聲のみなり。

いかづちはなほとゞろきやまず、雨はいよ／＼加はりて、いつかへるべう空も見えぬに、はては日さへくれんとす心細さいはん方なき折りから、あな母樣、さき、菊の花つみ入れてし花かご、松虫とらんとて、紅葉にかけたるまゝ、そのまゝ忘れつるよ、嘸な雨にたゝかれしならん。如何はせん、如何にせばよけん。母樣、妾、とりてくと云ひざま、飛び出んずる少女

のけはひに、あなや、此のおどろ〳〵しき中に、如何で外へ出でられん、菊など捨てさせねと母にとゞめられて、さりとても折角つみてしものをとて、むづかる聲もいとおさなげならうらうたし。少女はむづかりながらまた起ちて、母様松虫も庭の木にかけたるまゝと云ひざままたとび出んけはひに、母またあわて止むるに、さりとても死してはとなほおろ〳〵むづかるに、さらばな平治にとらせんとて、下男を呼びたてたり。

（未完）



文林

寢覺梅　東久世通禧

かめにさす梅のかほりに春の夜は
寢さめさびしく思はざりけり

祝　鍋島直大

國のためきみの爲にとみなひとの
つくすこゝろぞ寶なりける

島雪　高崎正風

雪つもるあしたに見ればわたの原
つねさらさりし島もありけり

早春海　竹屋光昭

朝こちものどかに吹てわたのはら
なみしづかなりはるや立らん

早春雪　長岡護美

春もけふたち枝の梅にふりかゝる
ゆきこそ花のはしめなりけれ

荷田東麿大人　穪羽美静

あつまやまなびの館を國のため

れもひたちにし君そたふとき

加茂眞淵大人　仝

加茂川の君のなかれを汲みてみな
みやこを慕ふ世となりにけり

本居宣長大人　仝

やまむろの山さくら花かけたかし
雲のうへにもあふきますとふ

平田篤胤大人　仝

もみち葉の照りそふ御代は秋田やま
君がいさをもいちしるきかな

大國隆正大人　仝

あらたまる御代をたゝしく導きて
いさをもいとゝれはくにの君

山初雪　諏訪忠元

ふしの嶺につゝく裾野の山〳〵も
かのこまたらに初雪そふる

早春柳　池田政總

夕月のかけもれほろにほのめきて
はやもやなきは色めきにけり

新年鶯　宮地嚴夫

あら玉のとしのはしめのあつものに
向ふをりしもうくひすのなく

澤若菜　北郷久政

朝日さす野澤のこほりとけしより
みきはの若菜もえそめにけり

新年雪　鎌田正夫

新らしきころもよそひて少女らか
羽根つくそてにゆきちりかゝる

夜梅　大口鯛二

さしこめてねんとれもへは窓のとに

梅か香かをりつきはうつりぬ

新年雪　下田義天類

初日かけ御垣のゆきにはひあひて
　みいつまはゆく仰くけさかな

婁日大和なる神武天皇大社へ詣てゝ　草野隆道

畏みてをろかみなからしのふかな
　皇れはかみのとほきむかしを

月前千鳥　三輪義方

なきさにはあとのみ見ゑて濱千鳥
　つきすむかたに聲のきこゆる

新年興　三浦千春

年たてはこゝろひかれぬ物そなき
　子の日の小松にはののりゆみ

梅　足立正枝

れしなへて春とはなりぬ世の中の
　風てふかせはうめか香にして

寄草祝　菊池眞澄

ふくかせはめにこそみゑね大君の
　めくみになひく四方の民くさ

窓前梅　蜂須賀随子

吹かせはまた寒けれとうめのはな
　にほへる窓はさゝれさりけり

鶯呼客　前田朗子

鶯のこゑにひかれてれもはすも
　うめのはやしに我はきにけり

鶯在谷　柳原愛子

雪ふかき山ふところのうくひすは
　はるをまちてや里にいつらん

新年日　姉小路良子

あしたつも立舞はかりあらたまの
年のはつ日のかけそのとけき

軒梅　小池道子

のき近くさしれはひたる梅か枝に
うくひすなかは嬉しからまし

森鶯　北島以登子

うくひすの鳴聲たえすきこゆなり
野中のもりのかすみかくれに

雪中鶯聲　西四辻茂子

沫ゆきの花かと見ゆるあけはのに
うくひすの音も聞えけるかな

窓梅　常磐井文子

窓ちかくことしうゑたる梅のはな
かをりも深くさきいてにけり

水石契久　山本富士子

五十鈴川絶ぬなかれのみなそこに
みゆるいはほや幾世へぬらん

雪中鶯　鶴久子

打とけてなくうくひすにふる雪も
はるのものなる心地こそすれ

北林禪尼　柴田靜榮子

いさよひの月影なくははそかはの
清きなかれも世にはしられし

倭姫命　御巫清白

八隅しゝわが大きみの　大みことかしこみまして
手弱女の身にはあれども　御杖代によさしのまゝに
そらみつやまとの國の　うま酒三輪のみもろゆ
大かみをいたゝきまつり　もろ人をあともひたまひ
あまの原みかへれしはり　みしまさし所もとむと
國々にいゆきもとほり　あしたには朝やまそこえ

夕へにはゆふ川わたり
大かみのはりせぬ國と
そこをしもまたたち給ひ
宮柱ふとしくたて
みあらかを仕へまつらひ
神なへの大御まつりも
末の世にれきてたまへむ
かきならすその琴のねは
思ふまできゝのたふとく
五十鈴川浪のひゞきと
夜もすがら心さやめて
大神をいつきまつるも
あとにぞありける

宮ところまぎたまへども
み誨のきゝのこしかた
さくすゞのいすゞの原に
れはそらに千木高しりて
とこ宮といつきましつゝ
みとろしの御田も定めて
今もかもみのりたがはず
神路山まつふく風と
吹きならす笛のしらべは
もろ人のれもひきよらに
清まはりもちいまはりて
ひめみこの高きいさをの



皇朝婦女鑑自序

天地のはじめの時、天つ神、天の瓊矛を、伊弉諾、伊装冊の尊に、さづけ給ひて、このたゞよへる地を、修理固成せ、とことよさし給ひしまに〳〵、二柱の神、天のうきはしにたゝして、自凝島をかきなし給ひて、その島に天降りまして、いもせの道をはじめ給ひ、天の眞柱を、左右よりめぐりまして、女神まづ揚言し給ひしかど、不具御子あれましぬ。あやしとれもはして、天つ神の御教をこひ給ひしに、女の言先だちしによりて不祥、かへり下りて、あらためいへ、とこと教へたまひき。さてこたびは、男神まづ揚言したまひ、女神のちにこたへ給ひしかど、數多の良き御子生れまして、つひに國土經營の大御業をなしをへ給ひき。これなも女の男にさきだつまじき、神ながらの御教にはありける。天照大御神は、女神にれ

はしましながら、時に靫とり負ひ、弓矢をとりもたして、大丈夫の御裝して、蹈みたけび給ひて、素盞男尊をまちとはし和し給ひし、はた皇孫邇々杵尊を、この國の主君と定め給ひて、天降まさしめ給ひしなど、その大御業のみわざを見ど、婦女もをりにふれては、鋭心ふりおこして、事に堪ふべきよしをさとるべし。天宇受賣命は、大御神の、天の岩窟に、こもりたまひし時、をかしきわざをぎをして、つひに誘ひ出し奉り、大宮賣神は、つねに大御神のみもとに侍ひて、美しき詞、善き詞をもて、御心を慰め奉りき。これ婦女の柔順に文雅なるべき例にして、大國主神の嫡妃、須勢理媛命の「わが大國主こそは、夫に在せど、うち見る島の崎々、かき見る磯のさきおちず、わか草の、妻もたせらめ、吾はもよ、女にしあれど、汝を除きて、夫はなし、汝を除きて、夫はなし」と歌ひ給へるは、志操を易へぬ神ながらのみてぶりになもある。かゝるためし多なれども、代いとふるく、事のかたち、たかく、くすしきが多かれど、今しばしはぶきつ。なほふかく、古き典にわけ入りたらましかば、おのづから心にさとるふしあるべし。かくてちはやふる遠つ神代のむかしより、現見の今のをつゝに至るまでに、くれ竹の代々を經て、ほど久しき間には、千萬とせの後の世までの、うごきなき例、くもらぬ鑑と、或はまめなる、或はただしき、あるは雄々しく深沈やかなるなど、かしのみのひとりぬけ出でゝ、勝れたる婦女は、おほぞらの星の數なくなもある。さるをさきに、をと女子のしをりにとて、女鑑といへる文に、何のうし、くれのぬしたち、許多ものしてしを、今これに、なほ遺れを數多ひろひあつめて、古きより新しきに、遠

さより近きに序でつゝ、添へもし削りもして沖つ藻のよる〳〵にかきつめて、かく六巻七まきの書となしつ。されどこれ、あるが中の、萬が一なるべし。さて名づけて皇朝婦女鑑といふ。世のをとめ子たち、あらぬ他し手ぶりに心まどはず、ありこし皇國の御手風を、放らさずたもち傳へて、なほこれによりて、思ひはげみて、いよ〳〵清き心をみがきたらんには、皇國の光も、いやが上に、かゞやきつべし。さてこそ、みくにゝ婦女と生れたらん甲斐はあるべけれかし。

明治三十一年一月　　五十圜　德文
しるす





雜報

●年たちかへる　　あしたより、都大路かなたこなた見わたせども、例のやうにはなくて、いとしめやかなり、いまだ大御喪もあけさせ給はねど、參賀をもとゞめさせ給ひしに、行き交ふ人もまた例の樣ならず。やがて、十日十一日は、一週年御祭をもせさせ給ふべく、さて大御喪はあけさせ給ふにこそ。その日は、皆かしこみて、遙拜し奉るべしかし。

●新年御祝儀の御見合　　官報を以て左の通り告示せられたり。

宮内省告示第二十一號

來明治三十一年新年式は宮中喪第三期中に付行はせられざるに依り高等官有爵有位有勳者其他總て參賀並に賀表奉呈に及ばず

明治三十年十二月十六日

宮内大臣伯爵　土方　久元

●婚禮及び正月の緣起　俗に所謂緣起をやかましく言ひ立つるは、婚禮の儀式と、正月の祝賀とに殊に甚しとす。例へば、結納の目錄に、昆布を子生婦と書し、柳樽を屋内喜多留と書し、鯣を壽留女、鯛を多居、可被下を下被可と書くの類是なり。此下被可と書く所以は、一旦家を出て丶他に嫁したるものは、再び家に還るを不吉とするを以て、文面に返り點を附けて讀むを嫌ふによる。又婚禮の時に、銚子に蝶形を附くるを例とするは、一説に、蠶の蝶になりたるときは子を多く産む故、子孫繁昌を祝ふの意なりと云ふ。又婚禮に蛤の吸物を用ふるは、蛤は數百千を集めても、外の貝に合はざるものにして、貞女は兩夫に見ねずの意を含むといふ。其他、婚禮の贈物に用ふる水引は、結びきりにして返さゞるは、一たび嫁したるもの丶歸らざるを祈るの意にして、婚禮の席に、客の歸り去るを御歸と云はずして御開きと云ふも、歸るを避くるの意なりと云ふ。正月の食品、及び飾物も之に同じ、食品には、餅、昆布、煮豆、數の子の類を用ゆ。餅は、金持子持のモチに通じ、昆布は子を生むと音相類し、豆はマメヤカのマメに通じ健康の意を寓するなり。又飾物には、苧、橙、小判、餅箏を用ゆ。是れ、親代々金持（緒や橙金持）を祝する意なりと云ふ。此の如きは、皆迷信の一種に過ぎず。すべて儀式は、多く迷信より出づるも、別に利害のなきことなれは、成るべく古來の習慣を守るをよしとす。（井上圓了氏僞怪百談の内）

●高山彥九郎の鞠つき歌　高山彥九郎自筆の江戸日記といふもの丶中に、孝道を敎へたる鞠つき歌あ

り、左の如し。

一ツトヤ　人に生れし印には親に孝行せにやならぬ〳〵

二ツトヤ　二人の親にあづかりしからだを大事にせにやならぬ〳〵

三ツトヤ　三年の間の母親のくるしみ給ふを思ひ知れ〳〵

四ツトヤ　よく〳〵思へも親程に大事のものは外にない〳〵

五ツトヤ　何國の浦でも孝行の人には御惠み有ぞかし〳〵

六ツトヤ　むかし〳〵の教には孝行計りは德の本〳〵

七ツトヤ　何事よくても二親に不孝なものは人でない〳〵

八ツトヤ　やつぱり親をも我身ぞと思へも大事になるものぞ〳〵

九ツトヤ　心をよく〳〵付て見よひとりで大きくなるものか〳〵

十トヤ　とほから此歌覺ねたら世話をもやかせず親達に〳〵

●女子教育に關する訓令　文部大臣濱尾新氏は、十二月十七日、文部省訓令第十二號を以て、地方廳へ左の通訓令せり。

方今小學教育の普及と師範教育の擴張とを計圖するの際小學校に於て男兒と女兒とは務めて學級を別ち教室を異にし尙便宜學校を別にし各々其性質慣習と生活の必要とに應じ最も適切なる方法を以て之を教育せんことを要す此の如きは啻に男兒教育の實相を益々發揮するに必要なるのみならず又

女兒敎育を益々女兒に適切ならしむるに依り自ら女兒就學の數を增すことを得ん師範敎育に在りても亦管理訓育の方法等益々女子に適切ならしむるを要す故に公立小學校及び尋常師範學校の施設に關して左の要項に依り計畫する所あるべし

一市町村町村學校組合又は其區に於て二箇以上の尋常小學校若くは高等小學校又は尋常小學校の敎科と高等小學校の敎科とを併置する小學校を設置する場合に於て通學に妨げなく且女兒の員數一學校を構成するに足るべしと認むるときは女兒の爲に學校を別にする事

一二箇以上の尋常師範學校を設置する場合に於て女生徒の員數一學校を構成するに足るべしと認むるときは男女に依りて學校を別にする事

女兒に須要なる高等普通敎育を施す爲に高等女學校設置の計畫を怠らざるべきは是亦緊要とする所なり而して女子尋常師範學校を設置する場合に於ては土地の情況に依り便宜高等女學校を之に併設するも妨げなし

●歌仙椎園翁の談話　こは、いにし年十二月の末つかた、日本新聞に載せたるなり。言葉少し荒々しけれど、面白き節あれバ、未だ見ざる孃たちに示さんとてかゝぐ。

◎暫らく惡口もやめてゐたが、どうだ來年は元日からやろうかしらん、惡口も十五日分位はあるが、元日丈はかんべんしてやらうよ、ソレともやらうかねアハヽヽヽ

◎此間江州の婦人から、京都で大家と云はれる十二三人の中に近藤とか赤松とか云ふ一番出來るやッで三人丈の歌を、あやまり間違が酷いから、女でればけなき業だが、道の爲めに難じたと云ッて寄こした歌評は大分面白いから其中に世に紹介して貰らはう、女ですら心あるものはかやうに憤るのに、世間の男はダメだね

◎新體詩かれ歌所にはいッたのはをかしいね、新體詩と云ふやつは、口から出まかせにやれるので世間の者がヤタラにやるが、「詰らない者だ、「都路は五十路餘りに三ッの宿時經て咲くや江戸の花、浪靜かなる品川や」なんど、昔しもあッたが、ダラシのない

者サ、だから己れはいつも云ふのダ世間で評が分らなくツイ詰らない者は、新體詩と躬恒貫之の長歌とチヨボクレだと、此の三ツの中でチヨボクレが一番よかろう、長歌なんぞが詠めないで新體詩なんぞかいるやうになッては今に蓮門教會でも天理教會でもは引込むかも知れないとマア云ッたもんだ

◎御歌所始まッて以來三十年にもなるが長歌の詠めたのは近藤芳樹一人だ、何となさけないではないか、何とか云ふ男は長歌は今の人間に詠める者でないと廣言を云ッたからトッチメてやつた

◎貫之や躬恒と云ふと世の人が大層に重じて間違ッた歌や長歌を直に古今にこうわると云ッて例にひくが大間違だ、人丸赤人だと云ッてもツマリ昔の上手な歌よみで今生れたッて同なじ人間で歌人なのだ、別に神様でも歌聖でもなんでもないのだ、丁度大穴牟遅少名彥名の神や伏羲神農が今日に生れて醫者の有様を見て驚くのと同なじことだ

◎此間銚子の海水浴に行ッて貫之集と躬恒集の評論をかいた、いづれ來年世に出さうと思ふ、ソノ次が人丸赤人をやる積りサ

◎人詩人では古詩が作れなくては詩人とは云はさないが歌人では長歌の咏めるヤッが一人もないのは困ッたものだ、ソレも歐學をやる者が高々神官が關の山であるから長歌も振はないのだ、神官になるなんどと卑劣な考でなく大臣にでもなる積りの人がヤッテ呉れゝむ惱になるのだが仕方がないよ

◎福羽と云ふ男は如才のない男サ、十四家集の評論をした時に、おれが趣者でゐたから天智天皇で眞ッ

最初にアレの歌を評した所が、スグやつて來て笑ッて云ふのには、何も御歌所と云ふと歌の名人計り集まッてゐると思ふから間違ッてる、ツマリ御歌所の人々は歌を取扱ふ役員だと思ッてくれなければいけない、歌を取扱ふ人にソウ上手計はないと云ッたから、ソレならむ序に其取扱ふ人に上手を撰らんだなら何宜しからうにナゼわんな平凡くた計り撰らんだのですと云ッてやッた

● 東宮侍講秋屋翁の歌談　こも、日本新聞に載せたるなり。

◎長歌は暫らく咏みませんので、別に目にかけるやうな者もございません、此夏殿下のお伴で葉山の杜戸明神にまゐッた時、殿下が長歌に作れと仰ふせられたので其時詠みました許りです、其長歌は

葉山なる杜戸の神の社邊の、此岬は浪のうつ岩面白く、風通ふ松陰涼み、たひまわく日嗣の皇子の出ますみさしのつらな、心なき海人の子すらに仰ぎ見て千世さうたへり、こゝもへば諸の松は御榮の千年の根ざし、此岬の千引の岩は動なき御世の鎭めと祝ひてぞ、神しだてけんうべなく君が大御代をもりさゝしかいふ

我君の千代のいてまし松陰に玉しかむさや波もちりくろ

今御船のみさがながれや急ぐらん海士の小舟の沖にきほへる

◎長歌は近頃トント咏む者が少なくなりました、まお古人では加茂の眞淵次に加納諸平、飯田年平位で今では伊勢の橋村淳風、大阪の中村良顯などもマア咏みます元御歌所に出てゐた長州の阿倍眞貞と云ふ長歌好きがありましたが、是れは萬葉一點張りで丸

で萬葉の口眞似でしたが、萬葉の眞似許りでは長歌も面白くありません、又神祇官に出てゐて門脇重綾と云ふ人が可なり咏みましたが、近頃の人の作る長歌にはドコかにシマラない所が出來るやうです

◎私も長歌で御歌所へ出ましたが、マダ御用がございません、長歌もいづれ軍歌風の新体詩に變はッてしまいませう

◎若い中には藩中に加納諸平、長澤伴雄、土岐光秋、山田百枝など云ふ歌咏が多うございましたので、よく一夜百首もやりました、近藤芳樹の寄居歌談に其時分の話がよく出てをりまして、なんでも山田久秋と云ふ男は一番推敲家でしたから諸平が百二十首よんだのに此の男はタッタ三首目であッたと云ふことが出てをります、ドゥも此一夜百首も早く夜半までに六七十首も咏んでをかんと、眠むくなッて百首咏めんことがございます、此百首咏みはつまり歌の達者になる稽古でサシて利益もありませんが、越後の原宏平は中々の達者だそうで二三年前一日千首を天長節に咏んだそうでございます畏れ多いことではありますが

今の陛下も中々れ達者で日に何首と云ふ程れ咏み遊ばされるそうに伺ひます

◎近藤芳樹はまあ文學者の方で歌はさして上手とも申されますまい、議論は海上さんに限り升

◎私は七歳の頃でたらめに歌を始めましたが、石川依平は有名な者でしたが、私のはトント人にれ聞に入れるやうな歌でもありません

◎私も此廿一日に　殿下のれ伴で葉山へ參りまして、新年いづれ一寸歸京致す考でござい升

● 美術家高齡祝賀會　美術家、加納夏雄(七十)伊藤傍見(七十)大川貞幹(七十)星直利(七十)鈴木長翁齋(七十四)の五氏は何れも古稀の高齢に達したるを以て、舊臘十八日高齢祝賀會を催せり、來會者は、東京彫工會幹事網田、前田、坪井、藤井、金田の諸氏初め百八十餘名にして、頗る盛會なりしといふ。

◉ 毛利高等女學校の服裝　山口に設けたる、舊藩主毛利侯の高等女學校にては、こたび女生徒の服裝を改め、着衣は總て木綿と爲し、髮は蝶々髷に、頭飾はタケナガに限り、下駄は表なきものにて、凡べの日常の調度は質素にすべき樣、教頭より訓戒したりといふ。

● 老夫婦の至孝　木室順六といへるは、ことし六十三歳になれるが、佐賀縣、杵島郡、六角村、大字東郷に住みて、人力車夫なり。母久しく不隨病にか

かりて、足腰もきかぬを、順六、老の身ながら家業をはげみて、わづかの賃金を得て、母の好むものをすゝめ、その暇にも看護おろそかならず。妻のみすも今年五十六歳なるが、夫をたすけ、病姑をいたはり、ともに二十年このかた、いさゝかもかはりなしといふ。されどこたび、金若干を賜りてはめられきといふ。感ずべし。

●孝子　年少くて、よく父母につかふるは、多くきこゆれども、かゝるはまれなり。茨城縣、東茨城郡、渡里村に住める士族金澤甚左衞門といへるは、今年五十一歳なり。去し明治六年母を失ひ、後その十六年といふより、母病にふせるを、貧しきが中にも、よく看護怠らず。その母遂に二十八年中にみうせつるが、十三年がほど一日の如くなりしかど、至孝の聞え高く、縣廳にまで聞えて、これもこのほど金子賞狀とを賜りて、はめられしといふ。

●琉球の孝貞婦　沖繩縣下島尻郡鳥島村國吉樽の妻、糸數うたといふは、十七歳の時吉樽の許に嫁ぎしなるが、吉樽は洗ふが如き貧家にして、夫婦は元より、年老いたる舅姑の衣食さへ意のまゝにはならぬほどなり。資性至孝のうたは痛く之を憂ひ、己れが家實より持て來つる纔かばかりの衣服も、殘らず兩親に供給し、夫と共に刻苦勤儉、只管家道の挽回に心を盡し居りしが、不幸にして、其の後幾程もなく、夫吉樽は病死せしを以て、それよりは、一層心を孝養に用ゐ、傍ら、子女の鞠育に從事するうち、不幸を重ねて、姑も、亦重き病の床につきけり。さなきだに、不如意がちなる手元の、いよいよ不如意を加ふれども、うたは更に撓む色なく、日夜寢食を忘れて、看護に手を竭し居る事茲に二十餘年、其

の操行實に全縣下に比を見ざる處なりと云ふ。依り奈良原前縣知事は、去月十七日、褒狀並に金五圓を下賜せりと。聖恩の余德とは申しながら、とはくはなれし島國にまで、斯る孝貞なる婦女を出すとは、誠に慶事とこそいふべけれ。

●看護婦生徒卒業證書授與式　日本赤十字社病院にては、去月廿二日第九回救護看護婦生徒七名に、卒業證書授與式を執行せり。當日は、副社長花房男爵、病院長橋本男爵以下本社及病院幹事其他看護婦養成掛員等、並に看護婦養成委員長鍋島侯爵夫人を始め、同委員並に篤志看護婦人會幹事の貴夫人數名臨席す。篤志看護婦人會幹事長彰仁親王妃殿下御不例のため御臨場あらせられざるを以て、鍋島侯爵夫人　殿下の御諭旨を代讀せり。了つて病院長卒業證書を授與し、次に副社長將來の心得方に付演說し、卒業生徒惣代の答辭ありて此の式を終り、更に第二回救集準備看護人生徒二十名、及び第十三回救集看護婦生徒四十名の入學式を擧行す。此男女兩生徒に對し、副社長は入學以後の心得方を懇諭して式を畢れり。

●婦人手藝品博覽會の出品奬勵　京都の婦人手藝品博覽會事務所にては舊臘十六日、同市內各組合組長、及頭取並に五二會各種部長を招待し、博覽協會幹事及び京都府第五課長も出席し、幹事は、本年四月十一日より、同會場に於て、第一回婦人手藝品博覽會を開設するに付、充分區域を廣くし、婦人手藝の奬勵を爲すべき旨趣を談話し、出品の奬勵に就き贊同を求めたるが、何れも之を承諾したる上、各々非常の奮起を以て盡力する事を約し、各商工組合より頭取部長組長等の外に一名乃至二名の委員を囑

托する事に決し、名譽總裁には、皇族の妃殿下を御推撰申上げ、會長副會長名譽員等は各華族の夫人に囑托し、會務總長には三井八郎次郎氏を、評議員幹事會計委員は博覽協會の評議員幹事會計員に兼任せしむる事となしたり。尚、參考品として出品すべき押繪剪綵は、三井家、淸水半兵衞、西村妙應等の人々より既に出品を承諾したりとぞ。又其外參考品となるべき物品も、各專門家より續々出品すべき摸樣ありといふ。

●音樂家懇話會　我が邦音樂の萎微振はざるは、必ずしも罪を時勢に歸す可からず。全く音樂家間に、和同の意志を缺くこと其最大原因なりとて、東儀季治、菊間義淸、坂部行三郎等の諸氏主唱となり、先づ音樂家懇話會といふを起す計畫をすときく。

●京都美術協會の懸賞圖案　京都美術協會に於ては、本年四月一日より、新古美術展覽會を開き、各種の懸賞圖案を募集するといふ。其設題左の如し。

○彫刻　大置物○陶磁器　香合　形式○七寶　水次　形式○漆器　書棚　形式○金屬器　釣香爐　形式○織物　女帶　縱摸樣○繡　中襟摸樣○染物　初生着摸樣○各種工藝品　机　形式　同　提盒新式

右は本年三月十日迄に募集して會場に陳列し、褒賞を與ふるもの丶由なるが、從來圖案を出すものは、其立方形のものを描き、寸法等を記せざるものあり、然るに、今回募集の品は、尤も寸法を要し、前後面左右側等備はらざるものは、圖案の價値なしとして、採用せざる事に取極めしといふ。

●白耳義の公立割烹及び裁縫學校　官命を帶びし敎育制度調査の爲め、歐洲各國を巡廻したる英國文部書記官は、近頃歐洲各國の學生を比較したる一覽表を公にせり、同書記官の觀察に據れば、白耳義の家政女學校は、此種の學校中最も完全なるものなり。

同國に於ては、夥多の勞働者を有する市府には、到る處公費を以て維持する家政女學校の設わらざるはなし。蓋、勞働者の家族に屬する女子に取ては、概して家政の事を習熟するの機會甚だ少きを常とすればなり。同國の公立割烹學校に於て、女子は、一法半(我が國貨三十錢)にて六人分の晝食を調理するを得。而も、之に使用する材料は、季節の食品より成らざるはなし、概して富裕なる家政を標準とする他國の割烹學校と、其趣を異にする白耳義の同學校は、勞働者社會の經濟上の狀態に大影響を及すべきものなり、何となれば、此の如くにして、將來の主婦たるべき女子をして、精確に一家の生活費を計算し得ることに習熟せしむればなり。又同國の裁縫學校も、右の割烹學校と同樣、賃金を目的とし、總て、華美なる手工の如きは之を除き、専ら女子をして必要なる襯衣類幷に單純なる室內、及び外出用衣服を調製し得せしむるを主とするものなりと云へり。

●飲食の心得　小兒などにも、徐に飲食せしむべし。滋養多きものを、急遽に食らんよりは、粗食にても徐によく咀嚼して喰ふには若じ。さて冷食は、溫食に比ぶれば、消化しやすからず。胃の溫度は三十八度をつねとすれど、食物の溫度も、これと同じからんをよしとすべし。

●生蕃の月に對する觀念　此程、臺灣に在る某氏、生蕃の月に對する觀念を、左の如く說けり。

一、北方なる「アタイヤル」乃ち普通北蕃と稱する種族は月中に見ゆる黑斑を以て一匹の猿が桃の木の實を採らんとしつゝある狀態なりと爲せり

二、南方に進で普通南番と稱する種族の中『ツァオ』と稱する一群は月中に見ゆる黑影は兩個の

兄弟なる小兒の遊び居る様なり而して兄の名をリシイウシイ弟の名をオポシイと云ひ居れるとなり

三、更に南方に進みて「ツアリセン」乃ち支那人の所謂傀儡番に至れる月は女性なり滿月の時には月經あるか故にカラリといふ黒布にて裸體を蔽ふ月中の黒影は乃ち其の黒布なりとなせり

四、又元と臺灣の西部平野に住み今は熟番として認めらるゝ「ペポ」の或る一群は月中の黒斑はペポの小兒の死體なり曾て或るペポ只だ一人の男子ありしが不幸にも生番の爲めに殺されたりしかば其父母は之を悲しみ其死体を月中に保存して常に眺めつゝ自ら慰み居るものなりと。

●勞動の効力　　歐洲丁抹に於ける郵便脚夫は、歐洲の他の郵便脚夫に比して、屢々地方に於ける長き道程を歩かざる可からず。されど、如何なる風雨寒暑にも係らず、一日に多くの里程を歩行するを常とせり。かくの如き辛勞は、誰人も欲せざる所なるべけれども、此國にては、爭ふて脚夫たらん事を希望するもの多し。蓋、此國の脚夫となれるものは、大にその健康を回復すると共に、肺病患者の如きも、脚夫となる時は、追々快復するを常とするを以てなりといふ。之に依て見るに、肺病其他の虚弱症に對する療法は、風雨に暴され困難と闘ふて勞働するを最良とすと。

●師範學校女子部卒業生　　大谷おやめといへるは、備後福山にて娼妓を業とすと、きゝて思はず筆をなげうちつ。たゞあきるゝ外はなし。

●婦徳會　　大阪新町にて、藝娼妓をあつめて、裁縫、習字、生花、抹茶、等の諸課を講習せしめしが、

去月廿二日卒業證書授與式をせり。學業優等にて賞を得たるもありといふ。其の賤しくて、爪はじきもしつべきは今更いはじ。身はいやしくとも、ほとほとに婦德を修めて、心に高くもてかし。賤しとて、かなしく日本に生れたるを。

●明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩　こは、是れ曾て屢々本誌上に於て諸嬢に紹介せし、彼の名高き瓜生岩女の畢生を詳叙せし書なり。一たび此の書を讀まば、貪婦も猶廉に、懦夫も猶起つべし。（東京築地二丁目廿一番地博聞館出版）

●本誌の附錄

龜山天皇の
大御歌
『たつのゐるはまのまさこのかすよりもひさしかるへききみかみよかな』の御宸翰及
詠松影浮水和謌
土御門天皇の
大御歌
『いけ水のきよくもすめるわかやとにまつもちとせのかけうつすなり』の御宸翰は西京嵯峨大覺寺の藏にして
明正天皇の
大御歌
『としことに生そふ竹の世々をへてかはらぬ色をたれとかはみむ』の御宸翰は西京栗田口青蓮院の藏
櫻町天皇の
大御歌
詠南枝暖待鶯和歌
『をくるまのさすかたに咲花をとへみやまのきりにむせふうくひす』の御宸翰は、西京鷹司家の藏する處なり。

●女鑑月並雜題

一月廿日	歌……春曙	文……習慣	一月十日〆切
二月五日	歌……池氷	文……希望	一月廿五日〆切
二月廿日	歌……若草	文……盆梅	二月十日〆切
三月五日	歌……雛祭	文……深山櫻	二月廿五日〆切
三月廿日	歌……蛙	文……海人	三月十日〆切



教の庭

一月五日兼題　隣家梅

天　牛込區原町三丁目廿五番地　大河内長戸子

梅か香のもとはと見れは垣ひと重
となりのにはの木末なりけり

地　松山市一番町　宇高まつ子

まとちかき隣のうめのさきしより
こゝろは垣をこえぬひそなき

人　豊前國小倉町大字紺屋町　下元茂登子

えたしけに隣のうめの香そかよふ
主のこゝろもかゝらましかは

人　愛媛縣松山市本町四丁目四拾九番戸　重松たか子

なか垣は人めはかりのへたてにて
えたしく匂ふうめのはつはな

秀逸（十七首）

へたてなく匂へるみれはうめの花
垣ゆふひとにならはさるらん　龜井梅子

となりとて朝な夕なにしたしめは
うめか香さへもへたてさり鳧　名取正代子

かをりくるとなりの庭の梅かかは
このなかかきもへたてさり鳧　稻田松枝子

中垣のへたてはわれとへたてなき
となりのぬしに習ふうめか香　小澤ゑん子

鶯とけふはならなん我かやとの
となりにうめの花のさけれは　佐久間八重子

春風のにほふとみれはなかかきの
かなたにさけり八重梅のはな　寺田まさ子

うくひすの初音聞んとたりたては
となりの梅はほゝゑみにけり　彦坂たか子

香はかりは我にもゆるせうめの花
へたての垣はよしやありとも　石原庸子

中垣のへたてありともわれもはねす
となりの梅のにほふさかりは　永井さい子

おのづからかよふぞうれし中垣の
となりにさけるうめのおひかせ　加納きく子

かきこしにそれとみえねと梅の花　にほひはかりはかくれさり鳧　岡田陽子

梅さけは香のかよひ來てなか垣も　へたてとゆふは名のみなり鳧　野中あさ子

隔てなきむつひを梅も志りにけむ　まかきを越えて薫り來にけり　森こと子

梅の花さきてかをれはなかかきの　へたてありとも思はさりけり　田代艶子

わが家のうめならなくに越えて　にほふもかりもなつかしき哉　澤田春子

鶯の初ねうれしと出てみれは　となりの梅はさきそめにけり　高橋ちん子

宿ちかくなくうくひすに驚きて　見れはとなりの梅さきにけり　土肥仙子

（以下原稿到着順）

なか垣のほかとはみれとうめのはな　にほひはひさをへたてさりけり　横田安子

人ならはとかめやすらんなかかきの　へたてをこえてかよふうめかゝ　内田繁子

なかかきの外に立てさもへたてなき　あなたこなたにかをるむめか香　森田蝶子

はるきぬとゝなりの梅にさそはれて　わかやとにしもうくひすのなく　綿野りき子

ところせき庭をへたてゝにほふかな　きみかゝきねのしらうめのはな　西方てい子

かなかきのそとなるうめやさきにけん　けさきゝそめつうくひすのこゑ　志岐榮子

けふもまたとなりの梅のはなの香に　たもとひかれてあそひくらしつ　本郷賤子

一もとのとなりの梅はさきそめて　けふもひと日をなかめくらしつ　本郷少女子

わかやとのとなりの小梅さきぬらし　かきのひまもろかせいほろなり　西艶子

花かめにさしてやめてむとなりより　なりておこせろうめのひとえた　稲田秀子

のとかなる風のまにくにほふかな　かきねへたつるくれなゐのうめ　大條和久利子

こち風はけさわかやとにかをるなり　となりのむめやさかりなるらん　岡澤千鶴子

梅かゝたふろへにはにおりたては　うらやましくもよそにさくなり　磯野こと子

中かきのあなたにさけるうきのはな　かなりなたにもわかものとせむ　磯野たま子

梅のはなかきもへたてすかなりきて　となりにさけとうれしかりけり　村松まこと子

八重垣はへたてたれともわかやとの
れやまてに匂ふむめのはつはな　赤羽　わかへ子

中かきをもれくるかせににほふかな
となりのうめのはなさきしより　小野　志やう子

さきいてし梅のかをりはへたてなく
かきねこしにもに匂ひきにけり　小野　あき子

つくろはてほころひかゝる垣の外に
ふりをもしろきうめのはつはな　田中　ゑん子

よそなから眞垣のせきはへたつれと、
に匂ひはかよふむめのはつはな　木村　きく子

かき一重となりのにはに咲きぬらん
はなきやともうめの香そする　陶山　孝子

はるかせにけさるそはれて梅か香は
にはのかきねもへたてさりけり　諸井　貞子

となりより垣もるかせのかよひきて
まなびのまとににほふうめか香　佐々　紋子

なかかきのやれ間をこえし一枝にも
咲けるはられしうめのはつはな　三嶋　みさを子

なかかきにいろこそみえね梅のはな
に匂ひはえこそへたてさりけれ　庄司　まつ子

ふくかせににほふ梅かかとめゆけは
はなはとなりのゝきはなりけり　羽田　三緒子

さきいてし梅のはつはなみえねとも
かのみはかきもへたてさりけり　河田　いし子

なかゝきのへたてはあれと梅かかも
なくうくひすのこゑもかをれり　河田　ふく子

匂ふかをいつこと見れはうしろべに
となりのうめは匂ゝゑみてけり　星野　利子

かきこしにふきくる風もなつかしな
となりのうめのほころひてより　田邊　照子

うくひすのこゑにねさめて庭みれは
に匂ふとなりのうめのはつはな　藤島　英子

花のいろかきねにさへて見えねとも
さきしもしるくにほふうめが香　輕部　[illegible]子

中かきのあなたはいかなるうめの花
にほひをそてにうつしてしかな　織田　きみ子

芦かきのへたてはあれとむつましく
かよふもゆかしうめのしたかせ　土岐　幾子

中かきのよしやありともひさしとの
うめのかをりはへたてさりけり　土岐　よれ子

うめの花たちへたてたるなかかきの
ひまよりもれよにほひはかりは　中島　松子

うくひすの羽かせに着きかをかけは
うめはとなりのものとしもなし　奥野　秀子

いつの間にとなりの梅や咲きぬらむ
かせのまに〳〵香ににほふなり　名取　よし子

きのふけふとなりの梅の咲きそめて
はなきやとも香ににほふなり　名取　千代子

咲くうめのたち枝は垣に見ゆれども
へたてぬ香こそうれしかりけれ　坂田きみ子

梅かゝはいつくと見れはしたしくも
となりののきにさけるなりけり　吉田三千代子

すみかへて見まほしきかな中かきの
となりのにはのうめのさかりは　久間春子

を離のとに梅かをるなりうくひすの
來なくとなりのはな咲きぬらん　小川愛子

我かやとのかきねこしにもふたつみつ
ほころひそめしうめそゆかしき　戸塚誠子

柴かきをへたてゝすめとへたてなく
かよふはうめのかをりなりけり　吾妻近子

香くはしきとなりの梅のさきそめて
よそのものともおほゝさりけり　柳田里子

よそにさへうれしき物をとなりなる
うめのあるしやなにこゝちせむ　諸井久良子

うれしくも東風ふく每にとなりなる
うめのにほひをはこひくるかな　舘脇ます子

東風ふくにつけてうれしく匂ふなり
となりのうめのはなやさくらむ　中桐杏子

なりくにかをれる窓のうめか香は
よそのさかりとしられけるかな　木村みつ子

やれかきもつくろはぬこそ嬉しけれ
となりにみゆるうめのはつ花　池谷富子

たゝすみてかそふるゆひも二つ三つ
となりのうめの咲にけるかな　小曾根しう子

となりなるまかきのもとにさく梅の
かせのまにくにかをるゆかしさ　尼子千代子

花の香はなかゝきこゆてかをりきぬ
となりのにはにうめさきしより　松枝譽子

中かきにはなのすかたはへたつれと
ふきくるかせはうめの香そする　松浦琴子

芦かきのとなりのうめのはなさかり
うくひすさへもへたてさりけり　西川須子

中かきはよしへたつとも香にめてゝ
よそにみましやむめのはつはな　玉井隆子

あしかきのよそにさけとも梅のはな
かをりはかりはへたてさりけり　藤村たみ子

すきかきのへたてはあれと我か庭に
となりのうめはたゆすに匂へり　磯部志う子

柴のとをおしあけかたにかをるなり
となりのうめやさきそめにけん　佐山幾子

我かやとのまかきの雪のかをるまて
となりのにはのうめにほふなり　澁谷いく子

咲きにほふ梅はかきねをへたつれと
へたてぬ香こそうれしかりけれ　岸せつ子

となりには梅咲きにけりふくかせに
ならぬはなの香をやめてなん　岸せい子

春たてはそてにそかをるうめのはな
　まかきのそとにさきいつれとも
河村鶴子

さきいてゝうらやましくも垣こしに
　さしたつ日よりに匂ふうめか香
金森さし子

隔てにとゆひしまかきのひまもれて
　となりのうめも香にに匂ふなり
畠山香代子

中がきにいろはみねれどうめのはな
　かこそはやどをさだてざりけれ
長島英子

となりなるかきねのもとに咲く梅は
　はなもに匂ひもへたてざりけり
泉さい子

なかかきのひとへはかりな隔てにて
　かをりゆかしくに匂ふうめかな
泉久貝子

うくひすの木つたひて鳴く声きけは
　となりのうめははやききぬらし
泉しつ子

我か庭もはる来にけりなあしかきの
　となりのうめのはなのに匂ひに
泉なつ子

となりには梅さきけりなあさゆふに
　まとの戸ちかくはなのがそする
瀧加代子

垣ひとへへだつるやどのうめの花
　かをりくるなりかぜのまに〳〵
石井英子

ゆひわたすかきねのよそのうめの花
　へたてもあへすかをるのどけさ
白井さな子

さきに匂ふとなりの梅はなかかきの
　へたてもあらてかをるうれしさ
白井さま子

吹く風もけさかをるなりなかゝきの
　となりさかひにさけるうめか枝
吉川くに子

かきこしに梅は咲けどもへたてなく
　そのはなのかをおくるうれしさ
澤田俊子

かきこしにとなりの梅はに匂へとも
　めつるこゝろはへたてざりけり
吉川禮子

ふき送るかせにたくひて梅か香は
　となりへたてすに匂ふなりけり
白井玉子

かきこしにとなりの庭にさきなから
　に匂ひへたてぬうめもありけり
遠藤錦子

かきこしのとなりのにはに梅さきぬ
　風にに匂ひなへておこしつゝ
小川金子

わかものと植ゑしにあらぬ梅のはな
　なかかきこねてこなたにそさく
畠山みち子

なかかきのさかひはあれとうめの花
　なつかしきまてかをりきにけり
松原常子

わかやともさかりは人のとひにけり
　うめのあるしはとなりなれとも
楢精子

なかかきのとなりの梅のさきしより
　わかやとさへもひとのとひくる
中島房子

なつかしく風かをるなりわかやとの
　まかきのよそにうめやさくらん
芝田源子

なかかきのあなたに梅はさきぬれと
　へたてぬものはに匂ひなりけり
越山野子

なつかしく風もかをりてなかかきの
となりのやとのうめやさくらん　長島綾子

吹く風のさそふまに〳〵かをるなり
まかきとなりの八重うめのはな　小松不士子

なか〳〵にみえぬそうれし梅のはな
かきをこえくるかせのかをりて　細川ますゑ子

なかかきのあなたに匂ふうめのはな
かせにたくひてかをりくるなり　日吉あさ子

なかゝきのとなりの梅のはなのかに
こゝろはゆきてならぬひそなき　小野田のぶ子

はしゐしてとなりの梅をなかむれは
はなもこなたにむかひかほなる　江口さみの子

まとちかく咲てきぬれはおなしくは
となりのうめといはてみてしか　小金丸苗子

あしかきに花はつゝめとにほふ香の
かをるはかりはつゝまさりけり　淡路花枝子

むつましきとなりにあれはさきにほふ
梅か香さへもへたてさりけり　濱田直子

かきこしの我か袖まてもとなりなる
うめのかをりのしみてけるかな　林久子

かきひとへとなりのにはの梅のはな
ふくはるかせににほひけるかな　中村適子

かくはしきかに誘はれて出てみれは
はやもとなりのむめはさきけり　中村唱子

さきそめしとなりの梅はなかゝきの
へたてもあらぬ香にそにほへる　武田粲子

あき風は香をおくりけるなかかきの
となりゆかしきうめのはつはな　佐々小琴子

ひと枝はわかものかほにゝほひけり
なかかき越えしうめのはつはな　佐々有鄰子

うめの花さかりしられてはるかせは
となりへたてす香ににほひぬる　酒井小谷子

春かせのゆかしくおくるうめかかは
ならぶのきはのひと木なるらん　徳永萬壽子

中かきのへたてはあれとへたてなく
かをるとなりのそのゝうめかか　日高かす子

わか庭に枝さしいてゝさくうめは
となりのやとのはなとしもなし　白石梅子

中かきをこえてにほへるうめか枝は
へたてぬともとしりてなるらん　今村賴子

いろみえぬとなりの梅はぬはたまの
よるるやかにもかをりけるかな　大竹治子

あさ日さすまとのさうしにうつり兌
となりのにはのうめのこすゑは　遠山清子

ころもぬふ手はさし留てほころひし
となりのうめのかすをよみつゝ　福木利家子

中かきのうめのひとえたわかにはに
さしいてなからはなさきにけり　遠山ひて子

ふくかせにはならぬかなり隔くなり
まかきへたてゝうめやさくらし　浦井淸子

なかかきをへたてゝさけと梅のはな
たかきかほりはへたてさりけり　浦井豐子

へたてなきとなりの梅か香をとめて
けふもわけ見ん千代のはつはな　西村なほ子

中かきのへたてはあれとうめのはな
香はとなりなききのふけふかな　小林ふち子

かきこしにうくひす來なく聲すなり
となりのうめのはなさきしより　樋野龍子

あさな〳〵となりのむめのはなの香に
なれてや來ならうくひすのこゑ　矢口さら子

さきそめしとなりの梅のにほひより
おもはぬひとに問はれけるかな　師　を子

わかやとのかきのそなたにさく梅の
かをりはかりはへたてさりけり　寺田と子

朝東風のかをると見れはめさましく
となりのうめのはな咲きにけり　柴田よね子

軒ならふとなりのにはのかきつより
こほれてにほふうめのはつはな　屋摩高繁子

昨日まてつほみなりけりとなりやの
わかきのうめのはなや咲きけん　宍澤志津子

こそよりはことしは花そまさりける
かきまへたつるとなりやのうめ　鈴木はな子

中かきにいろは見ねれとかくはしき
うめのにほひはかくれさりけり　福原藍子

垣越しに咲けるとなりのうめか香に
とざすも惜しきたそかれのころ　堀内敏子

並ひすむちきり志りてやなつかしく
はるつけかほにうめかをるらん　持塚桃枝子

なかかきのそとにほへと梅のはな
へたてぬ香こそうれしかりけれ　川部かう子

さきにほふ花のすかたはみねれとも
かをりはかきをへたてさりけり　池田とも子

うくひすにおとろかされて見出せは
となりのうめはほころびにけり　松岡濱子

かをりさへ隔てぬかきのうめにまた
ゆかしさそふるうくひすのこゑ　德山志げ子

へたてなくかよふとなりの梅かかに
はなきやともはるをしるかな　服部かつみ子

へなてんとゆひし垣にもあたなれや
こえてそかをるうめのにほひは　林文子

かきまより志るくかをれる梅か香は
となりのものとおもはさりけり　沼越むら子

ふくかせにかをるも志るし梅のはな
となりのにはにけさやさきけむ　平尾志げ子

咲くはなは垣根ひとへをへたつれと
かせのかをるにうめとしらるゝ　井原永子

へたてなくさなりの梅はかをるなり
ましはろみちをしれさなるらん　井原銓子

手折んと香をしるへにて尋ぬれは
かき根へたつるさなりなりけり　高松貞子

垣こしにこなたにかをるうめのはな
さなりのまさきおもはさりけり　高橋たか子

妻ごとのれをなつかしみ庭にいでゝ
さなりのうめのはなを見しかな　青村ふて子

ふく風のまに〳〵かほるはなの香は
となりのにはにうめやさくらん　岩野うら子

ひともとは垣根のよそにへたつれと
へたてすに匂ふうめのはなかな　高橋かれ子

垣ひと重となれるやどのうめのはな
さきにけらしなに匂ひゆかしく　高橋いさ子

梅のはなかほれるかさをとめゆけは
さなりのこすゑさきいてにけり　鷹取磯子

中かきのへたてをもれてさきに匂ふ
うめのはなこそうれしかりけれ　鷹取磯子

かき近きさなりのむめやさきぬらん
ふみ讀むまどの今朝かをるなり　岡澤倫子

中かきのひまもるかせにさそはれて
わかふるそてに匂ふむめかか　嘉悦捉子

中かきのへたてをこゑてさなりより
ふみよむまとにかよふうめか香　仁保志磨子

人しれすかよひくるなりわかやれに
となれるやとののきのうめか香　尾田福子

うなゐ子か手習ふまどにかをるなり
さなりののきにさけるうめか香　三浦鳩子

垣一重へたてはあれさに匂ふかな
いつさきにけんうめのはつはな　武藤いれ子

なかゝきのへたてしまゝに咲く梅の
はなは見ねすて香こそに匂へれ　壺井みき子

吹く風にたかおくるらんたね香は
まかきへたつるうめや咲くらし　水上澄子

なか垣のあなたにさけるうめなれと
はなのに匂ひはそてにこそしめ　山田埠子

かれてよりさなりをしめて住ひしは
この梅ありさしれはなりけり　成瀬あさ子

中垣のへたてはあれさうめか香は
さなりの物とおもはさりけり　田中光子

朝ゆふになく鶯のこゑすなり
さなりのにはのうめ咲きしより　阿保松子

うくひすにおくれしものさ出て見れは
かきの　かなたに匂ふうめか香　梅田まさ子

今朝ははやかをりも高く咲きいてぬ
まかきへたてしうめのひともと　岡田呑子

うさかりしさなりの妹かそてかきも
へたてすに匂ふうめのはなかな　飯塚みつほ子

かきこしにけさふく風のかをるなり
となりのうめやさき初めぬらん　高橋榮子

やよ子ともとなりにつけよ垣の外に
さし枝のうめのはなはさきぬと　谷口ふさ子

しめゆひしかきの内外もへたてなき
梅のかなりの高くもあるかな　谷口きた子

さきにほふ梅はとなりのはなれども
へたてぬものはかをりなりけり　由井なみ子

うくひすのこつたふ聲におき出て
となりのにはのうめを見しかな　白石梅子

我が庭になつかしきかのかをるなり
となりのうめにかぜやふくらん　近藤好子

むつましきとなりの庭のうめさきぬ
ひと枝こひてかめにさゝまし　上原能夫子

中がきのへたてはあれとへたてなき
うめのかをりぞうれしかりけり　齋藤喜代子

木の本になれたるよりもゆかしきは
なかがきこえてにほふうめがか　廣田さめ子

うくひすの啼すば志らしはるの日の
あさ日のはやきとなりやのうめ　白土咲子

我がまどのたけの葉こしに匂ふかな
となりのにはのうめのはつはな　蓬戸の露子

むつましきとなりの庭のうめなれは
はなもひとしほなつかしきかな　田代綾子

むつみあふ人のこゝろやくみにけん
かきまへたてぬうめにほふころ

東風吹けはとなりのかきの梅が香も
わがやのものとなりにけるかな　長島諒子

むつましき中をへたてぬなかがきに
にほひいてたるうめのはつはな　山里きつ子

うめの花さきにけらしなふくかせに
かこそしるけれかきごしにして　芦澤萩子

なか垣のかきねはゆきのきえなくに
はるをとなりのうめ咲きにけり　岩本德子

わがやどの松のみどりもふかく見ゆ
となりのうめのはなさきしより　原田たみ子

我がやどのむめの初はなまたきにて
となりののきにゝほふひとはた　中澤ちの子

わがやどのとなり隔つるませがきの
したがせゆるくうめがをりつゝ　佐々のり子

さかひなば隔つるかきもあるものを
へたてずにほふうめのはなが香　堀江みぎは子

窓ちかきとなりのまかきうめさきて
あさな〳〵のかぜかをるなり　伊倉田鶴子

さきにほふ梅はとなりのはなれども
かよふにほひぞうれしかりける　山本のぶ子

なか垣にすかたはそれとみへねども
うめはにほひをへたてざりけり　津守元子

ほのかにもとなりの梅のにほふかな
　ぬしにしられぬかぜやふくらむ　田中[illegible]子

へだてなきなかきなればには[illegible]せに
　にほひゆかしきうめのはなかな　山路月枝子

我か宿はとなりのうめのさきしより
　はなの香おくるかぜぞきたるゝ　大溪しけ子

芦がきにはなは見ねれどへだてなく
　かよふもうれしうめのおひかせ　下村さた子

昨日けふとなりのうめのおひかせに
　ばなゝきのきもうちかなりつゝ　下村たけを子

我やどになきうめがかいぶかしみ
　おきいでみればかきごしにさく　田部里子

あるしより我こそさきにみいてつれ
　かきこしにさくうめのかた枝は　河野文子

香ににほふ花にへたてはなかりけり
　となりのにはのうめのさかりは　青木春子

いさゆきてひと枝こはむまち〳〵し
　となりのうめはほころひにけり　花山春子

となりよりわがものがほに匂ふなり
　いまをさかりのうめのはつはな　右田藤子

うくひすの聲のやどりとなりてより
　となりのうめもたのまるゝかな　舗屋かなり子

となりなるうめさきしより我にはな
　ゆきかふそても香ににほふん　[illegible]すなほ子

手折りきてみまくほしきを垣こしに
　うらやましくもにほふうめかな　矢島みよ子

一月五日兼題

年の始に富士山を見て

千葉縣安房郡豐田村杏見　三幣みさを子

天

明らけく治る御代の、三十とせあまり一とせの、元旦といふに、何となう心もすが〳〵しう覺ねて、嬉しきまゝに、疾くおきいでゝ、若水に身を清め、髮かき上げつゝ、庭におり立ちて、初日の影を仰ぎまつり、さて後に、千代田の大宮を遙拜し奉り、大君の御代萬歳をことほげど、いづこともなく、あしたづの千代よぶ聲の、二こゑ三こゑきこえたる、いとめでたしや。屠蘇齒固なども、例の事どもなしをへて、書齋はき清め、新玉の年の始のよごと、一言かき試みむやと、障子おしひらきて、外ものかた見出せど、一夜の隔なれども、空名殘なう晴れ渡りて、箱根足柄の山々、ほのかに打ち霞みて、雲井にそゝる富士のねの姿は、去年に變らねど、初日の影うらゝかに、高峯の雪にてりそひて、自太平の象あらはれぬるで

そ、いと〳〵めでたき限なりけれ。あはれこの山よ、天地のはじめより、中空高く聳えて、その形のめでたきは、いふも更なり、高峯の雪は、水無月の照る日にさへ、消ゆる時なければ、神代ながらのものならむかし。さればにや、群山四方に立ち重りて、さながら朝拜するにぞ似たりける。されば昔より皇御國の鎭めの山といひて、雨の晨、月の夕に、變りゆくそのさま〴〵を、歌によみ、詩に吟し、文にあやなし、繪にものして、いと高く貴きものに稱へて、歌聖山邊赤人蟲麿等をして、飛鳥も飛ものぼらず、天雲もいゆき憚りと、打ち誦せしめしも、げに内外の國々に、並なき名山なればなりけり。之をたとへていはむに、この山の高く美しき姿は、やがてわが國體の美なること、萬國に類なきを現はし、天津日嗣は、高峯の雪と共に、萬世ふとも絶ゆることなく、神代のまゝに榮えまさむかし。されば高麗唐を始として、ありとあらゆる外國々も、わが大君の御威稜をかしこみ、年毎になづきまつらむことは、むら山のよりて仕ふるが如けむ、と思ふにも、いと貴く見わたさるゝに、いにし年の末つ方、外國人もいかでかはとて、笑ひ罵りしスエズの運河を、事もなく打ち過ぎて、御國の界を、千歳のおもとに遺しゝ雄々しさも、やがて富士を名に負ふ軍ぶねの、いさをときけば、朝な夕なに、いとなづかしく、打ち向はれてなむ。

地

麹町區元園町一丁目六番地　白井とな子

軒の群雀の、人よりいとはやう、千代をことほぐ聲に、催されて、立ちかへる年の若水くまんと、まづ朝戸あくれば、ほの〴〵と明けゆく空ものどやかに、門ごとに松立てわたしたるけはひのめづらしう、曉の鐘の音さへ今朝はあらたまりぬる心地ぞすなる、れり立つ庭に、朝日かげはなやかにさして、常磐木の立ちならぶ木の間よりほのかに富士の高峯のいやたかく、そのもれる雪のいと妙にみゆるは、年立かへる今日の心には、また、無量の感を引きおこしぬ。そも此山の第一とよばるゝは、必しも高き故のみを以てにあらず。或は山々のかひよりのながめ、浦のながめ、湖水のながめ、原野のながめも、此山のかげをとゞむる所として絶景ならぬはあらじ。其の扇をさかしまにかけたるが如き形の、いづ方より

みるも同じ姿なるぞいともくしき。實に妙なる此山は、大御代の動きなき姿をさながら寫しいでたり。年月のかはりにつけて、昔ありきといふけむりこそたたね。妙なる姿はいつかはかはるべき。實にみづほの國の稱ある我が國民の心も此の山の姿のごとくいや高く、外國人にもほこりてしかな。此の年の始に新らしき心に富士のね、望めぞいよ／＼くすしく、其の姿實にたふときや。

人

横濱山手フェイス女學校　松岡濱子

豊坂昇る朝日の影さへ、新らしき心地する、年の始のこのあした、うごきなき富士の高根を、うち仰きたるは、清けくもまた、うれしき心地こそすれ。そも／＼この山の形は、外國かけてたくひなく、そがいたゞきにつもれる雪は神代のまゝのものこそあるべき。うべな／＼其の形のたぐひなきは、吾皇國いひとり外國にまさりて、君と臣との道明らかにうるはしく、定まれるににたり。また其いたゞきにつもれる雪は、吾大君の御統の、いやつぎ／＼にさかゆましまし、かけまくもかしこき大御神の、あともかはらせたまはぬににたり。實にやげにこの山ぞかりめでたかるはあらじ。あきつしま根の民くさはわれなしれもひに不二とうたひ、富士と稱さて、ゆるぎなき、君が代の萬代かけて祝ふなるべし。

秀逸（二章）

林　久子

年の始の日影はなやかにさしのぼれば、人の心もおのつからのどかになり。見る物聞く物、めづらしき心地のせらるゝ中にも、昨日まで雲にうつみし富士のたかねの、初日のかけに光りそはりて、まはゆきはかりに見え渡る樣、げに動きなき世のしるしなりけりと、一しほ、たふとくあふかれてなん。

あら玉のとしの始のうれしさを
　つみかさねたる富士のしら雪

失名

年立ちかへるあした、雲にそびえたる、ふしの山を、あふぎ見つゝ、はしなくも、思ひれてしつ。實に一年のはかり事は、年の始とこそ聞つれ。されは、今より事をはかりなは、何事かならざらん。富士の姿にならひ、高うられもてなく君をうやまひ、親につ

かへ人に交り、うごかぬ心もてはけみつとめなは、高からすとも、身あやまちなからましか。

（以下原稿到着順）

四・艶子

年の始と云へば、萬の物、目新うあらたまりて、みゆるは、なべての世の人心なるべし。そが中にも、わきてさやかに打ち向はるゝものは、富士の高峰にこそ。ほの〳〵と明け渡り行く、東の空に、紅として、裾野は未明かれたるな、つもるみ雪の白妙に、雲井はるけく、そびへたるさま、實に云ひ知らぬ、けじきなりかし、打ち見るにも心すが〳〵しうなりぬるになむ。そも、千早振神代より、ゆるぎなく、年なば、峰の白雪とつもり來て、その妙にめでたき姿なば、世世の帝も、あれと見そなはし、樂しと稱へぬ人もなくて、富士山の名は、その峰よりも高く、世に知られつゝ、年なへて、なほ、かゝるめでたき、大御代にあひて、四方の海、八州の外の、ゆきき、しけきゝつれて、外國人も、しきしまの、大和の富士の高峰とて、またなきものにそ、打あふくなる、實に尊き神山の名も、むなしからずなん。

名取正代子

天の原いづる朝日も、年の始は、一きは、かゞやきわたり、うごきなき山も、いよゝ高くあふがるゝ心地ぞする。そも〳〵山といふ山はあれども、神代より世々なかされて動きなき、我が日本の富士の高嶺こそ、實に皇御國の姿にならへるみ山にはありけれ。されば外つ國の人さへ、誰かは、あふがざるものあらん。これただに、其の山の　しさのみにはあらで、其のかたちの、けだかくうるはしきは、實に似るものなしや。頂には白雪煌々としし朝日にかゞやきわたり、麓には年の貢のいと澤に、白雪むら〳〵と、外山なかけて棚引きわたる。かく雪雲のよそほひ棚引く毎に、其の景色のさま〳〵にかはりて、見れども見れど、あかぬ姿は、まことや、筆にも、繪にも、ねつくすべうもあらず。されば昔より、あるは歌に、或は文に、將何くれと、此の山をめでたゞへて、うごかぬ御代のためしにひき、さては、朝日に匂ふ雪の光は、御稜威の萬の國々にかゞやき渡るさまによそへなどしつゝ、ならびなき不二と、名に負ひけんも、實にことわりにこそ。

久間春子

夢に見るさへ、いみしき事に、いひ騷くめるな、まして、年立ちかへる初空に、仰ぎ見たるよ、一きほ粧こらしたる心地せられて、艶にのどやかに、ふくよかなる雪の姿の、にほひねならぬは、朝日の影の輝けはなるべし。赤人ぬしな始、幾千代かけて、今の世までも、言の葉に、もてはやせるも、うべなりけりな、かぐや姫の、奉りし種々な、燒せ給ひけんも、此の頃とや、下津岩根より、天雲高くそゝり立てれば、げに月宮にも、つゞく〳〵、生藥求めんとても、ろこし人の、まゐ來しも、此の山とや、日本の山路の國の、鎮めとも、います神かも、寶とも、なれる山かも、とうたはれきは、けによに類ひはなかるべし。何某の將軍の、他の國より、見出られし時の感、いかなりけん。彼の兄弟の心の嘻な、此の麓にて、晴されけん時の心、いかなりけん。のさかに動かぬ、此の姿は打ち向ひては、誰かは、雄々しき大倭心に、ならざらん。誰がは、麗しきみ國

ぶりに、ならざらん。只に、言のはの花の種はひとも、思ひすぐすは、此の山を見て、未此の山を、知らずとこそ、いふべけれ。されば敷島の大倭心を人間はゞ朝日に匂ふ大富士の山とも、いはまほしき心地せらるゝよ。山高き故に貴とに非ずとは、誰かいひけん。他の國には、猶高きもありと聞けど、皇國と共に、常磐に堅磐に、、かはる事なく、斯く取りよろひて、くしく、めでたき山は、よに又となきに、年の初空に、打向ひたるが嬉しくて、

山といふ山はあれども我國の
國の鎮めの大富士の山

外國に名だゝる山も我が國の
富士より見なば醜なるらん

小川あい子

あらたまの年の始めばかり、心のどやかに、樂しきはなし。はやう誰かれの君たち、麗はしく粧ひて、産土の神に詣て來まして、立ちより給ふがうれしくて、吾居まに伴ひ、何事をかして遊はん。昨日都の友のかたより、新版の道中双六とて、送りおこしたれば、これものしてんとてとう出て遊ぶ。誰の君は、かの關に、とゝめられ給ひ、かれの君は、もの忘れして、あとの驛まで、たちもどり給ひしなど、いひ罵る、いとをかし。幾度かもどり、いくたびか留りなどして、やう／＼ふりあて、上りたるは、東京の都なりけり。恐こくも、大君の千代田の宮の、御有樣を、うるはしく繪がきたるに、並み立つ松の梢越しに、のどやかなる朝日にはえて、大富士の雪白う、大空に聳えたるかた、尊としとも、めでたしとも、いはんかたなし。おくれたる人々は、あなうらやまし、君にははや都に、もうのぼりて、かゝるよきけしきに、うちむかひ給ふよなど、ねたみ給ふも、をかしきに、かゝるひな住の身は、まさしくみるべくもあらぬに、ゆくりなくも、早くふりあてゝ、うつしゑながら、このうるはしき、峯の姿に、打ちむかふことの、うれしかりければ、やがて

まさしくも向はゞいかに嬉紛に
見るさへ嬉し富士のしは山

常によき學の師として、親愛せる、女鑑の文題、おもひ出でて、かくなん。

西川順子

昨日まで、天霧におほはれし、富士高嶺の、けさはいとさやかに見渡さるゝも珍らしく、常に變らぬ姿も新まりたる年と共に、一しほかう／＼しくぞあふがるゝ。實にや、山の姿は變られど、かはるは人の身なりけり。なほ幼しとおもへるものゝ、いつしかおい、ありと思ひし人のいつかなき數に入りつゝ、「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」の歌いよ／＼深くぞ覺えらるゝ、變るは人の身のみかは、去歲の春、此の山に對ひし心は、今日の我が心にてはなかりけり。來む年は、はたいかに變り行くらし。我ながらたのまれず。日に月に進みゆく世の中に、たてるもの、この山の如く、神代のまゝにて、あれかしとは思はれども、清く秀でし姿こそ、心の鑑とはおもほゆれ。いかでこの後は、富士の嶺の動きなく、深き心もて、心とせまし。など思ひつゝ、あふげば、いつにかはらぬその姿に、又もやふりにし人の上さへ思はれてなむ。

年々になかむるわざはふりぬるを
神代ながらのゆきのふしのね

泉　さい子

富士てふ山はふるき、神代のむかしより、世にたくひなき山にぞありける。いにしへより賢人の歌によみ、文につくり、さつ國の人さへ、たゝへかしこみ仰けり。殊に、明けきこの大御代の、大恩の、露にうるほひて、四方、民草、生ひ繁り、下葉の、花さへ匂ひほころひて、うこきなき、世のためしなれば、この富士か根に千代の、れさしをこめて、たち榮ゆたり。あらたまの、年の、始に見わたせば、久方の、天津みそらの、白雲の、中にそひゆて、高根につもる志ら雪の、朝日に匂ふ色、ことにめでたし。げに日の本の國の光りもかくはしくあなさふさかりける、なかめにつれかしさなん。

白井さま子

仰げばたゞ一つ雲間に高く、むらがれる山々、いづらにか行きけん。朝霧、白雲のかゝれる如くに見ゆにし頃の、今は白きか上に白く、朝日にてらされて、いさまはゆし。それに映してか、たなびけるうす雲の種々の色に見ゆるは。あはれ、これ、わかしきさまの大和の人、群かれるしこ國民の上に、氣高き御稜威かゝやかせさの鑑にや。こと更に、うらくたる年の始の日影さともに、すみ渡る御空の上に、いや高くいや深よくも聳ゆたつは富士の高根にぞある。

江口　さみの子

あら玉の、としのはしめに、うちむかへは、朝日のかけに、匂ひわたれる、志ら雪の高れ、いさゝ、高く貴さき、姿そ、たくへんに、物なき、再數しまの、言のはも、今年よりは、はかなき、花紅葉の、見るめの情を、忍はて、かくこそ、よまめ、さそ、おもひなりぬる。末のよの、姿をのみ、よみ傳へても、何にかせん、我世のかきり。よみ味ひて、一日ても、の富士の、雄はかりも、遠しろく、よみいてたらんには、いかに、れしき、此の世のおもひいて、ならんかし。

田中ひろ子

一夜明けぬれば、去歲のけしきにひきかへて、いつくも同じう門毎に松立てつられ、日の御旗、打ちなびかせて、つきせぬ千代を、片山里も都もなべて祝ふべく、ことほぐべき、いさも目出たき吉き日なれは、姿もさもにさ、さく起きいでゝ、體をきよめ、もろくの神棚に神酒をさゝげ、あらひ米たてまつりて、なほやしろくに詣で、四方の景色を見渡せば、をさまれる御代のしろしか、初日の光いさ明らけく、雲にそびへし富士の高ねの雪景色、けふの豊けき大空に、雲さへ霧さへちりはかりもあらねば、常にもあらず、さやかに見出らるゝ、其の眺めは、天にも都のあるかさ疑はるるも、ひらけゆく御代のゆたけさ、あらはれて、またなくめでたし。

佐々有鄰子

去年の師走のころより、雪の山ささを立いでゝ、内日刺す、東の京のかたほさりに住しものから、新玉の年のはじめの、ほぎごとども、見聞きなれぬことのみ多かる中にも、ことに、ありしころは床上のかざりに富士の山の寫眞をかけおきて、見るものなりしが、立ちかへる今年のはつ空、たかく仰がるゝ高嶺は、いよいよ雪白く、目ばゆきばかり、そそり立ちぬる、其のすがたこそ、うつし畫は、さらなり、筆も、言の葉も、及びかたく、げにげに年のはつ空の、目を驚かすのみならで、心のそこをもあらひて、すがすがしうなん。

降田滿起子

あら玉の、年の始の曙に、見渡す富士の景色こそ、いさもく、め

でたけれ。うら／＼とさし昇る、初日の光りは、高ねにいたゞく、白雪にてりかゞやき、ふもとに、たなびく瑞雲は、君が大御代の、千年の色を、あらはして、のどかに打ちかすみたるさま、げに筆にも、言葉にも、つくしがたく、去年見しすがたに、變りたりとしもは、覺ねど、何となく、いや高く、いやうるはしう、日新しき心地して、

立ちかへる年の始にあふぎ見る
ふじはいよいよ高くもあるかな

あなめでた●之れやがて、神代の昔より、天の下外つ國々に、ひいでたる、我が大八州の國のすがた、千代に八千代に、万代までも、ことしへに、榮ね行く御代の、動きなき、ためしとこそ、見るべけれ。あなかしこきかも。

大竹治子

見渡すかぎり、白ききぬかけたらん様の遠の山にあらたまるはつひかげ、靑きみ空にかゝやきわたる白がねの如き芙蓉の峯に影さす様いと妙なり。かゝるうつくしき。様には、いかなる名畫も、よも及ぶまじ。また、外つ國にかゝるすがたは、ねあるまじ。あはれ御國のはらからよ、かの富士のねのいや高く、峯の白雪のいやきよき心もて、おのがわざ／＼を、つとめはげみ、名をとつ國にまで、とゞろかさんことをこそ心がくべけれ。年のはじめにふじの根をみて、いさゝかおもふことをかいつかく。

遠山ひて子

あら玉のさし立ちかへる、あしたといへは、きゝなれし、鳥の、聲も、いとゝはなやかにて、常はあさいがちなる、うなゐらも、またきにおきて、のゝしりまはるに、おのれも、やならふしとを起きいて、何くれと、あさのまうけともいとなむ程に、東の空の、やう／＼あからむに、匂ひそめたるけはひの、いとねんなるに、いでや初日の影を、をろがまんと、庭におりたては、かぎりなき、大空は、ちりはかりのくもたにもなく、打ちむかふ我が心さへ、晴れ渡りゆく心地のせられて、いと／＼うれしきに、ふとかなたをみいだせは空高くそびゆるふじのねの雪に、初日のかげの、光まはゆくさしそめたるけはひ、げに日の本の國の御光を、あふぐこゝちして、帋にもかきとゝめおかまほしうおもはれてなん。

うつしゑにみてたにいはふ富士のねを
さしたつそらにみるぞうれしき

西村なほ子

[illegible]りのつもりにし年は、昨日を限りにて、老も若きもあら玉の年のほぎこと、いひかはすなるけふ、となりぬ、何となう空のけしきはれわたり、おのも／＼花の袂をふりはへて、行きかふさまも賑はしうなん覺ゆる。そもけふは一とせの計りごとをなすべき時にあらずや。とおもふほとに折しも仰ぐみ空に聳ゆる、富士の嶺は白雪の姿ゆたかにすみわたるも尊しや。

石原庫子

新玉の年の始は、物みなあらたまりぬる心地して、見るもの聞くもののこと／＼くうらめづらしく覺ゆるこそいと愛たけれ●まして今日は、ちりばかりの雲もなく、空はれわたりて、初日のひかりうら／＼と、しるしのみはたにきらめきあひて、庭の小鳥さへ節おもしろうさへづりかはせば、なちの眺やいかならんと、南おもておしあけて、まづはるかに見渡せば、うれしやな、富士の高根は、白妙の雪の

はだへに新らしき霞の衣よそひつゝ、手にとるばかりうつくしう見ゆ。そのくすしきにほひ、優なるすがた、ねもいひしらず神さびて、此世のものともおもほえず、あなあはれあな尊しと、今更のやうに、ひたすら打ちあふがるゝ。げにや此の山、國はしも多にあれども、山はしもこゝらあれども、朝日さす我が日の本の、此の山にしくものなしと、我が國人も外つ國人も、遠き神世の昔よりかたりつぎ、いひつぎてぞ、めであふぐめれ。げに此の山こそ、我が大皇國の、みたからなれや、其の姿こそたをやめのみかゞみなれや、とすゝろに心ひかれて　ちむかふを、何かしくれがしの君の、よろこびまをしにとて、來　せしよと、なさなき人におどろかされてなん。

初日影にほ　もうれしふりさけて
かす富士の高根は

鈴木はる子

光陰は、矢よりも、はやくして、早けふは、しはすの、みそ日と、こそ、なりにけれ。こよひ一夜もとくおけぬらん、と、まつま、ほどなく、きこゆる、鷄の聲、いさと、淸らかに、曉告る、うれしさに、またき、起き、出てゝ、まづ、若水くまはやと、手桶片手に、かどに出てゝ、ながむるに、六つの花にて、野も山も白布もて、つゝめるが如く、塒を離るゝ、雀の千代〱、と、元旦を祝ふが如く、悅ぶが如し。遙に遠方を、見渡せば、今朝は、雲晴れ渡りて、富士の高根は、たゞ白砂に、姿をかへ、さながら白扇を、倒まに、かけたるが如し。古、山邊の赤人の

たごのうらにうちいでゝ見ればましろにぞ
富士の高根に雪はふりける

と詠ぜられしも、げに、さることなりけり。と思ひ出でられて、

福原蓮子

一夜あけぬれば、ほのぼのと長閑に霞む空の景色、百千鳥のさへづる聲も、千代〱と、年の初をことほぐたのしさ、久方の雲井に聳ゆる駿河なる、富士の高根を天の原、ふりさけ見れば、さし昇る朝日子の影うらゝかに、雪に映して白妙に光もいやまして、君が八千代の花と匂ふ床しさ。げに動かぬ、御代の姿なり、あなめでたし、鄙も都も榮行御代を、仰ぎ祝ふぞ、うれしきや

中田豐子

大御代の御惠は、いたらぬ隈なく、天ざかる鄙の境にも、長閑けき年のたちけるも限りなうめでたや。思へば此の年の始めの喜びこそは、萬代かけてつきまじうなむ、豐榮のぼる初日影仰ぎまつりて、空を見上ぐれば、あな〱ときよみ渡りて鳴く鷄の初聲もいと近う聞ゆたるは、諸共に年立つ今日を祝ふにやあるらんかし。家々に飜がへる日の御旗は、朝日にかゞやきつゝ、門毎に立ちならぶ松飾のさまの、いと〱うるはしくも珍らし。遠のあなたに、雲間まで聳ゆるは名たゝる富士の山なる。朝日に匂ふ富士の白雪の、いつのまにかくは積りたりけん、さながら水晶をもて造れるが如し。白扇懸倒東海天。とは實にさることにて、いにしへより詩に賦し、歌に詠みなどしつることの絕えせぬにこそ。さればこそ國人も、稀なる山といひつたへて、其の奇しきさまを賞でたきは、たぐふものもなしなどゝ、いたくほめそやすならん。

岡澤倫子

實に一年の中にも、正月一日ばかり、心のひらかなる日はあらじか

し。今朝しも新玉の年立ちかへりて、明治の三十一とせとなりたれは、いで初日出拜まんとて、つとめて起出でぬ。心からにや、万長閑けく覺ほて、やをら前なるそうじ打ち開らけば、まほに見ゆる富士が根も、今朝は殊更に物新なる心地して、去年より積もれる白雪も、めづらしく見ゆ。何方より望むとも、此の如き姿はかはらぬとかや。されは昔より、諾だくみが、富士の十二景三十六景なとこて、此處彼處よりうつし取りきとなん。又其名さへ不二と云ふ愆なりといふ。さて見る程とに初日まばゆくさし出でければ、

年の初めの日出たさほ、　朝日の影に富士が根も、
ひかり一入さしそひて、　わが大御代を祝ふなり。

岡田はる子

年浪のたちかへりたるけさのけはひは、ことかはり、鄙もひなもおしなべて門松の千代をへぬらむ綠のかげのうるはしく、こゝろなき少女子の、待にまちたりし、新玉のとしのはじめの今日ここそはなりけれ。千萬の家々にたてならべたる、日のみはだの輝きあへるいさましさ心のちりも消ほ失せぬ。野も山もみな初霞のあたらしき衣に、身をよそほひたらんやうなるけしきいとゆかし。なほをちこちと見渡せば、くもりなき天津み空には、初日のかげに、甲斐が峯に浮づる富士の高根の仄のかにさしいでゝ照り輝ひたるは、これぞ天が下なる千よろづの國より見るも、そのさまのかはりなく、たかくそびほてうごきなく、枝をならさぬ大みよの、千代のためし、わがすめらみくにの、うるはしきすがたなりかし。

山里ふづ子

あし引の山てふ山はあまたあれども、久方の空にそびゆる姿を見ては動なき我が日の本の國ぶりとたゝへられ、いたゞき白くつもれる雪の景色ながめては、ふづまれる御代の光とめでらるるぞ即ち不士の高峯なる。あはれ、外國の人も仰がむ。此の山に日毎向ひてすら、朝夕雲のたゞずまひに、さまかはる心地して、なかしきを、まいて、あら玉の年の初日に、ゆたけき君が大御代の光そはりて、輝きあへるそのさま、實にいひしらすなむ。

瀧澤萩子

あら玉の、年立ちかへりぬれば、物皆の、きはやかに、なり行く、にあさまだきより、鳴く鳥の聲も長閑に、ほぎ宿のおともとごろに、明けはなるれば、門ごとに千年をこむる、松竹に、千代の影そへ、うららかに、豐さかのぼる朝日のゑまひ、をちこち山もかすみたち、風になびかふ日のみ旗、かゝげて仰ぐ大空に高く貫く神さびて、富士が嶺は、天雲を蓋にするゑ、時じくにみ雪を降らゑ、劔の海を裾野にたゝへ、富士川をたぎち流す、山かけに龍やすむらん。頂に、神かましますん。天地の始めの時より、日の本の鎭となりて、遠永く、豐となれるみ山にこそ。其のゆきのかぎり、其の雲のよそほひ、けふの初つ日のてりあひたる、げに治まる御代のすがたになん。

佐々のり子

なやみなく降りつむ雪に富士は姿も見ほざりしを、あら玉の年たちかへる今朝は、旭のかげさへうらゝかに、いや榮ほ行く國の御末を祝ひて、日の丸の御旗の朝風にひるがへるさま、心うれしう見やるかなたに、千秋もゆるぎなき、富士の高嶺のはれやかに雲の外遠く聳ゆるゆゝしさよ。東の海にかはらぬかげは漂よはせつゝ、あはれたぐひなき不二の此の高峰、いさたふさし。

佐々敏子

新玉の年立つ、今朝となりぬれば、空も名殘なう、晴れ渡り、朝日の影、まばゆきまで、かゞやき、日の丸の、御旗、軒にひるがへり、かど毎に松竹たてゝ、君が御代のゆく末ながく、祝ふさま、うれしげなり。ふりつもる雪は、四時きゆることなき、富士の高根の、いさはれやかに、日かげ照りそふさま、恰かも、白扇をさかしまに、したるが如く、高くみそらに、聳ほて、我が日の本の、ほまれと共に、外つ國までも、かゞやくぞ、めでたけれ。

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

定價 金貳拾錢
郵稅 金四錢
郵劵代用一割增

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善悪の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

發行所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

國光社

生田目經德編

(六月二十日發賣)

標注 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれは雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもろの躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學び日用の消息に適用するはまことに必要のことゝなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさは益を得ること必大なるべし。

發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

十二月十六日發行

●定價金三十錢　●郵税金四錢　●郵券代用一割増　但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史嚴に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に處せらるべきかを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖も多くは教育者の注意を促すを目的とするものなれば此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に説き論されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖も針を持てる少女と雖も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目錄

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

十年四月日

本書は明治の女傑慈善の泰斗として有名なる瓜生岩女が其畢生七十三年間如何に偉大なる功績を擧げしかを叙せり

定價貳拾錢郵稅四錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 靜思館

大日本體育會々長陸軍大將野津伯爵題字
副會長貴族院議員丸山作樂君序文
全
陸軍憲兵大尉隈元實道先生著

三版 體育演武必携 全壹冊

定價貳拾錢郵稅貳錢郵券代用一割增

編中には左圖の如く一々圖解を附け又至極讀み易き文字を以て說き明したれば學校生徒にても其外誰にても之を讀まば劍術と柔術との奧意を詳く飲み込むこと容易なり



本書は劍術柔術の基本に加ふるに兵式號令を以てし先生が日常門生に訓練せらるゝ所のものを懇切に說明せられたるものなり故に本書を熟讀する時は場裡十年の苦行は僅々數句にして卒り速に豁達自在の域に至ることを得べし

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 靜思館

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

●本會賛議員は有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨　本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すへき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實践の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれは今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より差支なし●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月參拾錢束修參十錢●會則希望者は郵券貳錢を添て申込まれ

學科及び講師　演説せられたる者に係る●修身（女子修身談）細川華族女學校長が從來同校に於て教諭（禮法）佐方女子高等師範學校教諭●國語（國文）關根學習院教授（作歌）大口御歌所錄事（作文文法）今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史（日本歷史及萬國歷史）大森文學士●地理（日本地理萬國地理）喜田文學士（地文）脇水理學士●理科（物理化學）近藤工學士（博物）石川理學博士（生理衛生）未定●家事（家庭教育）三輪田高等女學校講師（家事經濟）後閑女子高等師範學校教諭（家事衛生）三宅醫學博士（小兒衛生）三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝、活花點茶）田邊東京女學館講師

附錄●史談下田華族女學校學監●小説、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答雜報雜錄

第二卷既に發行せり

東京市麴町區上手三番町二十八番地　**大日本女學會**

天つ日嗣の高御位は天地の共動きなく、皇國の御榮は、いや年のはに、榮にゆかんとあらたまの年のはしめのことほききこに申すまなん。

明治三十一年一月一日

國光社
社員一同

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	十錢	全國無遞送料	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢		
十二冊前金(半年分)	壹圓		

明治三十一年一月四日印刷
同年一月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 (電話番號本局八八) 國光社

米國製作
最新形

金着懷中時計

天賞堂特別注文新品到着



◎甲價五十五圓……廿一形無雙側中蓋付器械アンクル內切テンプ惣石爪石入
◎乙價四十五圓……全切テンプ爪石入
◎丙價三十八圓……全切テンプ爪石入
◎丁價三十三圓……全外テンプ爪石入
◎戊價二十五圓……全外テンプ爪石入
◎甲價三十五圓……十六形無雙側中蓋付器械アンクル內切テンプ惣石爪石入
◎乙價三十三圓……全切テンプ爪石入
◎丙價二十八圓……全切テンプ爪石入
◎丁價二十二圓……全切テンプ爪石入
◎戊價十五圓……全切テンプ爪石入
（市外遞送料金二十錢）

米國第一等時計製造會社ニ注文シテ製作セシメタル

天賞堂特別販賣の金着セ懷中時計ハ唯今到着シタリ其注文特色ノ要點ヲ擧クレバ

金質 普通ノ金着セ側ハ九金若クハ十金ナレ𪜈是ハ特ニ十四金ヲ用ヒタリ

彫刻 米國ニテ好評ヲ得タル摸樣圖形ノ中ニテ特ニ日本ニ適應スルモノヲ選ビテ彫刻セシメタリ

金色 十四金ノ延板ヲ以テ厚ク一面ニ包ミタレバ其種類ニヨリ五ケ年ヨリ三十ケ年迄ノ間ハ金色ノ光彩燦然タル保證ヲ附ケタリ

形狀 頗ル注意シテ圖案ヲ立テ且ツ携帶ノ便利ヲ專ニシタレバ其形狀体裁ハ通常米國製時計ノ如クニ不恰好ニアラズ

器械 代價ノ廉直ナルハ側ノ純金ニ非ザルガ故ナリ其器械ハ切天符爪石入ノ最良製作ナレバ時間ヲ示スニ遲速ナク寒暑ノ時候ニ感ズルヿ無シ

保證 製造會社ノ原保證アル上ニ天賞堂ノ保證ヲ添ヘテ二重ノ請合ヲナス者ナリ

右ハ特別注文金着セ時計ノ特色ナリ畢竟純金側ヲ用フルハ其高價ニ誇ルニ過キス外觀實用其他ニ於テ都テ異ナル所ナシ本堂ヲ眷顧ノ諸君願クハ早ク本堂若クハ出張所若クハ特約販賣店ニ就キ尊覽アリテ其實ニ然ルヿヲ知リ玉ヘ

御購求後三十日以內ハ原價返戻シ又ハ無割引他品交換等都テ本堂店則ニ準據ス

金着セ時計鎖 是モ新形特別注文品到着シタリ其特色ハ本文時計ニ同ジ

東京市京橋區尾張町二丁目、十六、十七、十八番地

時計及寶玉類
貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）

天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（東京國光社印刷部印刷）